

### 国際私法講義

佐々木, 茂三郎 / 黒川, 誠一郎

---

(出版者 / Publisher)

和佛法律学校

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

和佛法律学校講義録 / 和佛法律学校講義録

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

96

國  
松  
院  
完



0327

國際私法講義(卷一)目錄

緒言

第一節 國際法ノ定義	一
第二節 國際法ノ本源	五十一
第三節 國際公法ト國際私法トノ別	二十五
第一編 外國人身分論	二十八
第一章 佛國ニ於ケル外國人身分論	三十
第一節 外國人公權論	三十
第一款 總論	三十四
第二款 自然法の公權	三十二
第三款 政權即チ公民權	四十一
第二節 外國人私權論	四十八
第一款 總論	四十八

(目錄)

Table with 1 column and 6 rows. The text is mostly illegible due to blurring and bleed-through from the reverse side. Some characters are visible, including '表' (Table) and '第' (Number).

表
第
一
二
三
四

第二款 親屬權.....	五十六
第三款 財產權.....	六十三
第三節 外國人特待論.....	百二十二
第一款 國際條約.....	百二十四
第二款 住所ノ特許.....	百四十
第三款 治外法權.....	百四十八
第二章 各國法制汎論.....	百四十九
第一節 英美法.....	百六十四
第二節 歐洲大陸法.....	百六十七
第三節 回々救國法.....	百七十七
第一節 國際法ノ意義.....	

### 國際私法講義

本校講師 黒川誠一郎先生口述

本校々友 佐々木茂三郎君筆記

#### 第一回 緒言

緒言ヲ分テ三節トス第一節國際法ノ定義第二節國際法ノ本源第三節國際公法ト國際私法トノ別トス

#### 第一節 國際法ノ定義

余ノ本學科ヲ講スルヤ勉メテ原語ノ使用ヲ避ケ一ニ譯語ニ依リ講述センコトヲ期ス然レトモ玆ニ國際法ノ定義ヲ下タスニ當リ已ムヲ得ス先ツ二三原語ノ

(國際私法)

「ドロー、デジャヤ」

「ドロー、エントルナシヨナル」

右ノ語辭ヲ以テ適切ナリトスルヤ

疏義セサル可ラサルモノアリ  
佛蘭西ニ於テ國際法ノコトヲ「ドロー、デジャン」ト云ヒ又「ドロー、エントルナシヨナル」ト云フ此二箇ノ語辭タル通常差別ナク使用スト雖トモ其出所並ニ沿革ヲ考フルトキハ各相異ナル意義ヲ有スルカ故ニ宜シク之ヲ明ニシ以テ其錯誤ヲ避ケサルヘカラス

第一「ドロー、デジャン」ハ元羅馬人ノ所謂「ジュスゼンシヨム」ナル語ヲ直譯セルモノニシテ何レモ萬民ノ權利ト云フ義ナリ即チ一郡一國ノ人民ニ限り有スル權利ニ非ラスシテ周ク天下億衆ノ共有ス可キ權利ト云フコトナリ

第二「ドロー、エントルナシヨナル」ハ「ベンサム」氏以來英米ノ學者多ク之ヲ使用シテ近來佛法學者ニ於テモ之ヲ使用スル所トナレリ其義國ト國トノ間ノ法律ト云フコトナリ

右二語孰レカ最モ善ク其學科ニ適當スルヤト云フニ「ドロー、エントルナシヨナル」ノ語ノ適切ナルヤ言ヲ待タサルナリ佛蘭西ニ於テ第一語辭ヲ使用スル所以ハ古來ノ習慣ニシテ且ツ其本羅馬語ノ直譯ニ係ルヲ以テ蓋シ誤ナシト信シタ

ルニ由ルナラン然レトモ羅馬律ノ所謂「ジュスゼンシヨム」ト佛蘭人ノ所謂「ドロー、デジャン」ハ形相似テ其實異ナレリ「ジュスゼンシヨム」ハ現今吾人ノ講究スル國際法ノ意義ニアラス蓋シ羅馬人ノ傲慢不遜ナル外國人ヲ度外視シ羅馬民法ハ羅馬人民ニ非ラサレハ適用セスト稱シ外國人カ羅馬境上ニ來リ住スルモ決シテ之レニ民法上ノ權利ヲ附與セスト爲セリ然ルニ羅馬版圖ノ次第ニ廣カリ外國人ノ來ルコト月ニ益々多キヲ加フルニ及ヒ全ク之ヲ度外視スルニ忍ヒス之ニ與フルニ生活ニ缺ク可ラサル天然ノ權利即チ婚姻又ハ賣買ノ如キ權利ノミヲ以テ別ニ簡單ナル規則ヲ制シ之ヲ其外國人ニ適用セリ是即チ「ジュスゼンシヨム」ナリ是ニ因テ之ヲ見ルモ「ジュスゼンシヨム」ハ外國人ニ適用スル一種ノ民法ナリ

斯ノ如ク羅馬ニ於テハ羅馬人民ニノミ適用スル民法ト外國人ニノミ適用スル民法トアリ而シテ此二箇ノ民法ハ共ニ內國ニ制定シ內國ニ施行シタル者ナレハ國際法ニ非ラスシテ內國法ナリ併シ斯ク云フモ羅馬カ外國ニ對スル宣戰講和若クハ使臣派遣等ノ規則ハ羅馬以前ニ無カリシ者ト謂フニアラス頗ル嚴格

ナル此等ノ慣例モアリシナリ然レトモ此等ノ規定ヲ「ジュエスセン」ヨム「部」  
 入ルヘキ等ナシ故ニ曰ク現今ノ國際法ト羅馬ノ「ジュエスセン」ヨム「ト」ハ全ク別  
 物ナリ從テ又其直譯ナリトスル佛語ノ「ドローワ、アジャン」モ不適當ナル知ルヘシ  
 國際法ノ定義ニ付テハ著者各其意見ヲ異ニスレ國際法ハ未タ全ク成熟シタ  
 ル學科ニアラサルニ由ル之ヲ概スルニ學者ノ所說ハ理論ト實際トノ二ニ岐ル  
 ヲモノ、如シ即チ一方ハ偏ニ理論上ヨリ論下シ他方ハ專ラ實際上ヨリ説明シ  
 各々其一ニ辭シ共ニ正鵠ヲ失セリ然ルニ近來或ル學者ノ主唱スル所ニシテ最  
 モ簡明且ツ適正ナリト信スルモノアリ左ノ如シ  
 國際法トハ各邦國ノ間ニ現ニ實行サル、規定及ヒ現ニ實行サル可キ自然法  
 ノ原則ナリ  
 此定義ハ著者多數ノ採用スル所ニシテ國際法中ニハ各邦國ノ慣例ト道義トノ  
 二元素アルコトヲ示スナリ即チ一方ニハ法律及ヒ條約ヲ以テ成ル成文法アリ  
 一方ニハ哲學上ヨリ胚胎セル自然法アリ此二者ヲ包含シテ實際ニ偏セス空理  
 ニ走ラス最モ適當ナル定義ト信ス

今ヤ定義ヲ終ルニ臨ミ斯學ヲ研究スル者ノ爲メニ一言ノ注意スヘキモノアリ  
 凡ソ國際法ノ學タル單ニ各國ノ條約習慣及ヒ歷史上ノ出來事ノ記憶ノミヲ以  
 テ足レリトスルモノニ非ラス猶一層高尚ナルモノニシテ彼ノ條約法律ト雖モ  
 一々之ヲ判斷シテ研究セサル可ラス故ニ先ツ歴史ノ講究ヲ必要トス何トナレ  
 ハ古來萬般ノ出來事ヲ示シ又各國ノ交渉事件ノ日ニ進歩スル有様ヲ知リ所謂  
 温故知新ノ術ハ歴史ヲ措テ他ニ求ム可ラサレハナリ又斯學ハ常ニ哲學的批評  
 ナリテテスルヲ要ス蓋シ何レノ學科ニ於テモ之カ講究ヲナスニ當リ判斷力又ハ  
 智力ノ缺乏ヲ來タシ爲メニ正鵠ヲ失スルコト往々之アリ國際法ニ在テハ殊ニ  
 然リトス其故ハ人各々愛國ノ誠情熾ンナルヨリシテ知ラス識ラス利己の議論  
 ニ傾キ虚心平氣ニ論究スルコト少ナキカ故其決定スル所モ亦公平ヲ失スルコ  
 ト多シ是レ哲學的批評ナラサル可ラサル所以ナリ

### 第二節 國際法ノ本源

國際法ハ漠タリ然レトモ亦タ一定ノ法則アリ其法則ヲ守ル可キ人ハ必ス之ヲ

知リ其法則内ニ運動セサル可ラス而シテ此法則タル之ヲ知ルノ方法如何又此  
法則ハ何處ニ存在スルヤ又那邊ヨリ流出スルヤノ問題起ルハ學問上ノ順序ナ  
リ此問題ニ答フルモノ本節即チ國際法ノ本源是レナリ

國際法ノ本源ニ三種アリ

第一、各邦國內部ノ法制並ニ判決例

第二、關係諸國ノ合意

第三、學說

第一 法制並ニ判決例

(甲) 法制

内部ノ法制ハ國際法ニ至大ノ關係ヲ與フルモノアリ外國ニ使臣ヲ派遣スル事  
又ハ外國ノ使臣ヲ請クルコト條約締結批准其他宣戰講和ニ關スルコトヲ定ム  
ル法律之ヲ內國公法ト云ヒ外國人ノ身分能力外國法律ト自國法律トノ抵觸ヲ  
調和スル原則ヲ定メ外國ノ訴訟人ニ關スル內國裁判管轄外國裁判並ニ外國ニ  
在テ取結ヒタル契約ニ効力ヲ付スル程度ヲ定ムル法律之ヲ內國私法ト云フ

內國公法  
內國私法

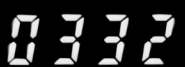
第一法制  
並ニ判決  
例

刑法

內國公法  
私法及  
刑法關  
セテ佛  
國ノ制  
法

又刑罰法ノ効力即チ犯罪ノ場所犯罪人ノ身分ニ付スル制限等ヲ定ムルモノア  
リ例ヘハ如何ナル場合ニ於テ外國ノ犯人ヲ內國裁判所ニ於テ罰スルヤヲ定メ  
タル法律ノ如キ是ナリ此等ハ刑法ノ部ニ屬ス  
法律ヲ類別スルニ通常刑法ヲ內國公法ニ屬セシムレトモ斯學ニ於テハ便宜  
上之ヲ特種ノ位地ニ置カサル可ラス  
內國公法私法及ヒ刑法ハ如何ナル國內ニ於テモ之アリ而シテ此三法ハ宜シク  
豫メ確メ置ク可キ問題ナリ余ハ此三者ニ付キ先ツ聊カ佛蘭西法制ニ就テ示ス  
所アラントス  
佛蘭西ノ法律中內國公法ノ部類ニ屬スルモノハ第千八百七十五年ノ制定ニ係  
ル現行憲法第三條及ヒ同年七月十六日ノ法律ニ於テ之ヲ見ル其七月十六日ノ  
法律第八條及ヒ第九條ニ於テハ使臣ヲ外國ニ派遣スルコト宣戰講和ニ關スル  
コト及ヒ條約締結ニ付キ大統領ト上下兩院ノ職權ヲ定メタリ  
私法ノ部ニ至テハ民法第三條第四十七條第四十八條第百七十條第百七十一條  
第九百九十九條第一千條第二千二百二十三條第二千二百二十八條民事訴訟法第五

(國際私法)



十六條及ヒ千八百四十九年十二月三日ノ法律ニ於テ之ヲ見ル民法第三條ハ佛蘭西法律ト外國法律トノ抵觸シタル場合ニ適用スヘキ原則ヲ定メ同第四十七條及ヒ第四十八條ニハ外國ニ於テ作リタル佛蘭西人民ノ身分證書ノコトヲ揭ケ同第七十條及第七十一條ニ於テハ外國人ノ婚姻ノコト同第九百九十九條及ヒ第一千條ニ於テハ外國ニ在テ爲シタル遺囑證書ノコト同第二百二十三條及ヒ二千二百二十八條ハ不動產抵當ノコトヲ定メ民事訴訟法第五百四十六條ハ外國ノ裁判並ニ外國ニ在テ作リタル契約證書ヲ佛蘭西ニ於テ執行スル場合ヲ掲ケタリ又第八百四十九年十二月三日ノ法律ヲ以テ佛蘭西ニ於ケル外國人ヲ居留ノコト千八百五十七年五月三十日ノ法律ヲ以テ外國人無名會社ノコトヲ規定セリ刑法ノコトニ付テハ千八百五十六年ノ修正ニ係ル現行治罪法第五條第六條ニ於テ外國ニテ犯シタル罪ヲ佛蘭西ニ於テ罰スル場合ヲ規定セリ日本法律中ニモ亦外國法ニ關スル問題ヲ決定シタル法律鮮ナシトセス就中明治廿三年十月六日公布ノ法例ニハ全編十七條ノ中第一條第二條第十五條第十六條ヲ除ク外悉ク國際法ニ關スル問題ナリ是等ノ條項ハ余輩ノ宜シク研究

セサルヘカラサルモノナリ

余ノ本科目ヲ講スル獨リ歐米ノ法律ノミナラス亦併テ我法律ヲモ論セシコトヲ欲スト雖トモ日本法律ハ頗布日尙ホ淺ク未タ深ク研究ヲ爲スノ暇ナシ故ニ本學期ニ於テハ十分之ヲ盡スコト能ハサルヘシ殊ニ日本現時ノ有様ニ就テ觀察スルニ治外法權ノ存スルカ爲メ日本人ト外國人トノ關係至テ鮮少ナルノミナラス假令幾多ノ法律明文アルモ施スニ所ナク偶々其明文ノ全ク實行ス可キモノトスルモ明文ノミニテハ未タ以テ國際法ノ問題ヲ決スルニ足ラス尙ホ學說判例等ノ備ハルニアラサレハ充分ニ此等ノ問題ヲ決スル能ハス故ニ日本ノ法律ニ據テ之ヲ論究スルモ現時ニ於テ其効ヲ見ルコト甚タ難シ然レトモ其治外法權タルヤ早晚必ス撤去サルヘキヲ以テ豫メ國際法原理ヲ講究スルノ必要アルヤ余ノ言ヲ俟タサルナリ仍テ余ハ主トシテ諸君自修ノ基礎ヲ爲スヲ以テ講說ノ目的ト爲スニ止メン

(第二回)

(乙) 判決例

判決例

(國際私法)





シヨン「プロトコール」ト云フカ如キ皆是レ其目的物性質ニ隨ヒ爲シタル種類分ケナリ

注意 彼國ノ語辭ナ一々我邦語ニ翻譯シ其譯語ヲ用テ之カ種別ヲ示スハ無用タリ何トナレハ彼國ハ從來ノ習慣ニ依リ種別スト雖トモ我國ニハ此ノ如キ慣例ノ語ナケレハナリ例ヘハ脩交條約通商條約ノ如キハ佛蘭西ニ於テ之ヲ「トレテ」ト云ヒ郵便條約電信條約專賣特許保護條約ノ如キハ「コンワンシヨン」ノ語ヲ用ユ然レトモ我國ニハ斯ノ如キ語辭上ノ區別ナク等シク之ヲ條約ト云ヒ又條約ノ語ニテ十分間ニ合フナリ故ニ我國ニ於テハ到底語辭ヲ區別シテ目的物ノ異ナルコトヲ言顯ハスコト能ハス又其必要ナシト知ル可シ此ノ如ク歐米ニ於テハ目的物ノ異ナルニ從ヒ條約ノ名辭ヲ異ニス加之ナラス屢之ヲ濫用スルコトアリト云フ近時有名ノ或學者ノ言ニ曰ク「外交官ノ字書等ト變ハリ易キモノナシ」ト是レ其名稱ヲ付スルノ常ナラサルヲ嘲リタルモノナリ余ハ其常ナキノ語辭ニ依ランヨリハ寧ロ總テ之ヲ條約ト云ハン諸君焉ヲ諒セヨ

條約ノ効力

國際裁判ノ組織  
國際裁判トハ何ソ

却說條約ハ如何ナル國ノ間ニ締結サ、ルモ又利害ノ關係カ如何ニ深キモ到底其効力ニ限アルモノナリ蓋シ其條約タルヤ素ト結約國タル當事者間ノ關係ノ議定ニ過キササルカ故ニ彼ノ民法ノ原則ト同シク關係外ノ人ニ向テ利害得失ノ効果ヲ及ホスヘキ筈ナケレハナリ然レトモ各國ノ條約ハ國際法ヲ構成スル重大ノ部分タルコト明ナリ何トナレハ各國内部ノ組織及其國カ外國ニ對シテ有スル關係ヲ見ルニハ條約ニ依リ始メテ確知スルヲ得ヘケレハナリ加之ナラス近時各國日ニ月ニ其條約ノ趣ヲ同フスルノ傾キアリ例ヘハ犯罪人引渡條約著作權保護條約商標保護條約其他郵便電信ニ關スル條約等ハ各國皆同一轍ノ規定ニテ其條章ノ體裁マテモ酷ク相似次第ニ國際上ノ普通文體ヲ作スカ如シ

國際裁判ノ裁決

國際裁判トハ關係諸國カ互ニ相約シテ或ル物議ノ裁決ヲ第三者ニ委頼シ雙方其裁判ニ服從スル爲メニ設ケタル法廷ニ於テ爲ス所ノ裁判ヲ云フナリ國際裁判中ニ仲裁裁判ト稱スルモノアリコレハ民法佛氏第二千四十四條以下ノ和約ノ如ク關係國間ニ於テ一ノ法律タル効力アルモノナリ而シテ此仲裁裁



仲裁裁判ノ統計及ヒ其中顯著ナル者

判ノ裁判官ハ或ハ各關係國ヨリ互ニ委員ヲ派出シテ之ニ充ツルコトアリ或ハ全ク無關係ナル他ノ數國ノ委員ニ委頼スルコトアリ又或ハ第三者タル或ル一國ノ君主皇族又ハ裁判所若クハ宰相等ニ委頼スルコトアリ要スルニ其方法ハ關係國ノ協議ニ依テ異ナリ

仲裁裁判ハ國際問題ヲ判斷スルニ大ニ効用アリ或ル統計表ニ依レハ自第一千七百九十四年至第一千八百八十二年仲裁裁判ニ依テ國際問題ヲ落着シタルモノ三十六件ノ多キニ及ヒ就中第一千八百七十二年英艦アラバマ號ノ事件ニ關シ諸國ノ委員カ瑞西ノゼネバ府ニ集マリテ爲シタル仲裁々判ハ歐米ニ有名ノモノナリ

右ニ述タル仲裁裁判ハ皆一時ノ組織ニシテ其事件ノ裁判ヲ終ハルトキハ直チニ解散スルモノナリ但シ別ニ永久ノ設立ニ係ル國際裁判ニ屬スルモノアリ埃及ノ混同裁判獨乙ノライオン河航行裁判及ヒ奧太利ノ(エルブ)河收稅裁判ノ如キハ常ニ各關係國ヨリ委員ヲ派出シ一種ノ法廷ヲ設ケ置ケリ

以上ノ國際裁判ハ素ト關係國ノ協議ニ基キタルモノナルカ故ニ關係外ノ國ニ

默許ノ合意

國際慣例所生スル

默許ノ合意

向テ効力ナシト雖トモ邦國ノ明許合意タルハ條約ト毫モ擇フ所ナシ

(乙) 默許ノ合意

默許ノ合意トハ前ニ一言シタル如ク國際慣例ノコトヲ云フナリ凡ソ習慣法ナルモノハ成文法ノ不備不明ノ罅ヲ捕足シ苛酷過嚴ノ點ヲ調和シ以テ成法ヲシテ時代ト風俗人情トニ適合セシムルハ其長所ナルカ故ニ一國ノ内國法中ニ於テ最モ貴重ノ地位ヲ占ムルモノナリ國際法ニ關スル慣例ニ在テハ殊ニ然リトス抑モ國際慣例ナルモノハ固ト何時何國ノ間ニ公然約束ヲ爲シタルニ非ラサレトモ或ル關係ノ生シタル時ニ當リ甲國ハ己レノ是ナリト思考シタル所ヲ乙國ニ對シ施行セシニ乙ハ敢テ異議ヲ唱ヘス後日偶々之ト同種類ノ事件ノ起リタル時ニ當リ嘗テ甲國ノ爲シタル所ヲ甲國ニ對シ施行セシニ甲國モ亦異議ナク之ニ服シ遂ニ言ハス語ラス互ニ右ノ處分ヲ是認スルニ至ルモノ之ヲ默許ノ合意ト云フ例ハ外國公使ヲ優待シ又ハ之ニ特權ヲ與フルノ類ハ多クハ條約ニ基クニアラスシテ大抵國際慣例ニ因リ成リシモノナリ

默許ノ合意即チ慣例ノ存在ハ何ニ因テ之ヲ知ル可キヤ之ヲ知ルノ資財數多ア

意即チ國  
際慣例ハ  
何ニ依テ  
知ルヘキ  
乎

各國政府  
ノ報告書

リ第一外國ノ歴史第二萬國會議ノ議事録第三外交官ノ談判始末書第四外交ニ  
關スル國會議事録第五各國外務大臣問ニ取換ハシタル公文第六外國駐劄ノ公  
使ニ宛テタル訓令等是ナリ

近來右等ノ慣例ヲ知ルニ最モ完全ナル著述書アリ即チ歐洲各國政府カ毎年  
一回發スル所ノ報告書是ナリ此書ハ内外交渉事務報告トモ云フ可キモノニ  
テ秘密事件ヲ除ク外凡テ外交上ノ往復文書談判始末等細大洩サス記シ之ヲ  
印刷シテ公衆ニ示スノ例ナリ最モ主トシテ國會議員ニ頒付スル目的ナリ英  
佛ノ國會議員中ニハ或ハ政府ニ向テ其報告書ノ不完全ヲ鳴ラシ或ハ事件ノ  
隱蔽ヲ攻メ又或ハ僅々一事件ノ爲メニ臨時出版ヲ請求スル等隨分囂シキコ  
トアリ此報告書ハ我カ外務省ニモ保存セリ又此報告書ハ各國恰モ云合セタ  
ルカ如ク皆表紙ノ色ヲ以テ之ヲ名ク例ヘハ英國ノ報告書ハ之ヲ青本ト稱シ  
西嶼ノ報告書ハ之ヲ赤本ト稱シ伊太利ハ萌黃本獨逸ハ白本佛國ハ黃本ト云  
フ皆外務大臣ノ編纂スル所ナリ

### 第三回

啓説

### 第三 學説

第千六百年代ヨリ今ニ至ルマテ國際法學者ノ續々輩出シ其間有名學者ノ所説  
ニシテ國際法學ノ基礎トナリタルモノ鮮ナカラス然レトモ當時特ニ國際私法  
ト題シテ論スル者少ナク概テ國際公法ト題シ併テ私法ヲ論スルニ過キス十八  
世紀ニ至リ始メテ私法ノ分科ヲ爲シタリ而シテ第千八百五十年以來私法問題  
ノ需用漸次増加セシヲ以テ學者及ヒ實際家ハ其要用ニ適合ス可キ明瞭ノ判定  
ヲ下サ、ル可ラサルノ必要ヲ感シ皆テ細密ナル研究ニ從事シタルカ爲メ斯學  
ノ驚ク可キ進歩ヲ見ルニ至レリ此等ノ學者中ニハ唯タ己レノ研究シタル所ヲ  
書ニ著ハスノミナラス或ハ政事家トナリ或ハ高等ナル裁判官トナリ其他樞要  
ノ地位ニ立テ實地ノ要用ト學理トニ照シテ之ヲ實際ニ試ミ以テ其大業ヲ成シ  
タル者アリ伊太利國前內務大臣マンチニ一氏ノ如キ是ナリ(氏ハポアンナード  
氏ノ友人ニシテ今ヨリ二年前ニ死去セリ氏ハ殊ニ刑法學ニ通シポアンナード  
氏我刑法草案ヲ起稿スルニ當リ多ク氏ノ所説ヲ採用シタリ)

殊ニ近時國々國際法研究ノ爲メ斯學上ノ會社ヲ組織シ執レモ皆同一目的ニ出

(國際私法)

テ外國ノ法制ノ取調及ヒ國際抵觸問題ノ斷定ヲ以テ其主眼ト爲セリ其會社ノ最モ有名ナルハ白耳其國ガンド府ニ設立シタル國際法協會ナリトス此會社ハ千八百七十三年ノ設立ニ係リ其社員ハ歐米ノ學者及ヒ政事家ヨリ成レリ毎ニ重要ナル問題ヲ會員ニ配付シ一年ニ一回會議ヲ開キ其會議ニ於テ右ノ問題ヲ討論論決シテ之ヲ雜誌ニ掲載ス此雜誌ハ國際法協會ト稱ス右伊國ノマンチニ一氏ハ久シク此會ノ長タリシ此會ニ論スル所ハ大ニ勢力アリ動モスレハ外國政府ノ意見ヲ動カスノ力アリ

昨年パテルノストロロ氏カ五大法律學校聯合討論會場ニ於テ日本帝國ノ條約改正論ヲ演ヘラレ之ヲ右ノ會ニ送り其雜誌ニ掲載シ其所論大ニ會員ノ注意ヲ惹ケリト云フ

又英國ニ於テハ國際法ナ一ノ法典ニ編制スルノ目的ヲ以テ國際法改正及ヒ法典編纂會ナルモノヲ設立シタリ此會モ亦タ一年一回會議ヲ開キ其議論ヲ世ニ公ニス聞ク所ニヨレハ本會ハ管テ一タヒ法典ニ編制シテ世ニ出シタルコトアリシト

佛蘭西ニ於テモ亦タ萬國法律比較會ナルモノアリ千八百六十九年ノ設立此會ニ對シ佛蘭西政府ハ十分ノ保護ヲ與ヘリト云フ我司法大臣モ亦タ其會員ニシテ且ツ其雜誌ハ毎ニ我司法省ニ到來セリ

又佛蘭西ニ於テハ國際私法ノ新報ト稱スル雜誌アリ此記者ハ皆ナ現時有名ノ學者ヲ以テ之ニ充テ且ツ各國有名ノ學者ヲ以テ之カ通信員ト爲セリ其載スル所ヲ見ルニ概テ各國學者ノ卓說其他判決例ナリ此會ノ設立ハ實ニ千八百七十四年ナリ

右ノ外各國概テ學校ニ於テ國際公法ヲ教授ス和蘭獨乙佛蘭西ノ如キハ其ノ率先者タリ就中和蘭最先ニシテ佛蘭西ハ稍々後レタリ佛蘭西ニ於テハ今ヨリ二十年前バリイ及ヒストラスブルノ法科大學ノミ之ヲ教授シアリシカ以來漸ク盛ニシテ今ハ全國ノ大學校ニ於テ皆ナ之ヲ教授ス然レトモ特ニ國際私法ト稱シテ之ヲ大學ノ教科目ニ加ヘシハ今ヨリ僅カ十年前ナリシスノ如ク斯學ノ日淺キカ爲ノ未タ完全ノ教科書ナシト云フ

國際公法  
ト私法ト  
ノ別  
國際私  
事件ノ  
體  
樣

其一

其二

### 第三節 國際公法ト國際私法トノ別

二十

國際法ノ論決ス可キ問題即チ國際私法事件ハ其體樣一ニシテ止マラスト雖トモ其性質ノ異ナル所ヲ類別シテ二種ト爲ス

第一、一國全體ノ利害ニ關スル私觸 例ヘハ一國ノ主權國境和戰使臣ノ待遇ノ如キ國ノ公權利ニ基キタル問題ハ各邦國ヲ無形人ト見做シ此無形人ニ直接利害ノ關係アル問題ナリ故ニ邦國カ此等ノ問題ヲ提出スルニ當テハ邦國自身ノ名義ヲ以テ爲スモノナリ

第二、一個人ノ利害ニ關スル私觸 例ヘハ日本人カ外國ニ在テ結婚シタル場合ニ於テ其結婚ノ有効ナルカ將タ無効ナルカハ日本ノ法律ニ照シテ論決ス可キヤ將タ其外國ノ法律ヲ以テ決定ス可キヤ又其ノ方式條件及ヒ法律上ノ結果ハ日本法律ニ據テ定ム可キヤ將タ外國ノ法律ニ依ル可キヤ又例ヘハ日本人カ外國ニ在テ死去シタル場合ニ於テ其遺產ノ相續ハ兩國孰レノ法律ニ依ル可キヤ本國法ニ從フ可キモノトスルトキハ日本ノ相續法ニ依テ定ム可ク又遺產所在地ノ法律ニ從フ可キモノト爲ストキハ佛蘭西法ニ依ラサル可ラス此等ノ問

公法ト私  
法トハ如  
何ニ區別  
スヘキヤ

民事訴訟  
手續ニ關  
スル問題  
ハ孰レニ  
屬スルヤ

題ハ偏ニ一個人ノ私權ニ關スルモノナリ而シテ邦國ハ邦國自身ノ權利トシテ此等ノ問題ヲ起スニアラス其管轄ノ下ニ在ル人民ノ私權ヲ保護スルカ爲シ單ニ之ニ干渉スルニ過キス

右二種ノ問題ハ共ニ國ト國トノ間ニ起ルモノナリト雖トモ其關係スル異ナリ一ハ公權公法ニ關シ一ハ私權私法ニ關ス故ニ國際公法ト國際私法トハ左ノ如ク區別ヒサル可ラス

國際問題ニシテ一國全體ノ公ノ利害ニ關ルモノハ國際公法ニ屬ス國際私法ニ關シテ一個人ノ私ノ利害ニ關ルモノハ國際私法ニ屬ス

私法公法ノ區別ノ一斑ハ右ノ如シ茲ニ學者ノ疑問トナリ居ルモノニアリ訴訟手續ノ法律ニ關スル問題及ヒ刑事ノ法律ニ關スル問題はナリ訟訴手續ニ關スル法律ノ問題ハ私法ノ問題ニ屬ストハ一般ニ行ハル、所ノ說ナリ佛國ノボワタール氏曰ク民法商法ハ人ノ權利ヲ如何ニ周到精密ニ規定スルモ其實行ヲ全フスル制裁ヲクンハ何ノ用ヲモ爲サルナリ而シテ訴訟法ハ即チ其制裁ヲ定メタルモノナリ然ラハ則チ訴訟法ハ民法及ヒ商法ノ付屬法ニ

(國際私法)

二十一

刑事上ノ法律ニ關スル問題ハ何法ニ屬スルヤ

第二說

シテ民法商法ト共ニ私法タリト此說最モ當レリ余モ之ヲ國際私法ニ屬セシム  
 ア少シモ躊躇セズ  
 刑事上ノ法律ニ關スル問題ニ至テハ較々困難ナリ例ヘハ日本人米國ニ在テ或  
 ル犯罪ヲ爲シ未タ逮捕セラレサル前日本ニ逃ケ歸レル者アリ此ノ如キ場合ニ  
 於テハ其犯人ハ罰ス可キヤ若シ罰ス可キモノトスルモ米國政府ヨリ其犯人ノ  
 引渡ヲ我ニ求ムルトキハ之ヲ引渡シ之ヲテ米國ノ法律ニ依リ且ツ其裁判ノ  
 下ニ服セシム可キヤ將タ日本裁判ノ下ニ於テ日本ノ法律ヲ以テ處分ス可キヤ  
 此問題ノ國際公法ニ屬スト主唱スル論者ハ曰ク刑法ニ關スル訴訟ハ凡テ社會  
 即チ公ケノ利益ヲ以テ主眼トス偶々私訴ノ起ルコトアルモ是レ從タル問題ノ  
 ミ主トシテ起ルハ犯人引渡ノ問題タリ而シテ犯人引渡ニ關シテハ現時概テ政  
 府ト政府トノ條約アリ(日本ハ米國及ヒ清國ト此條約ヲ締結セリ)又假令其條約  
 ナシトスルモ其事ノ起ル毎ニ政府ノ干涉ヲ要ス左レハ此問題ノ公法ニ屬スル  
 ヤ明ナリト(レノ一氏等主唱)  
 私法ニ屬スト唱フル論者ハ曰ク刑事上ノ事柄ハ常ニ必スシモ公ケノ利害ニノ

第三說

ミ關スルモノニ非ス犯罪ノ所爲ハ毎ニ被害者ノ身体生命財産等ニ害ヲ及ホス  
 モノナリ加之犯罪人ヲ引渡スト否トハ其犯罪人ノ私權(身体財産等)ニ大ナル利  
 害ノ關係ヲ及ホスモノナリ然ラハ則チ此問題ハ本ヨリ刑法ニ屬セサルヘカ  
 スト(ベリックス、デマンシヤ氏等主唱)  
 第三說ヲ爲ス者曰ク前二說各理アリ敢テ其是非ヲ判別スヘカラス故ニ之ヲ公  
 法ニ屬セシメス又私法ニモ屬セシメス全ク一々獨立ナル國際刑法問題トシテ  
 置クヘント(アンドウエス氏等主唱)  
 余ハ此處ニ各三說ノ可否ヲ斷定スルコトヲ欲セス唯一言余ノ心付ヲ述ベ置カ  
 ン抑モ純然タル公法上ノ問題ハ一國ノ裁判所ノ取扱フモノニ非ス然ルニ私法  
 問題ニ至テハ往々一國ノ裁判所ニ於テ之ヲ終局ス民事ニ付テ之ヲ云ハンカ内  
 外人ニ關涉スル訴訟ハ其訴訟ノ起リタル土地ノ裁判所ニ原告被告ヲ呼出シ證  
 人ヲ審訊シ書類ヲ檢閲シ其他ノ行爲皆其裁判所ニ於テ管轄シテ終結ス刑事上  
 ノコトニ付テモ亦然リトス其目的ハ公ケノ利益ニ關スト雖トモ之ヲ審理シ判  
 決スルハ民事訴訟ノ場合ト甚々相似タル成行ヲ顯ハスモノナリ故ニ余ハ之ヲ

(國際私法)

國際私法ト其ニ講究スルヲ便利ナリト思考スルモノト知ルヘシ此事歐洲  
 注意ニ單ニ國際法ト稱スルトキハ國際公法ヲ指スモノト知ルヘシ此事歐洲  
 ノ著書ニ其例多シ蓋シ歐洲學者カ初メ國際法ヲ論スルニ當リ敢テ公法ト  
 稱スルト別ヲ爲サズ單ニ國際法ト題シ主トシテ國際公法ヲ説キ傍ヲ僅ニ  
 私法ヲ包含セシムルコトアルニ過キス公法ト私法トノ別ヲ設ケタルハ實  
 ニ十八世紀ナリ以來國際公法中ニハ私法上ノコトヲ併セ論スルモ國際私  
 法ト稱スル著書中ニハ全ク公法ヲ除キタリ故ニ單ニ國際法ト稱スルトキ  
 ハ國際公法ヲ指シ又單ニ國際私法ト稱スルトキハ公法ヲ包含セスト知ル  
 以上ニテ總論ヲ説キ終レリ以下本論ニ入テ説カントハ先ニ本論ニ立入ルニ先ツテ是ヨリ講述スル處ノ順序ヲ示サン

本論ニ立入ルニ先ツテ是ヨリ講述スル處ノ順序ヲ示サン

余ハ本論ヲ分テ三編ト爲ス左ノ如シ

第一編 外國人身分論

此題目ノ下ニ於テ各國人民カ其國外ニ於テ享有スル處ノ權利ノ制限ヲ述

第二編 各國私法抵觸論

此題目ノ下ニ於テ各國私法ノ互ニ相抵觸スル場合ヲ論ズ是レ國際私法中  
 於テ最モ肝要ノ部分ナリ

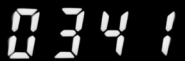
第三編 裁判管轄訴訟手續裁判宣告

此題目ノ下ニ於テハ前二編ニ述フル處ノ制裁トモ稱スヘキモノヲ述ヘン

第一編 外國人身分論

右ノ如ク本論ヲ三編ニ分チ尙本編中別ニ節目ヲ設ケ以テ序ヲ追テ講述セシ  
 (第四回)

本編ハ之ヲ若干ノ節目ニ分テ講述スヘシト雖トモ先ツ此事ヲ爲スノ前ニ於  
 テ別ニ標題ヲ掲ケスシテ數言ヲ費シ以テ全編ニ貫通スヘキ外國人身分論ノ  
 大原則ヲ示サントス是レ蓋シ甚々必要ノコトナリト信スレハナリ





自然法上  
ノ權利義

抑モ人ノ此世ニ生ルヘキ自ラ天與ノ能力アリ又其能力ヲ活用スルカ爲メニ各之レカ機關ノ具備スルモノアリ而シテ此能力タル年月ノ經過ニ從テ愈々成熟シ發達スルモノニシテ之カ發達成熟ヲ遂クヘキ諸ノ行爲ヲ爲スハ是レ人タルモノ、宜ク盡スヘキノ本分ニシテ又權利ナリト云フヘキナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ吾人ハ只ニ此世ニ生存スルノ理由ノミヲ以テ業已ニ自ラ盡スヘキノ本分アリ又行フヘキノ權利アルコトハ自然法ニ於ケル第一ノ原則ニシテ何人モ疑ヲ容レサルノ處ナリ而テ所謂天與ノ箇人的諸能力ヲ自由ニ發達セシメンガ爲ニ之ヲ保護シ之ヲ誘掖シ須與モ間斷スル處ナク人ノ男女老幼ヲ問ハス國籍宗教ノ如何ヲ分タス各人ヲシテ其力量ト位置トニ從ヒ以テ天命ヲ全フセシムルハ是レソ此社會ナル團體カ各人ニ對シテ當サニ盡スヘキ職掌ト謂フヘキナリ伊國國際學者「マンチニ」氏言アリ曰ク邦國ナルモノハ共同ノ利益ト公衆ノ意思トヲ代表スルモノタルニ過キス故ニ邦國ハ各箇人ノ無害ナル自由ト其自由ヨリ生シ來ル諸權利アルコトヲ認定シ之ヲ敬重シ之ヲ保庇スルノ任ニ當ルヘキナリ然ルニ若シ夫レ事茲ニ出テスシテ此自由權利ヲ無視シ又ハ妄リニ之ヲ

マンチニ  
氏ノ說

滅殺スルカ如キコトアルニ於テハ其邦國ハ己ニ當初ノ目的ヲ誤リ又邦國タルノ所以ヲ失フノ理ナリ元來各箇人ハ他人ノ自由ヲ害セサルノ限界ニ於テハ自己ノ自由ヲ行フノ權利アリ而テ此權利ヤ特リ一邦國ノ臣民ノ間ニ於テ存スルノミニ止ラス廣ク人類一般ノ間ニモ亦タ存スル所ノ確乎不拔ノモノナリト謂フヘシ何トナレハ凡ソ邦國カ各箇人ノ自由ヲ保護スルニ當リテ其保護ノ限界果シテ何レノ點ニ迄及フモノナルカラ温マルニ他人ノ等ク有スル所ノ自由權利ヲ保護スルノ點ニ止ル可キノ道理ナレハナリ案スルニ世界各國ノ法律ト云ヒ法典ト云ヒ是レ皆ナ立法者カ自己ノ見識ヲ以テ正理ニ適合スル所ヲ認メ而テ其認ムル所ヲ發表シタルモノニ過キサレハ其間必スシモ誤謬ナシト云ヒ難シ而テ斯ノ如ク法律法典ヲ製作スル立法者カ各人ノ自由權利ヲ創造セルモノニハアラスシテ寧ロ立法者ハ各人固有ノ自由權利アルコトヲ認定シ以テ内外人ノ別ナク平等均一ニ之ヲ保護スヘキノ責ヲ担フモノナリト謂ハサル可ラス而テ一國ノ立法者タルモノニシテ若シ此事ヲ爲サハルトキハ是レ則チ正理ニ背キ國際法ノ原則ニ戾ルモノナリ殊ニ此事タル各國相互ノ利害ニ大ナル關係ヲ

外國人ノ  
由スル自  
有權利ノ  
權利以外

有スルモノナレハ立法者タルモノ決シテ忽諸ニ附スベカラザルモノナリ何下  
ナレハ各邦國ハ我管内ニ於ケル人民ノ自由權利ヲ内國ニ於テ尊重スルニ止ラ  
ス其管内人民ノ他邦ニ出ツルニ當リテハ他邦ニ於テモ亦之ヲ尊重セシムルコ  
トヲ努ムルハ邦國タルモノノ務ニシテ而テ之ヲ爲スニハ先ヅ已レヨリ他國入  
民ノ自由權利ヲ確保スルハ最モ正當ノ順序ヲ得タルモノナレハナリト  
右ハマンチニ一氏ノ云フ處ニシテ頗ル至言ト謂フテ可ナリ左レハニヤ近來學  
者ノ屢此言ヲ援用スルモノアルヲ見ル而シテ余ハ尙ホ氏ノ意ヲ演繹シテ茲  
ニ一言ヲ附加セシニマ氏ノ所謂自由權利ナルモノハ人生固有ノ權利ニシテ人  
ノ此世ニ出ヅルトキ生命ト共ニ天ヨリ稟クル處ノモノナレハ之ヲ自然法上ノ  
權利ト稱スルモ可ナリ然リ而シテ此自然法上ノ權利ノ以外ニ又各國開化ノ程  
度ト風俗ノ如何ニ因リ別種ノ權利ノ存在スルモノアルヲ見ル例ハ彼ノ結婚ノ  
權若クハ所有權ノ如キ即チ是ナリ此自然法上ノ權利タル人生一日モ欠クヘカ  
ラサル處ノモノナリト謂ハサルヲ得ス試ミニ之ヲ本邦ノ事迹ニ徴スルニ彼ノ  
外交史略中舊幕ノ時未タ海外各國ト訂盟ナキニ當テ橫濱ニ在留スル少數ノ外

外國人  
ノ權利

外國人  
ノ權利

外國人  
ノ權利

人日用品ノ買入レ不動産ハ格別及ヒ本邦婦人ト結婚セシコトヲ請求シタルニ  
幕府ハ容易ニ此事ヲ許容シタルノ記事アルヲ見ル夫ノ攘夷論ノ勢力アル當時  
ニ於テ尙ホ且ツ此事アリ以テ自然法上ノ權利ハ外人ニ對スルモ拒絶スヘカラ  
サル理ヲ知ルニ足ランカ  
夫レ如此ナルカ故ニ外國人ト雖トモ右等ノ權利アルコトヲ認定セサルヘカラ  
スト雖トモ又人ノ生活上必須欠クヘカラサルカ如キモノニアラスシテ只タ其  
土地ニノミ限ル要用ヨリ生シタルノ權利ハ立法者カ内國人ニノミ限リテ之ヲ  
附與シ外國人ニ附與セザルモ亦タ道理ナキニアラス蓋シ是等ノ權利ハ外國人  
ニハ必ズ附與スヘカラストノ言ニハアラス唯外國人ヲ其土地ヨリ除避スル邦  
國ノ防禦手段ナルカ故ニ可及的此除避ノ効力ヲシテ嚴酷ニ外人ニ感セシメサ  
ルヤウ取扱フヲ宜シトスル場合屢々起ルコトアリ  
以上述フル處ヲ要スルニ外國人ノ爲メニハ少クモ自然法ノ權利ハ必ス之ヲ享  
有セシムヘキヲ以テ道理ニ適スルモノト爲ス而テ其他ノ諸權利ニ至リテハ其  
外國人タルノ資格ト相背馳セサル限リハ之ヲ許容スヘキモノナリ

佛國ニ於ケル外國人身分論

外國人公權論

總論

公權ニ二種アリ

以下本編ヲ第二章ニ分チ第一章ヲ佛國ニ於ケル外國人身分論ト題シ第二章ヲ其他外國ノ法制論ト題セシ

### 第一章 佛國ニ於ケル外國人身分論

本章ヲ分テ三節ト爲ス左ノ如シ  
第一節外國人公權論 第二節外國人私權論 第三節外國人特待論

#### 第一節 外國人公權論

本節ヲ更ニ三款ニ分ツ左ノ如シ  
第一款總論 第二款自然法の公權 第三款政權即チ公民權

#### 第一款 總論

佛國ニ於テ所謂公權トハ概シテ人民カ政府トノ關係ノ間ニ有スル重要ナル諸權利ノ謂ヒニシテ之レニ二種ノ別アリ一ハ憲法ノ條文中ニ於テ見ル處ノ佛國

自由ノ權利

公權ノ種類

人民ノ公權ト稱スルモノ是ナリ此公權タル即チ本編編首ニ於テ説述シタル處ノ自然法のノ權利ニ相當スルモノニシテ各人ノ生命ト共ニ享クル處ノ權利ナリトス故ニ何レノ立法者ト雖トモ之レカ發達ヲ妨クルコトヲ得サルノミナラス各人ニ此權利アルコトヲ認定シ以テ之ヲ保護スルコトヲ目的トセサルベカラズ蓋シ此公權ハ換言スレハ各個人ノ自由權ニ外ナラサルナリ他ノ一ハ多少國ノ政事ニ干與スル處ノ權利ニシテ政權又ハ公民權ト云フ之ヲ公民權ト云フハ此權利ヲ行フニハ公民タルノ資格ヲ具備スルコトヲ要スルニ依ル  
右二種ノ公權ヲ我國ノ法制ニ對照スルニ憲法規定スル處ノ居住移轉ノ自由(同法第二十二條法律ニ依ルニアラスシテ逮捕尋問ヲ受ケサルノ權同第二十三條住所不可侵ノ權同第二十五條信教言論ノ自由同第二十八及ヒ九條等ハ第一種ノ公權ニシテ又憲法第十九條ニ所謂文武官ニ就クノ權國會府縣會等ニ於ケル選舉權及ヒ被選舉權其他自治体ノ公務ニ從事スルノ權或ハ現行刑法第三十一條ニ列記スル處ノ公權ノ如キ是レ皆チ第二種ノ公權ニ屬スルモノトス

(國際私法)

夫レ如此二種ノ公權アリ而テ外國人ニシテ佛國ニ在ル處ノモノハ佛國人ニ等ク此二種ノ公權ヲ共ニ享有スルコトヲ得ルヤ是レ次款及ヒ第三款ノ下ニ於テ論セントスル處ナリ

### 第二款 自然法の公權

抑モ自然法の公權ハ人ノ天性ニ基因スルモノニシテ安リニ之ヲ與奪スヘキニアラズ然ハ則チ佛國人ニ對スルモ外國人ニ對スルモ當サニ同一ナルヘキノ理ニシテ特ニ外國人ニ對シテノミ之ヲ拒絕スルコトヲ得ス故ニ外國人ニシテ佛國ニ在ル處ノモノハ彼ノ自由權ニ基ク諸權利ハ之ヲ享有スヘキヤ固ヨリナリ請フ左ニ之ヲ分説セン

#### 外國人身 体ノ自由

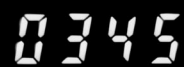
身体ノ自由ニ付テハ外國人ニ對スルモ亦タ保證スル處ニシテ佛國法律ニ定メタル場合ト方式トニ依ルニアラサレハ逮捕監禁審問等ヲ受クルコトナシ夫ノ國際法ノ未タ發達セザルノ時代ニ當テヤ異域ニ流離スル外人ニシテ殘忍苛虐ノ驅使ヲ受ケタルノ事迹ハ往々歷史上ニ於テ散見スル處ナリ而テ今ヤ是等ノ

事ハ已ニ舊時ノ一夢ニ屬スルモ未ダ奴隸賣買ノ或國ニ行ハレタル時ニ當リ佛國ニ於テ夙ニ外國人ノ身体ノ自由ヲ敬重スルノ著シキモノアリタリ他ナシ外國ノ賣奴ニシテ一タヒ身ヲ佛國ノ領地ニ入ルヽトキハ假令其本國ノ制度ニ於テ此賣奴ヲ許スノ制度ナリトスルモ顧着ナク自由ノ人ト爲スコト是ナリ然レトモ是レ佛國ニ於ケル舊時ノミ元來賣奴ヲシテ其身体ノ自由ヲ回復セシムルハ即チ仁義ノ行爲ニシテ現今ニ至リテハ開明諸國概チ皆如斯スルヲ以テ慣例ト爲ス

#### 外國人身

我國ニ於テモ右ノ實例ヲ現出シタルコトアリ先年或ル外國人多數ノ支那人ヲ賣奴トシテ南米ニ渡航スルノ途次我橫濱ニ寄港シタルトキ一人ノ支那人逃レ出テ之ヲ我政府ニ訴ヘテ其救護ヲ請フタルヲ以テ我政府ハ其船舶ヲ差抑ヘ支那人ヲ解放シテ本國ニ歸サシメタリ然ルニ此事ニ付テ南米某政府ト單我政府トノ間ニ一ノ外交問題ヲ醸スニ至リタルモ露國皇帝ノ仲裁々判ニ依リテ遂ニ我國ノ勝チニ歸シタリ

(國際私法)



外國人ニシテ犯罪ヲ爲シタルモノ、引渡ノコト是ナリ、  
 (一) 追放 佛國ニ在ル外國人ニシテ公安ヲ害スルノ所爲アリト認ムルトキハ簡  
 單ナル行政處分ヲ以テ之ヲ佛國ノ領地外ニ追放スルコトヲ得ルノ規定ナリ(一  
 千八百四十九年ノ法律或人之レカ理由ヲ説テ曰ク凡ソ外國人ヲ我邦土内ニ在  
 留セシムルハ我レ彼ヲ客視シテ寄寓セシムルモノニ外ナラス而テ寄寓セシム  
 ル所ノ主人ニシテ當サニ盡スヘキノ本分アリトスレハ寄寓スル所ノ客タルモ  
 ノ豈更ニ是レヨリ重大ナル盡スヘキノ本分ナクシテ可ナランヤ然ルニ若シ夫  
 レ主人ノ眼ヲ眩マシテ不意ニ之ヲ驚カシ之ヲ害セントスルカ如キモノハ即チ  
 客人タルノ權利ヲ失フニ至ルヤ當然ノコトナレハナリト然ハ則チ佛國政府カ  
 外國人ヲ追放スルノ權利ハ其外國人カ當サニ盡スヘキノ本分ヲ破却スルニ因  
 リテ生スルモノナリ但シ假令外國人カ右ノ本分ヲ遵守スルニモセヨ政府ハ常  
 ニ公衆ノ利害ト國家ノ安寧トニ注目セサルヘカラサルカ故ニ隨時ノ必要ニ追  
 フレテ高等警察ノ處分ヲ以テ外國人ヲ追放スルノ權ヲ有スヘキナリ  
 (二) 犯罪人引渡 外國人外國ニ於テ罪ヲ犯シ而テ佛國ニ通レ來ル場合ニ於テ外

國政府カ之ヲ裁判ニ附センカ爲メ又ハ刑ノ執行ヲ爲サンカ爲メ其者ノ引渡ヲ  
 請求スルトキハ佛國政府ハ其求ムル處ノ政府ニ引渡ヲ爲スヲ以テ慣例トス而  
 テ之レカ爲メニ特別ノ條約ノ有無ヲ問ハサルモノトス但シ佛國人カ外國ニ於  
 テ其外國法律ニ於テ認ムル處ノ罪ヲ犯シ外國ヨリ引渡ヲ請求スルモ佛國ハ常  
 ニ之ヲ拒絕シ來レリ蓋法律又ハ條約ノ存スルモノアリテ然ルニアラス久シク  
 行ハル、慣例ニ依ルニ過キスサレバニヤ此事ニ付テハ大ニ學者ノ攻撃シテ措  
 カザル所ナリ  
 外國人ニシテ外國ニ於テ罪ヲ犯シタルモノハ佛國裁判所ハ之レカ裁判ヲ爲ス  
 ノ權利ナシ只タ佛國ノ安寧ヲ害スル重罪ヲ犯シ又ハ國幣貨幣紙幣銀行手形ノ  
 賈造ヲ爲シタル外國人ニシテ佛國ニ於テ之ヲ逮捕シタルトキ又ハ外國政府ヨ  
 リ引渡ヲ得タルトキハ佛國裁判所ニ於テ處罰スルコトヲ得佛治罪法第七條ル  
 ノ規定ナリ

(第五回)

人各其自國ニ於テ居住往來ノ自由ヲ有ス佛國ニ於テハ外國人ニ對スルモ亦タ

ノ自由及  
ヒ其例外

充分ニ此自由ヲ與ヘ居レリ但前回ニ述ヘタル外國人追放及ヒ犯罪人引渡處分  
ノ二箇ノ場合ハ例外ナリトス其他警察取締ノ爲メ外國人ノ爲メニ些細ナル手  
續ヲ設クルト雖トモ只タ一時ノ往來出入ヲ爲スニハ全ク自由ニシテ旅行免狀  
ヲ示サハルヘカラサル等ノ必要アルコトナシ(是レ特リ佛國ニ於テノミ然リト  
爲サス萬國到ル處皆此ノ如シ故ニ我國ヨリ海外ニ渡航スルモノハ必ス旅行免  
狀ヲ携帶スルノ制アリト雖トモ之ヲ携帶シテ其用ヲ爲スハ只タ露國令境ニ於  
テ之ヲ見ルノミ而テ外國人カ佛國ニ住居ヲ爲サント欲スル場合ニ於テハ其到  
着ノ日ヨリ十五日以内ニ國籍姓名年齢職業等ヲ區役所ニ届出ルノ規則アリ蓋  
シ警察監督ノ爲メニスルモノナリ又彼ノ有名ナル普佛戰爭ノ際ニ當リテハ外  
國人ニシテ佛國ニ入ルモノハ必ス其本國ヨリ與ヘタル旅行免狀ヲ携帶シテ之  
ヲ示サハルヘカラサルモノト定メタリト雖トモ是レ等ハ臨機變ニ應スルノ處  
置ニシテ何人モ批難ヲ爲ス者ハナカリシ

普佛戰爭ノ後普ハ佛ヨリ割キ取リタルアルザス州ノ舊佛人カ佛人ノ煽動ヲ  
受クルヲ防シ爲メナリト公言シテ特ニ嚴重ナル規則ヲ設ケ佛ノ國境ヨ

言論出版  
ノ自由及  
ヒ諸權利  
ノ享有

三リ該州ニ入り來ルモノハ其何國人ニ於ケルヲ論セス本國ヨリ携帶シ來レル  
旅行免狀ニ在巴里普國大使ノ檢印ヲ受ケタルモノヲ有セサルヘカラストセ  
リ是レ職トシテ佛人ヲ防カントスルノ手段ニ由レルモノナリト雖トモ此窮  
屈ナル規則ハ無關係ノ他國人ニ波及シテ爲メニ大ニ迷惑ヲ感セシムルニ至  
リタリ何トナレハ無關係國人即チ佛國人以外ノ外國人ト雖トモ普佛兩國ノ  
間ヲ旅行スルモノハ等ク此規則ノ檢束ヲ受ケサルヲ得サレハナリ然ルニ數  
日以前ノ新聞紙ニ於テ獨逸政府ハ右ノ規則ヲ改メテ以後尙ホ此規則ヲ適用  
スヘキモノハ佛ノ軍人ニノミ限リ其他ノ人々ハ自由ニ往來出入ヲ得セシム  
コトト爲リタリトノ記事アルヲ見タリ今日漸クニシテ此改正ヲ見ルニ至ル  
ト雖トモ既往二十年間旅人ノ困難亦タ尠ナカラサリシ次第ナリ

言論出版ノ自由ニ付テハ佛國ニテ發行スル新聞紙ハ其管理者必ス佛國人ニシ  
テ且佛國ニ住居スルモノタルヘシトノ規則アルノミ是レ新聞紙ノ責任ヲ定ム  
ルヨリ生スル必要ノ結果ナリ故ニ記者通信者等ニ付テハ毫モ制限スル處ナ  
ク何國人ニテモ妨ケアルコトナシトス其他集會結社訴願ノ權商工業ヲ營ムノ

外國人モ亦テ佛國ノ法律ニ服從セサル可ラス

特ニ外國人ニ對シテ嚴格ナル場合ナ

權及ヒ住居不可侵ノ權ハ外國人亦タ皆之ヲ享有ス只テ佛國法律ハ佛國公安ノ保護者タルカ故ニ多少ノ制限ヲ設クルコトハ是レアルノミ  
凡ソ外國人ト雖トモ佛國ニ在留スル間ハ佛國法律カ充分ニ其財產身体ヲ保護スルカ故ニ外國人モ亦タ佛國ノ安寧及ヒ秩序ニ關スル法律ノ命令ハ必ス之レニ服從セサルヘカラス佛國民法第三條ニ曰ク警察及ヒ安寧ニ關スルノ法律ハ悉ク佛國ニ住居スルモノヲ支配スト所謂法律トハ單ニ立法權ヨリ發布スルモノ、ミニ止ラス國主ノ勅令及ヒ大臣其他當該官吏ノ發シタル命令規則ト雖トモ亦タ合著スルモノナリトス然ハ則チ外國人ニシテ苟モ是レ等ノ法律規則ニ背戾シタルトキハ即チ佛國法律ノ制裁ヲ受ケ佛國裁判所ノ裁判ヲ受ケサルヘカラサルコト敢テ佛國人ト異アルコトナシ夫レ斯ノ如ク外國人ト雖トモ佛國人ト同一ノ保護ヲ受ケ又同一ノ制裁ヲ受ケ之ヲ遇スルコト頗ル平等ナリト謂フ可キナリ然リト雖トモ此點ニ付テ外國人ハ佛國人ニ比シテ聊カ苛酷ノ處置ヲ受クルコト亦タ之レナシトセス即チ二ケノ例外ノ場合トシテ是ナリ(一)刑法第三十五條ノ規定スル處ニシテ剝奪公權ノ刑ヲ主タル刑トシテ言渡ストキハ其

外國人納租ノ義務

犯人佛國人ニ係ル場合ニ於テハ附加刑トシテ禁錮ノ刑ヲ言渡スコトアリ或ハ言渡サ、ルコトアリ然レトモ其犯人ニシテ外國人ナルトキハ必ス禁錮ノ刑ヲ言渡サ、ルヘカラス(二)同法第二百七十二條ノ規定スル處ニシテ裁判所ヨリ浮浪者タルノ言渡ヲ受ケタルモノ外國人ニ係ルトキハ佛國領地外ニ追放ス、ト是レ二ケノ例外ノ場合ニシテ外國人ヲ遇スルコト自國人ニ於ケルヨリ稍々苛酷ナル處ナリ  
其他外國人ハ公益ニ基ク處ノ地役ノ法律ニ服從スヘク(民法第六百四十九條以下又土地買上ケニ對スル義務ヲ負擔セサルヘカラス而テ是レ等ハ佛國人ニ於ケルト異ナル處アラサルナリ且夫レ外國人ニシテ佛國ノ領地内ニ住スルモノハ佛國法律其身体及ヒ財產ヲ保護スルカ故ニ其外國人タルモノモ亦タ是レカ報酬トシテ諸般ノ租稅ヲ負擔セサルヘカラス蓋シテ當然ノ事ナリ巨額ノ金ヲ抛テ百方保護ノ方法ヲ設ケ置クモノヲ無報酬ニテ其恩ニ浴スルノ理由ナシ勿論此外國人ノ租稅義務負擔ノコトニ付テハ佛國ト各國間トニ於ケル條約ノ中ニモ特ニ之ヲ記載スルノ條目アリテ即チ內國人ヨリ重稅ヲ賦課スルコトナレ

トセリ然ハ則チ是レ亦タ自國人ニ於ケルト外國人ニ於ケルト平等ニ出ツルモノト謂フヘキナリ而テ有名ナル公法家「ブリウンチリ」氏ハ曰ク外國人ニシテ内國ニ住居スルモノニ對シテハ通常租税ノ外ニ別ニ僅少ノ金額ヲ賦課スルモ爲メニ彼ノ内外人租税平等ノ原則ヲ傷クルノ理ナシト或ハ此說ヲ援用シタルモノカ千八百八十三年佛國衆議院ニ於テ或ル議員カ外國人ニ特ニ一種ノ課稅ヲ爲シ以テ貧民養育院ノ費用ニ充テントノ建議ヲ爲シ同年露國ニ於テモ外國人一人ニ付キ一ヶ年百圓ノ課稅ヲ爲サント建議シタルモノアリシカ何レモ遂ニ消滅ニ歸シタリ蓋シ是等建議者ノ考案ハ公益上ニ於ケル義務ノ點ヨリ觀察ヲ下ストキハ内外人ノ位置能ク平等ヲ得ルハ難レ何トナレハ外國人ハ兵役ヲ免ルハカ故ナリト云フニアリ是レ一理アルノ說ト謂フヘシ現ニ此說ノ實行サレツ、アル所ノ國アリ瑞西國即チ是レナリ同國ニ於テハ千八百七十八年ノ法律ヲ以テ瑞西人ニシテ兵役ヲ免ル、トキハ毎年若干ノ金ヲ出スヘシ而テ外國人ニシテ瑞西國內ニ住居スルモノ亦タ同シト定メタリ然レトモ如此ハ稀ニ見ル處ノモノニ屬ス

政權即チ公民權

外國人ハ有政權ノ享

### 第三款 政權即チ公民權

政權トハ國憲ノ一部ニ屬スル處ノ能力ニシテ彼ノ自然法の公權トハ異ナリテ直接或ハ間接ニ國ノ政務ニ干渉スルモノ、云ヒナリ然ハ則チ是等ノ權利ハ實ニ公ノ職務ト稱スルモ尙ホ可ナルカ如キモノニシテ之ヲ行フヤ決テ容易ノコトニ在ラス必ス能ク其國ノ利害得失ト諸般ノ需用トヲ熟知シ辨別シ應用スルニ足ルヘキノ年齢ト經驗トヲ備ヘ而後尙ホ且最モ欠クヘカラサルハ即チ其國家ノ榮枯盛衰ニ關係ヲ有スルノ人ニ在ラサレハ行フ能ハサルノ職務ナリ夫レ然リ然ルニ苟モ之ヲ無能ノ人無關係ノ人或ハ我ヲ敵視スルカ如キ人ニ委テハカ忽チ國家ノ安寧ヲ害スルニ至ラン豈亦モ危カラスヤ故ニ外國人ニ對シテハ政權ノ享有ハ決テ之ヲ許スヘカラス今若シ觀察ノ點ヲ觀シテ他方即チ外國人ノ身上ヨリ考ルモ是レ等ノ權利ヲ決テ外國人ノ生活上ニ欠クヘカラサルモノニ在ラス又内國人ト雖モ悉ク之ヲ享有スルニ在ラス且夫レ彼ノ自然法の公權ハ一名之ヲ人ノ權利ト稱スルモ可ナルカ如キモ、大凡下雖トモ政權ハ



外國人ノ  
政權ノ享  
有ナキヨ  
リ生スル  
結果

公債  
代理人  
外國人

國籍法

四三二

異ニシテ一名之ヲ公民ノ權利ト稱スルモノナリ而テ外國人ハ自國ノ公民ニ在  
 ラス如何ヲ政權ヲ分與スルコトヲ得シ事ナシトシ且夫ノ如ク自然若  
 斯ノ如ク外國人ヲ政權享有ヨリ排除スルトキハ其結果トシテ左ノ如キ有様ヲ  
 顯出ス

(一) 外國人ハ上下議院縣會郡會市町村會ニ於ケル選舉權及被選舉權ヲ有セス  
 (二) 外國人ハ國家大權ノ一部分ヲ委任サル、職務ヲ執ルコトヲ得ス是レ我憲法  
 ニ所謂文武官ニ任セラルヘノ語ト同一ノ意義ナリ故ニ裁判官ト爲リ陪審官ト  
 爲リ僧官タルコトヲ得ス又戰時ニ際シテ外國義勇隊ニ加ヘルコトヲ得ルト雖  
 トモ平時軍隊ニ入ルコト能ハス其他公証人裁判所書記執達吏雜賣人商業世話  
 人商船ノ船長等ト爲ルコトヲ得ス

(三) 公證人ノ面前ニ爲ス證書ニ於ケル證人トシテ署名スルヲ得ス又財産差押ノ  
 場合ニ於テ之レニ立會フ證人ト爲ルコトヲ得ス(佛國訴訟法第五百八十五條然  
 レトモ身分證書記入ノ場合ニ於テハ證人ト爲ルモ差支ナシ佛國民法第三十六條  
 及第三十七條ニ單ニ男子ニシテ廿一歳以上ノ者ト規定シタレハナリ是レ至急

ヲ要スル場合ヲ慮リタルモノナルヘシ而シテ外國人カ證人トシテ裁判所ニ呼  
 出サル、コトハ之ヲ禁ゼタルノ法律ナキヲ以テ之ヲ許シタルハ大審院ノ判決  
 例ニ於テ見ル所ナリ

(四) 佛國ノ裁判所ヘ代理人トシテ出廷スコルトナリ得ス法律ヲ以テ特ニ之ヲ禁  
 タルコトナシト雖トモ法廷ニ於テ判事ノ不足アルトキハ代理人ヲ以テ補充ス  
 ルトノ法律アルヲ以テ此法律ノ解釋ヲ推及スルノ說ニシテ即チ時ニ或ハ判事  
 ノ職務ヲモ勤ムルコトアルヘキ代理人ナレハ外國人ヲシテ之ヲ許スヘカラス  
 ト云フニ在リ是レ今尙ホ慣例トシテ現ニ行ハル、所ナリ然レトモ其實際ニ於  
 テハ有名トル外國代理人ニシテ就中白耳義人佛國ニ來リテ法廷ニ雄辯ヲ振フ  
 タルノ實例ハ屢々見ル所ナリ而シテ是等ハ只佛國代理人ノ制服ヲ着セサルノ  
 ミニシテ他ニ異ナル所アルコトナシ

(五) 外國人ハ仲裁人ト爲ルコトヲ得ルヤ是レ會テ議論ヲ生シタル所ナリ蓋シ佛  
 國商法第五十一條ニ於テ「商事會社ノ社員相互ノ争ハ仲裁人ノ裁判ニ從フヘシ」  
 ト云フノ規定アリ之ヲ稱シテ法律上ノ仲裁人ト云ヘリ然レニ千八百五十六年

國際私法

四三三

條ヲ削除シタルヲ以テ方今ニテハ單ニ民法ニ所謂隨意ノ仲裁人ノミト爲レリ而シテ所謂法律上ノ仲裁人ノ職タル司法權ノ依託ニ因レル者ナルカ故ニ外國人ニ之ヲ許スヘキヤ否ノ問題ヲ生スルハ固ヨリ其所ナリト雖トモ法律上ノ仲裁人ハ業已ニ廢セラレ今ハ隨意ノ仲裁人ノミニシテ此隨意ノ仲裁人タル佛國民法第二百二十五條ニモ云ヘルカ如ク單ニ雙方間ニ於ケル契約ノ効力ニミ止ルモノニシテ毫モ執行力ヲ有スル等ノコトアルナシ然ラハ則チ外國人ト雖トモ仲裁人ト爲ルニ於テ何ノ差支トモ爲ルコトナカルヘシト考フルナリ

(六)外國人ヲ鑑定人トシテ佛國裁判所ニ呼出スコトヲ得是レ亦タ特ニ此事ヲ規定シタルノ法律アルニアラスト雖トモ或ル控訴院ノ判決例ニ依ルトキハ凡ソ裁判所ヨリ鑑定ヲ命スルハ通常ノ依頼狀ヲ發スルニ等ク而シテ鑑定人ハ事ノ曲直ヲ決定スルモノニアラサルヤ言ヲ俟タサル所ニシテ毫モ司法權ヲ委托スルモノニアラス單ニ裁判官ノ參者ト爲ルヘキノ材料ヲ蒐メ之ニ自己ノ意見ヲ添ユルノミニシテ之ヲ採用スルト否トハ固ヨリ其與ル所ニアラスト然ラハ則チ外國人ヲシテ鑑定人タルコトヲ許スモ何ノ不可カ之アラント云フニアリ

(七)分散ノ場合ニ於テ外國人ノカ管財人ト爲ルコトヲ得而シテ其理由ハ亦前段ト同一ニ出ツルモノナリ

(八)外國人佛國ニ於テ後見人ト爲リ又ハ親屬會議ニ參與スルコトヲ得ルヤ否ヤ此問題タル大ニ學者間ニ議論ヲ惹キ起シタル所ニシテ其說概チ三種ニ分ル第一說ニ曰ク外國人ハ後見人又ハ親屬會議ニ列スルコトヲ得ス然レモ無能力者ノ親屬ニ係ルトキハ此限リニアラスト而シテ其理由ヲ聞クニ親屬ノ爲メニ後見人ト爲リ又ハ親屬會議ニ列スルハ是レ親屬タルモノ、義務ニシテ又權利ナリ然ラハ則チ縱令外國人ト雖モ又等シク此義務ヲ負ヒ此權利ヲ有スヘキヤ理固ヨリ然リトスル所ナリ若シ夫レ彼レ外國人ニシテ無能力者ノ親屬ニアラストセンカスル權利ヲ有スルノ理ナク又義務ヲ負フヘキニアラスシテ全ク一ノ公益上ノ職務ニ變スルモノナリト謂ハサルヲ得ス已ニ公益上ノ職務タル以上ハ佛國公民タルノ資格ヲ有スル者ニアラスハ決シテ之ヲ許スヘカラスト云フニ在リ第二說ニ曰ク外國人カ親屬タルト否トヲ論スルヲ要セス元來後見人親屬會議等ノコトハ公務ニ屬スルモノニシテ從テ公民ノ職務ナリ故ニ外國人

ニ許スヘキニアラスト第三説モ亦タ親屬タルト否トテ區別セサルノ説ナリト雖トモ歸スル處第一説ニ等シ即チ外國人ノ親屬タルト否トハ問フヘキニアラサルモ後見及ヒ親屬會議ニ列スル等ノ事ハ素ト人民ノ私權ニ屬ス決シテ公權ニ基クノ職務ニアラス故ニ常ニ之ヲ外國人ニ許スモ其不可ヲ見サルナリト斯ノ如ク三箇ノ學說アリ就中第二及ヒ第三説ハ佛國有名ノ大家ノ唱道スル所ニシテ第二説ヲ唱フルモノナドモロンブオーブリーローノ諸家ト爲シ第三説ヲ唱フルモノナデマンデーローラン等ト爲ス而シテ第一説ハ佛國多數ノ判決例ニ現ハ、説ニシテ且余カ此講義ニ於テ主トシテ參考ニ供スルアントドレーズ氏ノ贊助スル所ナリ氏ノ言ニ曰ク第一説ノ如ク其外國人ニシテ親屬タルト否トニ因リテ或ハ之ヲ許シ或ハ之ヲ許サ、ルハ明文ノ規定ナシト雖モ佛國法律ノ精神ニ於テ顯ハル、所ナリ即チ民法第四百四十二條ニ依レハ女子ハ後見人ト爲ルコトヲ得ス但無能力者ノ母又ハ尊屬ノ女ナルキハ之ヲ許スモノトスト是レ女子ハ一般ニ公民權ヲ有セサルヲ以テ公權ヲ行フコトヲ許サスト雖モ親屬ニ係ルキハ特ニ之ヲ許スノ義ナリ又刑法第四十二條ニ於テモ公權剝奪ノ刑ニ處

セラレタルモノハ後見人ト爲リ又ハ親屬會議ニ列スルヲ得ス但シ己レノ子ノ爲メニスルモノハ之ヲ許スト是ニ由テ之ヲ觀レハ外國人ナシテ後見人ト爲リ又ハ親屬會議ニ列スルコトヲ許スト否トハ其親屬タルト否トニ依リテ之ヲ決スヘシト余熟々考フルニ此説タル佛國多數ノ判決例ニ依據シ加ルニ民法ノ精神ヲ援引シ來リタルモノニシテ其説ク所佛蘭西內國法律家ノ説トシテハ有力ナルコト固ヨリナリト雖モ之ヲ國際法ノ原則ニ照ストキハ如何蓋シ法律ニ明文ナク場合ニ於テハ其事ト或ハ相關係シ或ハ相聯絡スル他ノ法文ノ精神ヲ究メ而シテ之ヲ其事ニ適用スルハ內國法ヲ講スルニ付テハ則チ可ナリ然レトモ國際法ヲ講スルニ當リテハ宜ク國際法ノ原則ニ依テ其問題ヲ決スヘキナリトスルモノ、如シ彼ノ第二説及ヒ第三説ノ如キハ互ニ絶對的反對ノ説ナリト雖モ何レモノノ定見ヲ具ヘ頗ル有力ノ説ト云フヘシ而シテ此二説中余ヲシテ其一ヲ選ハシムレハ專ラ第三説ニ左袒セントス然トモ余ハ此點ニ付テ未タ充分ニ研究ヲ盡サ、ルヲ以テ他日反覆玩味スルトキハ或ハ意見ヲ變スコトアルヤ知ルヘカラス而シテ此問題タル第二編各國私法低觸論ノ部ニ於テ各國ノ法

制ヲ比較シ詳細論究スルノ機ニ會スルノ日ヲ待テ再ヒ述ル處アルヘシ

(第六回)

外國人私  
權論

第二節 外國人私權論

此節ヲ三款ニ分チ第一款總論第二款親屬權第三款財產權ト爲ス

總論

第一款 總論

佛國ニ在  
ル外國人  
有佛國ノ  
民權ヲ享  
ハスルヤ  
否

佛國民法第八條ニ曰ク總テ佛國人ハ民權ヲ享有ス下所謂民權トハ各人互ニ相  
交ルノ際ニ於テ親屬ノ關係財產ノ關係ヨリ生スル所ノ總テノ權利ヲ云フ前節  
ニ述ヘタル政權即チ公民權トハ全ク異ナルモノニシテ男女ヲ問ハス年齢ニ拘  
ラス凡ソ佛國人タル者ハ何人モ皆享有スル權利ナリ然ルニ今若シ外國人ニシ  
テ佛國ニ在ル處ノモノハ亦タ佛國人ニ等ク佛國ノ法律ヲ以テ制定セタル此民  
權ヲ享有スルコトヲ得ルヤ否是レ決セサル可ラサルノ問題ナリ而シテ佛國民  
法ニ於テ此問題ヲ決スルノ原則トシテ規定スルモノハ唯一アルノミ同法第十

一條是ナリ其文ニ曰ク佛國ニ在ル外國人ハ其本國ト佛國ト取結ヒタル條約ニ  
因リ其國ニ於テ佛國人ニ與フル所ニ等シキ民權ヲ享有ス下今本條ノ沿革ヲ考  
フルニ佛國大革命以前ニ於テハ外國人ハ佛國ニ於テ所有權及ヒ相續又ハ遺囑  
ノ權ヲ有セザリシカ故ニ外國人ニシテ財產ヲ遺シテ佛國ニ死シ而テ佛國人ニ  
シテ其相續ヲ爲シ又ハ遺囑ヲ受ケタル者アルトキハ則チ可ナリト雖トモ若シ  
之ナシトセンカ死者ノ親屬タル外國人ハ之ヲ本國ニ持チ歸ルコトヲ得スシテ  
總テ死者ノ財產ハ之ヲ國庫ニ沒收シ以テ國王ノ所有ニ歸セシムルノ例ナリシ  
然ルニ彼ノ大革命ト共ニ人權宣告ト云ヘルコトアリ内外人權利平等ノ主義ヲ  
天下ニ布告シタリシカ其後二十ク年間ノ經驗ヲ以テ見ルニ佛國ニ於テハ斯ノ  
如ク外國人ヲ優待スルト雖トモ之ニ反シテ諸外國ハ毫モ佛國ノ新主義ヲ探ラ  
ス依然トシテ封建主義ノ舊套ヲ墨守シ佛國人ニシテ外國ニ在ルモノヲ虐待ス  
ルノ狀態アリキ是ヲ以テ千八百四十年民法編纂ノ際斯ノ如ク不公平ノ結果ヲ將  
來ニ防カンカ爲メ即チ民法第十一條ヲ決定セタルナリ其他相續ノコトニ付テ  
ハ第七百二十六條アリ贈與遺囑ノコトニ付テハ第九百十二條アリ共ニ前ト同

(國際私法)

一ノ精神ニ職由スルモノニシテ即チ大革命ノ自由主義ヲ以テ外國人ヲ優待スルノ太甚シキニ出テタルヲ悔ヒ遂ニ是等ノ規定ヲ見ルニ至リタルニ外ナラサルナリ

扱テ此第十一條ハ果シテ如何ナル意味ヲ含蓄スルヤ即チ外國人ハ佛國ニ於テ毫モ私權ヲ享有シ能ハサルカ將タ條約ノ有無ニ拘ラス法律ヲ以テ特ニ禁セサル私權ハ外國人之ヲ享有シ得ルノ意ナルカ蓋シ之ヲ解釋スルニ三派ノ說アリ請フ左ニ之ヲ略述セン

第一說 外國人ハ私權ヲ有セスト云フヲ以テ原則ト爲シ而シテ例外トシテ或ル場合ニ於テ之ヲ有スルト爲スノ說ニシテ即チ外國人ハ彼レ外國人ノ爲メニ明カニ許可シタル場合ノ外私權ノ享有ナシト云フニアリ蓋シ此說タル立論頗ル疎放ニシテ彼ノ第八條ト第十一條ト第一目ノ下ニ並視シ一ハ佛國人ハ民權ヲ享有ストアリ而シテ一ハ外國人ハ條約規定ノ外民權ヲ有セストアルヲ以テ漫ニ法條ノ文字ノヨヲ讀下シ去リタルノ論ナリト謂ハサルヲ得ス斯ノ如キハ外國人ニ對シテ頗ル苛酷ノトナリトス勿論論者ト雖モ其苛酷ナルトナラザ

ルニアラス彼レ自ラ云フ如何セン立法者ハ當時外國ノ形勢ヲ察シ深ク反動ノ心ヲ起シ此法文ヲ制定セシカ故ニ反動心ノ進ル所遂ニ外國人ヲ待スルノ苛酷ニ至レルモノニテ別ニ之カ解釋ノ道ナキヲト又曰ク外國人ヲ待スルノ苛酷モ又幾分カ之ヲ緩フスルコトヲ得即チ假令ヒ條約ナシト雖トモ法律中別ニ明文ヲ以テスルコトアリ例ヘハ佛國民法第十二條及ヒ第十九條ニ於テハ外國人ニ嫁スル佛國ノ女ノ屬籍ノ地ヲ定ム是レ暗ニ外國人カ佛國ニ於テ結婚ヲ爲スノ權利ヲ認ムルモノナリ又第二條ニハ間接ニ外國人ノ所有權ヲ認メ其他第十四條及ヒ第十五條ニハ外國人ト佛國人トノ間ニ起リタル訴訟管轄地ヲ定メタリ是レ又暗ニ内外人互ニ債主ト爲リ負債主ト爲ル場合アルコトヲ認メタルモノナリト蓋シ此種ノ解釋ハ頗ル外國人ニ對シテ苛酷ノ譏ヲ免レサルヲ以テ論者ハ之ヲ避ケンカ爲メ右等ノ條文ヲ引援シ以テ附會ノ理由ヲ附セントスルニアリテ却テ自家ノ不明ヲ證スルニ足レリ

第二說 外國人ニシテ佛國ニ在ルモノハ自然法ヨリ生スル所ノ私權ハ悉ク之ヲ享有スヘシ但シ佛國民法ニ屬スルモノハ第十一條又ハ第十三條等ノ條件ヲ

充タスニアラサレハ能ハス而シテ果シテ如何ナルモノヲ以テ自然法ニ因ルモノト爲シ如何ナルモノヲ以テ民法ニ屬スルモノト爲スヤハ裁判官ノ判斷スル所ナリト云フニアリ此説タル佛國裁判例ノ多ク採用シタル所ニシテ學者間ニ於テモ亦タ賛成スルモノ多シト爲ス是レ蓋シ羅馬法ノ區別ニ從フタルモノニシテ即チ嚮キニ緒言ニ於テ講述シタル内國人ニ適用スヘキ民法ト外國人ニ適用スヘキ萬民法トノ別ニ於ケルト同一ナリトス而シテ自然法ニ出ツルノ權利ハ之ヲ與ヘ内國民法ノ權利ハ條約又ハ法文ヲ以テ明カニ之ヲ許シタルニ非サレハ享有スルコトヲ得セシメスト云フノ説ナレハ敢テ其理ナキニアラサルカ如シト雖トモ如何セン茲ニ一ノ最モ困難ヲ感スルコトアリ何ツヤ曰ク事ニ臨テ一々民法ト自然法トノ識別ヲ爲ス裁判官ノ職掌ノ至難ナルコト是ナリ加之若シ斯ノ如クニ爲サンカ裁判官タルモノ一事件ノ生スル毎ニ自ラ法律ヲ作爲スルト同一ニ歸スルニ至ラン是レ羅馬時代ノ裁判官ヲ以テスレハ或ハ可ナラン然リト雖トモ今日ニ於テ此ノ如キ權限ヲ裁判官ニ一任スルト云フカ如キノ説ハ行ハルヘカラサルナリ

第三説 外國人ニシテ佛國ニ在ル所ノモノハ佛國人ト一般ニ私權ヲ享有スルヲ以テ本則ト爲シ而シテ之カ例外トシテ或ハ私權ノミハ之ヲ外國人ニ與ヘス但シ其例外ノ權利ト雖トモ條約アレハ格別ナリト云フニ在リ此説ヲ主張スル人々ノ曰ク第一説ノ如ク條約以外ノ私權ハ凡テ外國人ニ附與セスト云フカ如キ苛酷ニシテ人情ニ遠カルノ考案及ヒ第二説ノ如ク其自然法ニ屬スルト民法ニ屬スルトノ區別ヲ一ニ裁判官ニ放任スルカ如キ專横ナル慮ハ決シテ立法者ノ意思ニ存セサルヘシ今之ヲ民法編纂當時ノ記錄ニ徵スルニ立法者ノ意見ノ頗ル公平ナリシコトヲ知ルコトヲ得ヘキナリ其第十一條ヲ讀スルニ當テ所謂外國人ニ附與セシテ特ニ佛國人ノミノ享有スル權利トハ如何ナルモノナク云フヤト一々之カ列舉ヲ望ミタルモノアリシニ報告委員某之ヲ説明シテ曰ク是レ固ヨリ草案ニ於テ規定スル所ナリト雖トモ之ヲ民法ノ劈頭ニ掲クルハ其所ヲ得タルモノニ非ス故ニ此所ニ於テハ單ニ原則ヲ掲クルニ止メ後章ニ至リ其關係アル所ニ於テ一々之ヲ規定スヘシ例ヘハ遺囑贈與相續ノコトニ付キ外國人ニ係ル制限ヲ規定スルハ即チ遺囑贈與或ハ相續ノ章ニ於テスルカ如シト



佛國法律ニ於テ外人ノ私權ニ關シテ特ニ規定シタル條文

其條三編

故ニ民法第十四條第十五條第七百二十六條第九百十二條及ヒ訴訟法第九百五條ニ於テハ特ニ外國人ヲ佛國人ト同一視セサルノ規定ヲ爲シタリ然リ而シテ佛國法律カ外國人ヲ遇スルニ自國人ト同一ニセス特ニ嚴格ニ爲スハ是等ノ點ニ止リ他ハ彼我ノ區別ヲ爲スコトナク且ヤ是等ノ場合ト雖トモ條約ノ存スルニ於テハ全ク佛國人ニ等シキ私權ヲ享有セシムルノ精神ニシテ之ヲ要スルニ佛國法律ニ於テ外國人ノ私權ニ付テ特ニ規定スル所左ノ如シ

(一) 民法第七百二十六條及ヒ第九百十二條ニ規定スルカ如ク外國人ハ相續遺囑贈與ニ因リ人ヨリ財産ヲ取得スルノ權ナキコト但シ此規定ハ民法發布後僅ニ六年ノ後即チ千八百十九年ヲ以テ廢セラレタリ

(二) 負債ノ爲メ身體ノ拘留ヲ受クルコト是レ亦タ千八百六十七年ヲ以テ廢セラレ右二箇ノ場合ハ現今ハ業已ニ廢止ニ屬シ今尙ホ存在スルモノハ左ノ三箇ノ場合アルノミ

(三) 外國人被告人ト爲ル場合ニ於テ己レノ住所ノ地ノ裁判所ニ呼出サルノ權利ナキコト是レ民法第十四條ノ規定スル所ナリ

(四) 外國人ハ保證人又ハ保證金ヲ出スニアラサレハ佛國裁判所ニ於テ原告ト爲ルノ權ナキコト是レ民法第十六條及ヒ訴訟法第六十六條ノ規定スル所ナリ

(五) 佛國訴訟法第九百五條並ニ佛國民法第一千二百六十八條ヲ對照スルニ外國人ハ債主ノ爲メ財産ヲ委棄スルモ身體拘留ヲ免ルノ權ナキコト

此第三說タル近時最モ有力ノ說ニシテ余モ亦タ固ヨリ贊成スル所ナリ然ルニ此說ニ對シテ一ノ非難ヲ試ムルモノアリ曰ク若シ夫レ此ノ如ク僅少ノ權利ヲノミ佛國人特有ノ私權ト爲シ而シテ他ハ皆外國人ナシテ享有セシムルモノナリトセンカ民法第十一條ノ制限ハ遂ニ有名無實ニ歸スルニ非スヤト之ニ答フルモノハ曰ク否ラス假令僅々ト雖トモ既ニ佛國人特有ノ私權ノアリテ存スレハ之ヲ如何ソ有名無實ト云フコトナ得ン且ツヤ此佛國人ノ特權ニシテ他日尙ホ一層ノ減少ヲ來スモ決シテ憂フヘキノコトニアラサルノミナラス舊來ノ陋僻ヲ一洗シ外國人ニ對スル猜疑心ヲ蟬脫スルノ徵證トシテ寧ロ吾人ノ賀スヘキノコトナリト而シテ伊太利ニ於テハ千八百六十五年民法ヲ發布シ是等ノ舊慣ヲ破却シ去リ即チ條約ノ有無ヲ問ハス相互ノ慣例ヲ顧慮セス民法上ニ於テハ



内外國人ヲ同一視スルニ至レリ是レ大ニ法學者社會ノ賞賛ヲ受ケタル所ナリ又彼ノ國際私法協會ニ於テハ千八百八十年ウエストレイキ英國有名ノ私法學者氏ノ發議ニ因リ外國人ハ其國籍ト宗教ノ異同トヲ問ハス自國人ト同一ノ私權ヲ享有ス但シ現行法律ヲ以テ明カニ禁止シタルモノハ此限ニアラストノ一事ヲ議決セリ亦タ以テ近世國際學者ノ傾向ヲ占スルニ足ラン以上佛國ニ於ケル外國人身分取扱ニ付キ佛國民法カ採ル所ノ總体ノ原則ヲ講述セシテ以テ以下佛國法ニ於テ規定シタル各種私權ノ適用如何ヲ論セン

第七回

親屬權

第二欸 親屬權

親屬權トハ主トシテ親子ノ關係ヲ云フモノニシテ而シテ親子ノ關係ハ婚姻ニ基ク故ニ親屬權モ亦其由テ來ル所婚姻ニアリト謂フヘシ蓋シ一家ヲ立テ一家屬ヲ組成スルハ人タルモノ、目的ニシテ何レノ立法者モ皆之ヲ勸誘シ之ヲ容易トラシメント欲セサルハ莫シ佛國民法報告委員ボルタリト氏曰ク結婚ノ權

土地ニ依リテ割リアルモノニアラスシテ世界普通ノ權利ナリト云ヒ外國人カ佛國ニ於テ結婚ヲ爲スノ權利アルコトハ何人モ首肯スル處ニシテ前欸ニ述ヘタル三派ノ所論ニ照スニ第一說ヲ主張スル者ハ民法第十二條及ヒ第十九條ニ依リテ暗ニ之ヲ許スト云ヒ第二說ヲ主張スルモノハ結婚ハ自然法上ノ權利ナルカ故ニ之ヲ許スト云ヒ而シテ第三說ヲ主張スルモノハ立法者カ特ニ之ヲ禁ゼサル以上ハ即チ之ヲ許スヘシト云フ其理由ニ於テ各異ナル所アリト雖トモ之ヲ許スヘシト云フニ至テハ則チ一ナリ夫レ既ニ外國人結婚ノ權利アリトスル以上ハ假令佛國ニ於テ結婚スルモ將タ外國ニ於テ結婚スルモ一旦正當ニ結婚ヲ爲シタル以上ハ其結婚ヨリ生スル結果ナカル可ラス即チ結婚ニ基因シテ生スル所ノ諸權利ハ結婚者自ラ之ヲ有シ又之カ爲メニ生スルノ義務ハ他ヨリ結婚者ニ對シテ要求スルコトヲ得ヘシト論モサルヲ得ス蓋シ是固ヨリ佛國法ト外國法トノ間ニ於テ結果ニ關シテ異同ナキ場合ノ謂ヒニシテ若シ夫レ彼レ是レ其撰ナニセズ異同低觸アル場合ノ如キハ他日ニ讓リテ今暫ク之ヲ論セス

(國際私法)





夫妻及ヒ  
親子間ノ  
權利義務

懲戒權及  
ヒ法律上  
ノ收益權  
ニ對スル  
異見

先ツ妻ハ夫ニ對シテ從順ナルヘク又夫ト同居スルノ義務アリ尙ホ其他夫權ニ從フヘシ而シテ夫ハ妻ヲ保護スルノ義務アリ又夫妻相互ニ貞節扶助ノ義務アリ適正ノ婚姻ヨリ生シタル子ハ其親假令外國人タリトモ子ハ父ノ父權ニ從フヘシ又其父ハ子ヨリ尊敬ヲ受クルノ權利アリ而シテ是レト同時ニ子ヲ養育スルノ義務アルカ故ニ從テ其子ヲ自家ニ同居セシメ或ハ他人ニ托シテ己レ之ヲ監督スルノ權利アリ加之佛國法ニ所謂懲戒ノ權後見ノ權法律上ノ收益權モ亦タ父權ノ一部タルカ故ニ余ハ外國人ニモ之ヲ享有セシムヘキモノト信スルナリ然レトモ外國人ナシテ此三クノ權利ヲ享有セシムルノ點ニ付テハ論者或ハ說ヲ異ニスルモノアリ請フ少ク之ヲ述ヘン

第一父外國人タルトキハ其子ニ對シテ懲戒ノ權ナシ何トナレハ懲戒權ナルモノハ佛國官吏ノ行政權ヲ假ルニアラサレハ之ヲ行フコトヲ得ス然ルニ行政權ハ外國人ノ爲メニ其力ヲ貸ス能ハサルモノナレハナリ第二外國人ナル父ハ幼者ノ財産上ニ法律上ノ收益ノ權ナシ何トナレハ佛國民法第三百八十四條ハ自然法ヨリ來タルモノニアラス即チ父タルモノ、自然ノ義務ニ關係ナク只タ是

第一節  
第二節

後見人ト  
爲ルノ權  
アルヤ

レ佛國人タル父ノ特權トシテ佛國立法者カ設定シタルノ法文ナリ即チ此收益權タル嫡生子ノ親ニノミ享有チ許シ私生子ノ親ト雖トモ之ヲ附與セサル程ノモノニシテ極メテ狹隘ノ意味ニ解スヘキ法文タルヲ見ルヘケレハナリト蓋此說ハ總論ニ於テ述ヘタル第二說即チ自然法上ノ權利タルト民法上ノ權利タルトチ區別スルノ說ヲ唱フルモノ、主張スル所ナリ

右ノ二說ニ對スル辯駁ノ言種々アリト雖トモ其詳ナルコトハ之ヲ次章ニ讓リ先ツ此處ニ於テハ簡單ノ一言ヲ以テ駁スルニ止ン即チ總論ニ於テ已ニ陳述シタルカ如ク佛國法ニ於テハ外國人ニ禁スルコトナキ以上ハ懲戒權モ收益權モ外國人之ヲ有スルモノト謂ハサルヲ得ス且夫レ第三百八十三條ハ狹隘ノ意味ニ解スヘシト云フト雖トモ是レ只タ同條ニ於テハ私生子ノ親ヲ包含セサルノミノコトニシテ外國人ヲ除去スルノ意ハ毫モ明文ノ示サ、ル所ナリ

外國人カ後見人ト爲ルコトヲ得ルヤ否ヤノ問題ハ第六回ノ講筵ニ於テ論シタルカ如ク敢テ疑戒ヲ存スル所ナキカ如シ

外國人カ佛國ニ於テ佛國人ノ養子ト爲リ又ハ佛國人ヲ養子ト爲スコトヲ得ル

養子ト爲  
リ又ハ養  
子ト爲ス  
ル權

第一說

ヤ否ヤノ問題ハ同シク第六回ニ述ヘタル第一說即チ法律上明カニ外國人ニ許  
容セサルコトハ外國人總テ之カ權利ヲ有セスト主張スル派ニアリテハ此問題  
ニ付テモ亦タ外國人ハ其權利ヲ有セスト論セリ是レ此派カ把持スル主旨ニ依  
リ固ヨリ然ラサルヲ得サルナリ又第二說即チ自然法上ノ權利ト民法上ノ權利  
トチ區別スルノ說ヲ主張スル派ニ於テハ其說ニ種ニ分レ一ハ外國人ト雖トモ  
其權利ヲ有スルモノト爲シ他ノ一ハ否ラスト爲ス請フ左ニ此二種ノ說ニ付キ  
少シク論述スルヲ得ン

其權利アリトスル說ニ曰ク養子トハ妻ナキ人又ハ子ナキ人ノ爲メニ假ニ設ケ  
タル親屬關係ノ模擬ニシテ年齡ノ異ナル二人ノ間ニ親子ノ權利義務ヲ定ムル  
モノナリ本來天然真正ナル親子ノ關係ハ婚姻ニ起因スルモノナリ而シテ外國  
人佛國ニ於テ婚姻ヲ爲スノ權アル以上ハ從テ此婚姻ニ起因スル總テノ親權ヲ  
有スルヤ明ナリト謂フヘシ已ニ外國人ニ真正ノ親權ヲ許容スル以上ハ養子即  
チ法律上模擬ノ親權ヲ許サトルノ謂ハレナシ且ヤ現今佛國法ニ所謂養子ハ其  
養子ト實家ノ親トノ間ニ於ケル生來ノ關係殆ト變スルコトナク到底養子ト養

國際私法

第二說

親トノ間ニ於ケル一種ノ相續上ノ契約タルカ如シ而シテ佛國民法第三百五十  
條ニ規定スルカ如ク養子ハ養親ノ財産上ニ付キ嫡生子ト同一ノ權利ヲ得然ラ  
ハ則チ今日ニ在テハ通常ノ外國人ニテモ相續又ハ遺囑ヲ以テ佛國人ヨリ直ニ  
財産ヲ受クルノ權利アルカ故ニ其名異ナリト雖トモ外國人ヲ養子トシテ相續  
ヲ許スニ毫モ不可ナルコトナキ筈ナレハナリト其

其權利ナシトスル說ニ曰ク婚姻ヨリ生スル真正ナル親子ノ關係ト彼ノ養親養  
子ノ關係トハ外形コン相似タレ其實大ニ趣ヲ異ニス蓋シ婚姻ハ人生ノ常態ニ  
シテ自然ノ道理ナリ故ニ法律之ヲ獎勵シ之ヲ保護ス養子ハ否ラス人生必要ノ  
トニアラサルノミナラス或ハ却テ婚姻ノ要ヲ減スルカ故ニ此點ヨリ觀レハ養  
子ハ以テ有害ノトナリト謂ハサルヲ得ス去レハ養子ナルモノハ法律ノ欲スル  
所ニアラス止ムヲ得ス之ヲ許シ而シテ之ヲ許スニ付テハ種々ノ豫防法ヲ設ケ  
タルナリ又内外人ノ婚姻スルトキハ夫婦ハ何レカノ國籍ニ一歸スヘキモノト  
ルモ養子ニ付テハ然ラス或ハ養親佛國人ニシテ養子外國人タルコトアリ或ハ  
養親外國人ニシテ養子佛國人タルコトアリ此ノ如ク其間種々ノ困難ヲ生スル

國際私法

カ故ニ外國人カ佛國人ノ養子ト爲リ又バ佛國人ヲ養子ト爲スハ何レモ之ヲ許容セサルニ如カス加之養子ノ制ハ世界一般ニ行ハル、モノニアラス(即チ英國ニハ此制ナシ)是レ即チ自然法ニ出テサルノ證據ナリ殊ニ其内國民法ニ屬スルノ制度ニシテ外國人ニ許容セサルコトハ佛國法律カ定ムル處ノ養子ニ關スル諸手續ヲ見テモ知ルコトヲ得ヘキナリ即チ佛國民法第三百五十五條及ヒ第三百五十七條ニ於テ養親ノ品行徳義如何ヲ詮議シ以テ養子契約ヲ允許スヘキコトヲ裁判所ニ托シタリ此規定ノ如キモ佛國人ニ對スルモノトスレハコソ効能アレ若シ夫レ外國人ニ對スルモノナリトセンガ其品行徳義如何ノ如キハ佛國裁判所ノ得テ知ルヘカラサルコト屢々コレアルニケレバナリ然レモ養親ノ品行徳義ノ如ク數種ノ說アリト雖トモ余輩今茲ニ一々其說ノ價値ヲ評スルコトナサス只彼ノ自然法主義ヲ唱フルモノ、說ク處泛々トシテ確乎タル根底ナク同派ノ中ニ於テ異說ヲ立ツルカ如キ餘地アルコトヲ示サント欲スルノ、余輩ハ自然法上ノ權利ト純粹民法上ノ權利トヲ區別セズ偏ヘニ前回ニ述ヘタル處ノ主義ニ從ヒ苟モ佛國立法者カ此權利ヲ以テ佛國人ノミニ附與スト明言セサル

結論

私生子

以上ハ外國人ト雖トモ佛國人ノ養子ト爲リ又佛國人ヲ養子ト爲スノ權利アリト斷言スヘシ  
又佛國人ナル女カ産ミタル私生子ト外國人カ我子ナリト認ムルコトヲ得トハ一般普通ノ說ナリ左レハ私生子ト其父母トノ間ニ存スル關係就中養育義務ノ生スルコトハ敢テ佛國人ト異ナル所ナシ是レ亦タ法律ニ於テ外國人ヲ排除ク旨ヲ掲ケサレハナリ  
以上論スル所ヲ要スルニ外國人カ佛國人ニ於テ婚姻並ニ嫡生子養子私生子ノ關係ヨリ生スル親族權ハ之ヲ佛國人ニ於テ執行スルモ毫モ妨ナシト云フニアリ而シテ右等ノ諸權利執行ノ方法ハ第二編法律抵觸ノコトヲ說クニ當テ詳述スルコトアルヘシ

第二款 財產權

本款ノ始メニ於テ財產ノ區別及ヒ其定義ヲ述ヘント欲ス元來是等ノコトハ法理論或ハ民法ノ講義ニ於テ何人モ說ク所ナリ然ルモ今本款ニ於テ特ニ之

(國際私法)

義財產ノ定

財產ニ三  
種アリ

ヲ述フル所以ノモノハ他ナシ少ク尋常ノ説キ方ト異ナル所アリ又國際私法  
上ニ於テハ斯ノ如クスルヲ以テ宜キニ適フモノト考フレハナリ  
財產トハ金錢ヲ以テ見積リ得ヘキ私權ノ總稱ナリ而シテ私權トハ如何ナルモ  
ノナルヤ其性質ヲ考フルニ蓋シ三箇ノ種類アルヲ見ル  
第一 人ト物トノ間ニ直接ノ關係ヲ有シ其間別ニ何モノノ加入ヲモ要セサル  
モノノヲ物權ト云フ  
第二 二箇ノ人相對シ此一方ハ他ノ一方ノ爲メニ或ル利益ヲ供スルノ義務ヲ  
負ヒ而シテ目的物ヲ第二段ニ置クモノノヲ人權ト云フ  
右ノ物權人權ハ素ト是レ羅馬法ノ區別スル所ナルカ此他別ニ左ノ如キ一種ノ  
權利アリ  
第三 人ノ智識或ハ作業ヨリ產ミ出スモノノヲ智。能。權。或ハ發。明。ノ。權。ト云フ而  
シテ此種ノ權利ハ前ノ二者ト特ニ相異ナル性質アルカ故ニ之ヲ同種類ノ中ニ  
混入スルヲ得ス

(第八回)

物權財產

所有權

前回ニ於テ述ヘタル三種ノ權利ハ外國人佛國ニ於テ凡テ之ヲ請求スルコトヲ  
得ルヤ否ヤ以下更ニ條ヲ分テ論スヘシ

第一條 物權財產  
佛國法ニ於テ明文ヲ以テ認定シタル物權財產ノ種類左ノ如シ(一)所有權(二)地役  
權(三)使用權收益權(四)不動産抵當權其他擔保物權是レナリ  
抑モ所有權ハ人ノ内部ノ働キカ外部ノ實物ニ對シテ其力ヲ及ホスノ結果ニシ  
テ人タルモノ一身發達ノ徵候ト謂フヘシ若シ社會ニ於テ此所有權ヲ認ムルコ  
トナキトキハ商業モ貯蓄モ遂ニ行ハレサルニ至ルヘシ然ルニ佛國往時ノ法律  
ハ外國人ノ所有權ハ充分之ヲ許容セサリシコトハ前ニ已ニ述ヘタルカ如シ加  
之現今ト雖トモ尙ホ或ル國ノ如キハ此外國人ノ所有權ニ許多ノ制限ヲ附スル  
モノナキニアラサルコトハ次章ニ至テ見ルヘキナリ而シテ今日佛國ニ於テハ  
毫モ如此陋習ヲ遺サス即チ佛國民法第三條ニ依ルトキハ外國人ニ土地所有權  
ヲ許スヤ明カナリ又彼ノ無條約無法條ノ場合ニハ權利ヲ與ヘスト主張スル者  
ト雖トモ敢テ所有權ナシト迄云フニアラス然ラハ則チ佛國ニ於テハ外國人ト

支分權

雖トモ不動産トリ動産ナリ隨意ニ之ヲ所有スルコトヲ得ヘキナリ  
夫レ斯ノ如ク所有權ニ付テハ毫無疑フ處ナレト雖トモ彼ノ所有權ノ支分權ナ  
ル地役使用收益不動産抵當ノ如キモノニ付テモ亦同一ナルヘキヤ否ヤ是レ  
彼ノ「多ク有スルモノハ無論其少ク有ス」トノ法律上ノ格言ヨリシテ看レハ一  
ノ異議ノ存スル餘地ナキナリ何トナレハ完全ナル所有權ヲ有スルモノカ其支  
分權ヲ有スル能ハスト云フカ如キ理アラサレハナリ然レトモ猶ホ或者ニ付テ  
ハ全ク異論ナキニモアラサレハ此三者ニ付キ左ニ少ク説明スル所アルヘ  
シ  
地役トハ一ノ不動産カ隣接セル他ノ不動産ノ利益ノ爲メ幾分ノ義務ヲ負擔セ  
而シテ隣地ハ是ニ由テ其價值ヲ増シ義務ヲ負擔スル土地ハ其負擔タケ其土地  
ノ瑕疵ト爲リ爲メニ幾分ノ價格ヲ減スルノ姿ト爲ル然ラハ則チ地役ハ兩箇ノ  
土地ノ間ニ生スル法律上ノ關係ニシテ一方ノ土地ハ權利者ノ位置ニ立チ他ハ  
義務者ノ位置ニ立ツモノナレハ其所有者ノ如キハ何人タルヤ論スルノ要ナ  
ク即チ外國人タリ内國人タルノ區別ノ存スル謂ハレナシ此事ニ付テハ未タ會

地役

法律上ノ

使用權收  
益權

不動産抵  
當權

テ反對論ノ生セサル處ナリ外國人ニ對シテ外國人ノ利益ノ爲メ幾分ノ義務ヲ負擔セ  
使用權收○益○權○ハ其權利者タル對手ハ人ニアリテ前段ノ如ク土地ニアラス然レ  
モ是レ亦義務カ土地ニ固着セタルモノニシテ對手ノ何人タルヲ論スルノ要  
ナク且民法上ノ之ヲ禁セサル以上ハ外國人モ佛國人ト同一ノ權利アリト謂フ  
ヘキナリ  
○不動產○抵○當○權○ハ外國人之ヲ有スルヲ得ルヤ否ヤ余ハ固ヨリ此點ニ付テモ前ノ  
二者ト同一様ニ考フルモノナリ何トナレハ外國人已ニ所有權ヲ有スルコトヲ  
得ヘク又債主權ヲ有スルコトヲ得ヘキ以上ハ其所謂所有權ノ支分權タリ又債  
主權ノ擔保タル抵當權ヲ有スルコトヲ得サルノ謂ハレアラサレハナリ加之外  
國人ニ所有權ヲ有スルコトヲ許シ而シテ尙ホ且佛國ノ爲メニ害ナシトスレハ何  
種ノ抵當權ヲ有スルコトヲ許シテ害アルノ理アラザヤ然ルニ佛國民法ニ於テ三  
第一ニ同法第二百二十四條ノ規定スル處ニシテ即チ契約上ノ抵當權ト爲シ  
第二ハ第二百二十三條ノ規定スル處ニシテ裁判上ノ抵當權ト爲シ而シテ第三

(國際私法)

第一說

ハ第二百二十一條ノ規定スル所ニシテ法律上ノ抵當權ト爲ス此三種ノ抵當  
權中第一第二ノ二種即チ契約上ノ抵當權及ヒ裁判上ノ抵當權ハ外國人モ之ヲ  
有スルノ權利アリトシテ別ニ議論ヲ生スルコトナシト雖トモ其第三種即チ法  
律上ノ抵當權ニ至テハ少シク疑オキニアラス蓋シ法律上ノ抵當權トハ婦カ夫ノ  
財産ノ上ニ有シ又ハ幼者禁治産者カ後見人ノ財産ノ上ニ有スルノ抵當權ニシ  
テ要スルニ本人ニ代リテ財産ヲ管理スルモノカ其終結決算イトキニ至リ被管  
理者ノ財産ニ不足ヲ生スルニ於テハ管理者ノ財産ヲ法律上ノ抵當物トシテ賣  
拂ヒ以テ其不足ヲ補ハシムルモノヲ云ヒ而シテ此抵當權ヲ外國人ヲシテ有セ  
シムルコトヲ得ルヤ否ク問題ニ付キ或ハ曰ク是レ内國民法上ノ一權利ニシテ  
妄リニ外國人ニ許スヘカラス或ハ曰ク是レ自然法上ノ一權利ナリ外國人ニモ  
亦之ヲ許スヘシトモ然レテ以テ外國人モ亦同一ノ權利ヲ得ルベシトモ  
之ヲ可トス然レテ曰ク己ニ契約上ノ抵當權ヲ外國人ニ許ス以上ハ法律上ノ  
抵當權ヲ拒絶スルノ理オシ況ンヤ法律上ノ抵當權ナルモノハ夫ノ婦ニ對シ親  
ノ子ニ對スルモノナリ而シテ外國人モ佛國ニ於テ佛國人ト結婚ノ權アリ從テ又

第二說

親子間ノ權利アリ然ラハ則チ其婦ニ對シ其子ニ對スルノ權利ハ外國人固ヨリ  
之ヲ享有スルニシテ然レテ佛國ノ法律ニ依リ佛國人モ亦佛國人ノ權利ニ對シ親  
之ヲ否トスルヲ説即チ自然法派ノ説ニ曰ク外國人タル婦又ハ幼者ノ爲メ其夫  
又ハ後見人ノ財産上ニ法律上ノ抵當ノ權ヲシテ夫レ外國人ノ地位ヨリ論ズル  
キハ契約上ノ抵當權ト法律上ノ抵當權ト其間毫モ相似タルモノナシ彼ノ契約  
ヲ以テ抵當權ヲ得ルコトハ外國人カ佛國ニ於テ所有權ヲ得又ハ債主權ヲ得ル  
ト同一ニシテ即チ自然法上ノ一權利タルニ過キス然リト雖トモ佛國民法ニ所  
謂法律上ノ抵當權ナルモノハ有夫ノ婦若クハ幼者其他ノ無能力者ヲ保護セシ  
トスルノ特典ニシテ其目的ハ彼等ノ財産ヲ管理スル人ノ浪費又ハ不注意ヲ制  
セント欲スルニアリ如此特別ナル保護ハ何人ヲ論セスシテ與フヘキモノニアラ  
ズ法律ノ意ハ佛國人ニ限り之ヲ與フルニアリ加之法律上ノ抵當權ハ夫タリ又  
ハ後見人タル人ニ對スル他ノ債主ノ爲メニハ極メテ有害ノ方法ナリ何トナレ  
ハ此權利アルカ爲メニ佛國人タル他ノ債主カ大ニ損害ヲ被ムルコトアルヘケ  
レハナリ到底此權利ヲ目シテ自然法上ノ權利ナリト謂フヲ得ス英トイヒ填ト

結 論

人 權 財 產

第二條

イヒ露トイヒ及ヒ其他ノ國ニ於テモ所謂法律上ノ抵當權ノ行ハレサル國アリ然ラハ則チ人世一般ニ行ハルヘキ性質ノモノニアラサルヤ明カナレハナリト此第二ノ說タル佛國多數ノ著述者并ニ裁判例ニ於テ採用スル處ニシテ輿論モ亦タ之ニ歸シ外國人ニハ法律上ノ抵當權ヲ許スヘカラストスル說ノ多キヲ占ムルコトヲ知ルヘシ然レトモ余輩カ總論ニ於テ採用シタル說ニ依ルトキハ全ク反對ニシテ即チ佛國法律カ明カニ之ヲ外國人ニ禁セサル以上ハ此法律上ノ抵當權モ佛國人ニノミ限リテ享有スヘキモノニアラスト論定セサルヘカラサルナリ

第二條 人權財產

外國人佛國ニ於テ所有權其他所有權ノ支分權ヲ享有シ得ルト同一理ニ基キ佛國ニ於テ人ノ債權者ト爲リ又債務者ト爲ルコトヲ得ルモノナリ而シテ是等ノ權利アルコトハ上ニ已ニ述ヘタル處ノ原則ニ依リテ明カナルノミナラス佛國民法第十四條第十五條ニ照スモ外國人カ債權者ト爲リ佛國人タル債務者ヲ佛國ノ裁判所ニ出訴シ又ハ債權者タル佛國人カ債務者タル外國人ヲ佛國ノ裁判所ニ出訴スルコトヲ得ルトノ規定アルコトヲ見テモ知ルヘキナリ去レハ外國人ハ

智能財產

第三條

佛國ニ於テ商業會社ノ株主ト爲リ其利益ノ配當ヲ受ケルヲ得ヘク就中佛國銀行ノ株主タルコトハ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ許シタリ而シテ外國人ガ自己ノ債權ヲ全クシ之カ効力ヲ執行スル爲メニハ佛國法律就中訴訟法ニ規定スル處ノ總テノ方法ヲ履行スルコトヲ得ヘシ一覽百非以實出也然レトモ此ノ點ニ於テ

第三條 智能財產

智能財產或ハ智能權トハ甚タ斬新ノ語ナルモ之ヲ使用スルハ實ニ已ムヲ得サルニ出ツ又諸君ニ於テモ後日ニ至リ此語ヲ使用スルノ事實ヲ簡明ニスル便益アルコトヲ思ヒ當ツルコトアラン

智能財產トハ文章家、美術家、工藝家、發明家カ己レノ製作品ニ付テ有スル權利ヲ云フ我邦ノ所謂版權特許權商標ノ權ハ是レニ該當ス(詳細ハ後ニ述ヘシ)而シテ此種ノ權利ハ人權ニモ非ス物權ニモ非ス別ニ一種ノ財產權ナリトハ是レ前回ニ説明シタル所ナリ今日ハ此權利ハ物權ニアラス從ツテ又所有權ニモ非サル所以ヲ説明セン

(國際私法)

先ツ本問ノ發生シタル原因ヨリ説明セン

智能權ノ物權ナルヤ否ヤノ問題ハ我邦學者間ニ於テ之ヲ論スルモノ殆ント之レナキカ如シ蓋シ本邦ニ於テハ今日迄ハ之ヲ論究スル程ノ必要ナク且左程ノ好問題ニアラサリシ故ナラン然レトモ歐洲諸國ニ於テハ之ヲ論究スル必要アリテ近來殊ニ十年以降ニ在テハ盛ニ之ヲ研究ニ從事スルモノアルヲ聞ク故ニ余輩モ一通リ研究シ置クハ決シテ無用ノ業ニ非サルナリ

歐洲諸國ニ於テハ著術者ノ權利ヲ稱シテ文章所有權ト云ヒ書工圖師彫刻師其他美術家ノ權利ヲ稱シテ美術所有權ト云ヒ新規意匠形狀摸樣若クハ色彩以上ハ本邦特許條例ノ語ニ依ル或ハ製造標商標屋號ヲ專用スルヲ總稱シテ工業所有權ト云フ其他演劇所有權音曲所有權ノ語ノ如キモノモ存在ス如斯全般ノ事物悉ク所有權ト稱スルヲ以テ歐洲一般百年以降慣用ノ熟語トナレリ而シテ此語ノ起原ヲ尋ズルニ佛國革命後即チ千七百九十三年ノ法律ニ於テ文章圖書ニ關スル規定ヲ設ケ始メテ所有權ノ語ヲ使用シタルモノニシテ其以前ニ在テハ此等ノ權利ニ付キ如何ナル語ヲ使用シタルヤ知ルヲ得ス思フニ其當時ニ在テ

智能財產ニ關スル問題

ハ此等ノ權利ヲ保護スルニ必要モナク從ツテ其用語モ一定セサリシモノナラズ

斯ノ如ク佛國ニ於テ始メテ所有權ナル語ヲ用ヒタルヨリ歐洲諸國モ亦其響ニ倣ヒ此語ヲ使用スルニ至レリ然ルニ近世千年以前ヨリニ至リ學者間ニ於テモ又國際條約ノ文面ニ於テモ所有權ノ文字ヲ使用スルヲ避ケ代フルニ作者ノ權美術家ノ權ト云ヒ或ハ演劇興行權音曲興行權ト云ヘリ北米合衆國ノ如キハ著術圖書樂譜ノ權ヲ總稱シテ「コピーライイト」ト云ヘリ此語ノ字義ハ我邦ノ所謂版權ニ類似セリ又西班牙國ノ法律ニハ往々智能所有ナル語ヲ使用セリ之ヲ要スルニ所有權ノ語ハ從來久シク慣用スル文字ナルモ近世ニ至リ學者間ニ於テ此字ヲ使用スルハ穩當ヲ欠クモノトノ感覺ヲ懷クニ至レリ是レ本問題ヲ喚起シタル原因ナリ

(國際私法)





抑學者ノ著述ノ原稿ヲ起シ、畫工カ額面ヲ畫キ、彫刻師カ立像ヲ造リ、發明者カ新機械ノ模形ヲ創製スル如キ場合ニ於テ其原稿ノ學者ニ屬シ、額面ノ畫工ニ屬シ、立像ノ彫刻師ニ屬シ、機械ノ模形ノ發明者ニ屬スル如キ、此等實物ハ其之ヲ創製セル各自ノ所有物タルコトハ所有權一般ノ法理ニ照ラシ明瞭ナルコトニシテ此點ニ付テハ何人モ疑訝ヲ存セサル所ナリ故ニ余輩ノ是ヨリ論究セシトスルモハ此點ニ非サルナリ

夫レ學者ノ著述ニ於ケル權發明者ノ機械ノ模形ニ於ケル權タル豈ニ唯タ其原稿又ハ模形タル一片ノ實物ヲ已レニ專有スルノモニ止マランヤ他ニ貴重ナル權利ノ存在スルアリ之ヲ總稱シテ作物復寫ノ權ト云フ即チ著述家カ己レノ原稿ヲ基本トナシ數万ノ書籍ヲ刊行シ發明者カ己レノ模形ニ擬シテ幾千ノ機械ヲ製造シ安リニ他人ニ之ヲ許サシルハ蓋シ作物復寫ノ權ヲ自己一身ニ專有スルカ故ナリ而シテ今マ如斯專有權ヲ以テ所有權ト稱スルハ誤レルモノト云ハサル可カラズ請フ其理由ヲ左ニ開陳セン

凡ソ所有權ニハ三箇ノ性質ヲ具備セサル可カラズ第一絕對的ノ性質即チ己レ

獨リ其利益ヲ享有シ他人ヲ容レサルモノヲ云フ故ニ同一ノ目的物ノ上ニ於テ同様に權ヲ他人ニ於テ行フヲ許サズ第二完全無缺ノ性質即チ所有者ハ其物ヲ處分スルノ自由ヲ有ス故ニ之ヲ變更シ之ヲ毀滅スルハ全ク隨意ナリ第三永遠無究ノ性質即チ其權利ノ執行及ヒ讓與ハ歲月ヲ以テ制限スルヲ得サルモノ是等三箇ノ性質ヲ具備スルモノヲ所有權ト云フ然レニ世人ノ所謂文章所有權其他之ニ類スル所有權ト稱スルモノハ果シテ此三箇ノ性質ヲ具備スルカ看ミ彼ハ新ニ書籍ノ刊行セラルトキハ何人タルヲ論セス若干ノ代價ヲ拂フトキハ之ヲ購求シ之ヲ閱讀スルヲ得ルニ非スヤ其他名書ヲ復寫セルモノ若クハ新規ナル樂譜ノ如キモノ亦皆然ラサルハナシ既ニ然ラハ如斯作者ノ權ハ絕對的收益ノ性質ヲ有セサルコト明カナリ又文章美術ノ如キ智能上ノ作物ハ到底人類一般ノ共同財產ニ歸セサル可カラサルモノナルヲ以テ其一旦世上ニ發表シタル以上ハ作者自身ト雖トモ之ヲ變更シ棄滅スルコト能ハサルナリ故ニ完全無缺ノ性質ヲ有スルト云フ可カラズ加之作者ノ權ハ永遠無究ノモノニ非ス何レナレハ若シ之ヲシテ際限ナク作者ノ獨有ニ歸スルトキハ後世學術ノ發達ヲ妨



文章權及美術權

被害者タル者ハ其損害ヲ回復スル手段ヲ盡スコト能ハズ怨ヲ吞シテ止ムニ至ルコト往々是レアルナラント信ズ

猶ホ一言ス可キハ前キニ余輩ハ第一章佛國ニ於ケル外國人身分論ト題シ唯佛國ノ事而已ヲ説明シ次章ニ至リ外國法制ノコトヲ論ズルコトヲ約シタルモ茲ニ講セントスル智能權ノ問題ニ限リテハ之ヲ混同シテ述ヘサレハ其法理ヲ明カニスルヲ得ス故ニ各國ノ法制ヲモ對照シテ講述スヘシ且此問題ニ付テハ余輩カ取調ヘタル條項意外ニ増加シタル故ニ此簡短ヲ主義トスル講義中ニ縷述スルハ或ハ前後ノ關係上權衡ヲ失スル感ナキ能ハス然レトモ此問題ハ近來國際私法中最モ重要ナルモノニ屬シ殊ニ國際法ノ著書モ少ナキヲ以テ其權衡ヲ失スルヲ願ヒス之ヲ詳密ニ講スルコトハセリ吾人ノ權衡ヲ

前回は引續キ第一類文章權及美術權ヨリ説明セン

第一類文章權及美術權

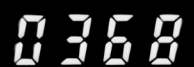
文章權及美術權ノ保護ヲ外國人ニ及ホスハ各國主權者ノ決斷ニ存シ詳言ス

佛國ノ法

レハ保護スルト否トハ一ニ各國主權者ノ權内ニ存シ他ヨリ強ヒテ之ヲ要求スルコト能ハサルモノハ如シ然レトモ我之ヲ保護セサレハ彼亦我ヲ保護セサルハ當然ノ結果ナリ果シテ然ラハ之ニ處スルノ道ヲ誤ルトキハ彼我相互ノ不利益トナルコト少々ナラス故ニ近世歐米各國ニ於テハ內國ノ安寧ヲ害セサル限リハ外人ノ權利ヲ保護スルコトハ或ハ各國其內國法律ニ明文ヲ掲クルモノ如斯外國人ノ權利ヲ保護スルコトハ或ハ各國其內國法律ニ明文ヲ掲クルモノアリトモ多クハ各國間ニ別ニ條約ヲ締結スルヲ通例トス而シテ此條約ヲ締結スルニハ其相互ノ利害得失ヲ察シ果シテ利害得失ノ相懸絶セサルコトヲ熟知シタル後ヲ締結スルモノナル故ニ夙ニ條約ヲ締結シタル邦國アリ又今日ニ至ルマテ猶ホ締結セサル邦國モアルナリ加之其條約ハ皆相互同權ノ取扱ヲ以テ基礎トシ且內國人民ニ與フルヨリ多クノ保護ヲ與ヘサルヲ原則トス故ニ此文

章權美術權ニ付キ外國人ヲ保護スル問題ヲ講究スルニハ必ス先テ各國ノ內國立法ノ大要ヲ明カニスルヲ要ス

佛國ニ於テ著作家美術家ノ權利ヲ一個ノ特許專用ノ權所謂一種ノ所有權ト確



佛國ノ内  
國人ニ于  
スル規定

定シ其人終身ノ特權ヲ與ヘ以テ他人ノ侵害ヲ防觀セシメ彼ノ大革命後即チ千七百九十三年七月十九日ノ法令ヲ以テ嚆矢トス降テ千八百十年ノ法律即チ現行刑法第四百二十五條第四百二十六條并ニ第四百二十七條ニ依レハ著述其他作者ノ權ヲ犯シタル者ハ一ノ輕罪トナシ百フラン以上二千フラン以下ノ罰金ニ處ストナセリ是等ノ法律ハ單ニ作者其人ノミノ權利ヲ定メタルモノナルカニ其後千八百六十六年七月十四日ノ法律ニ於テ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ確定セリ即チ該法律ニ依レハ相續人又ハ讓受人ヘ更ニ五十年間ノ特權ヲ與ヘタリ此法律ニ於テハ翻譯モ亦チ作者特權ノ部類ニ入ルモノニテ作者ノ許可ヲキニ於テハ何人ト雖トモ更ニ之ヲ翻譯スルコトヲ得ス其他演劇又ハ樂譜ノ作物ニ於ケルモ右ト同シク他人ニ之ヲ許スト許サハ作者ノ特權ナリ故ニ作者ニ其特權ノ全部又ハ一部ヲ他人ニ讓渡スモ自由ナリ以上ノ場合ニ於テ若シ作者或ハ讓受人ノ特權ヲ犯ス者アレハ之ヲ偽造犯ト名ケ刑法第四百二十五條乃至第四百二十七條ニ照シテ之ヲ處罰ス斯ル場合ニ於テ其權利ヲ主張スル者ハ即チ巴里ニ於テハ内務省地方ナレハ縣廳ニ於テ其作者カ專ラ二部ノ著作ノ豫

外國人  
ノ著作ニ付  
テノ規定

納ヲナセシメトシ證明ヲナスベキナリ然レバ其來合衆國ノ二國ニ於テ以上ハ佛國ノ内國人ニミ關スル規定ニシテ外國人ノ著作ニ付テハ別ニ法律ノ設ケナカリシモ佛國ノ裁判例並ニ學說ニ由レハ外國人カ佛國ニ於テ始メテ發行セシ作物ニ付テハ之ヲ佛人ノ著作ト同視シ佛人ト同一ノ保護ヲナセシモ外國人カ外國ニ於テ發行セシ作物ニ付テハ法律ニ規定スル所ナク又裁判例モ存在セザリシ故ニ此場合ニハ大抵外國人ノ權利ヲ保護セザルノ習慣ナリシ然レトモ條約國ノ人ニ對シハ佛人同様ノ保護ヲ與ヘタリ後千八百五十三年三月二十八日ノ法律ニ於テ外國作者ノ權利モ充分ニ保護スルニ至レリ今其規定ヲ見ルニ外國發行ノ作物ニシテ佛刑法第四百二十五條ニ記載スル種類ノモノヲ佛國ニテ偽造スル者ハ佛刑法第四百二十七條並ニ第四百二十九條ヲ以テ罰ス可シト規定セリ爾來外國作者ノ權利ハ佛國ニ於テハ充分ニ保護シ若シ佛人又ハ外國人ニシテ佛國ニ於テ外國作者ノ權利ヲ犯ス者アレハ之ヲ罰スルニ至レリサレハ佛國ニ於テハ外國ト條約ノ有無ニ拘ラス外人ノ權利ヲ保護スト雖トモ佛國下條約ナキ國ニ於テ却テ佛人ノ權利ヲ保護セサル國尠少ナラザルヲ以テ

各國内部  
法制ノ特  
文章權保  
護年數

イ、英、法、米、露、普、義、日、西、葡、牙、伊、太、利、墨、西、哥、和、蘭、佛、蘭、西、那、威、葡、萄、牙、露、西、亞、瑞、典、土、耳、古、ノ、諸、國、是、レ、ナ、リ

以下各國内部ノ法制ノ異ナル諸點ヲ述ブベキコトナルガ就中其保護年限ヲ對照スレハ  
照スレハ  
第一著述者本人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第二十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第三十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第四十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第五十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第六十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第七十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第八十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十一著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十二著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十三著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十四著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十五著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十六著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十七著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十八著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第九十九著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限  
第一百著述者ノ相續人及ヒ讓受人ノ權利ヲ保護スル年限

己本人死去後四十年間 伊太利國是レナリ  
庚本人死去後三十年間 獨逸、奧太利、丁抹ノ諸國是レナリ  
辛本人死去後二十年間 白耳義國是レナリ  
壬本人死去後十五年間 希臘國是レナリ  
癸本人死去後七ヶ年間 英吉利國是レナリ  
子本人死去後五年間 智利國是レナリ  
土耳古國ニ於テハ相續人ノ權利ヲ見認メサルナリ  
以上列舉シタルモノハ文章權保護ノ年限ナリ彼ノ美術權保護ノ年限ニ於ケル  
モ之レト大同小異ナルヲ以テ之ヲ略ス  
今本邦版權條例ヲ見ルニ其第十條ニ版權保護ノ年限ハ著作者ノ終身ニ五年ヲ  
加ヘタルモノトス又本人死亡後ハ相續人ノ爲メニハ版權登錄ノ日ヨリ計算  
之ニ五年ヲ加ヘテ仍ホ三十五年ニ足ラサルトキハ其登錄ノ日ヨリ三十五年ト  
ス云々トアリ蓋シ立法者ノ意思ハ本人ノ終身ヲ三十年ト見積リ相續人ニ五ヶ  
年ノ保護ヲ與フルノ精神ナラン

各國ノ條約

保護ノ相互ノ相  
キコトヘ

其外著作物ノ幾部ヲ行政廳ニ豫納シ又ハ版權ヲ登錄スル等ノ手續ハ各國皆其規定アリ而シテ偽造ノ刑タル罰金ト沒收ニ止リ禁錮等ノ刑ヲ設クルコトナシ

以上ハ各國ノ内國法制ニ規定スル所ニシテ各其内國人ノ作者ヲ保護スルニミナリ故ニ外國人ノ作者ヲ保護スルニハ彼我條約ヲ締結シ以テ一定ノ保護法ヲ定メサル可カラス而シテ此等ノ條約ハ千八百四十年ノ際埃普佛英蘭ノ間ニ締結シ次テ千八百五十年ヨリ千八百六十年ノ間ニハ露西班ノ間ニ締結シ千八百六十年ヨリ千八百七十年ノ間ニハ伊葡瑞西等漸次締結セリ故ニ方今文明諸國ニ於テハ此點ニ付キ條約ナキ國ハ希土丁及ヒ米國ノ或部分ノミ(尤モ東洋ヲ除ク)今左ニ右等各國ノ條約ノ綱領トスル規定ヲ述ヘン

第一保護ハ相互タル可キコト 此コトハ此種ノ條約ノ基礎トモ謂フ可キ簡條ニシテ何レノ國ノ條約ニモ掲ケサルハナシ而シテ其文面ニハ種々アルモ要スルニ下ノ意ニ過キズ曰ク條約國中一方ノ著術者美術家ハ他ノ條約國ニ到ルモ該國臣民ト同一ノ特權ヲ受ク可シ若シ該國ニ於テ其權利ヲ害

期限

登録權

品類

翻譯ノ權

スル者アルニ於テハ該國法廷ニ訴ヘ該國ノ作者ト同一ノ保護ヲ受ク可シト

第二外國作者保護ノ期限ヲ定ムルコト 是レ亦タ必要ノ條項ナリ然レトモ實際之ヲ掲グルルモノ少シ佛西班白耳義等ノ條約文中ニハ作者本人ハ終身間相續人ハ二十ヶ年トナシ且末文ニ何レノ國ニ於テモ作者ノ本國法律ノ規定ニ於テハ期限ヨリ永ク之ヲ保護スルコトナシノ文言アリ

第三保護ス可キ品類 即チ著作圖書彫刻樂譜ト云フ如ク逐次其保護ス可キ品類ヲ明記スルコトニシテ各國條約ハ常ニ之ヲ掲グルルモノナリ

第四翻譯ハ何レノ國ノ條約ニテモ原本作者ノ特權ナリ 故ニ原本作者ノ許可ヲ得サレバ(或一定ノ期間)他人ハ妄リニ翻譯ヲナス可カラズ而シテ此翻譯ノ權ハ大抵五年乃至十年間ニテ之ヲ失フ然レ後チハ何人カ譯スルモ自由ナリ千八百六十六年ニ締結シタル佛埃ノ條約ニハ翻譯ノ特權ニ付キ期限ナク唯タ原本ノ表紙ニ妄禁翻譯ノ語ヲ記載ス可シト定ムルノミ又千八百六十二年ニ締結セラレタル伊國ノ條約ニハ原作者自身又ハ他人ニ讓リ



テ)一ヶ年間ニ翻譯ノ一部分ヲ發行ヒサルトキハ其權ヲ拋棄シタルモノト看做スト定メタリ又露佛白耳義ノ條約ニハ翻譯ト原著トヲ同一ニ保護ス

右述ヘタル規定ニ從ヒ發行セラレタル翻譯書ハ原作者ノ手ニ成ルト他人ノ手ニ成ルトヲ間ハス一種ノ著述ト看做スカ故ニ原本ト同様ナル保護ヲ受クルナリ但此翻譯ノ權ハ他人ヲシテ妄リニ自家ノ翻譯ヲ剽窃セシメサル義ニ止ルモノニシテ他人カ同一ノ原著ニ依リ新タニ翻譯スルヲ禁スルヲ得サルモノナリ

登録納本

第五登録納本ノコト 此コトハ條約面ニ掲グル國アリ又掲ケサルアリニ各國ノ便宜ニ委ヌ即チ各國ノ都合ニヨリ外國人ノ著作ヲ保護スル以上ハ内國人同様ニ納本又ハ登録ヲナサシムルモ可ナリ併シ較近ノ條約ニハ往々此等ノ手續ヲ廢止シ其偽造ノ訴ノ起ルニ當リテハ單ニ其特權ノ證書ヲ呈出スルヲ以テ足レリト定ムル國アリ所謂特權ノ證書トハ作者本國ノ當該官廳ヨリ下附シタルモノニシテ該作者ハ本國ニテ法律ノ保護ヲ受ケタ

文章權美  
術權保護  
條約ニ關  
スル萬國  
會議

ル者ナル旨ヲ證明スル書面ナリ即チ登録ノ寫納本ノ證ノ如シ以上陳述スル所ハ文章權并ニ美術權ノ保護ニ關スル各國條約ノ大要ナリ如斯條約國ノ間ニ於テハ互ニ作者ノ權ノ保護アリト雖モ無條約國ノ間ニ於テハ少シモ此等ノ保護ナシ勿論佛國ニ於テハ前キニ述ヘタル如ク千八百五十三年ノ法律アルヲ以テ縱令條約ナクトモ内外人ヲ問ハス之レヲ保護スルコトハナレリ故ニ例ヘハ日本人ノ著述又ハ美術品ヲ(如斯コト至テ稀レナルニモセヨ)佛國ニ於テ或人カ偽造スルトキハ日本人ハ之レヲ佛國ノ法廷ニ訴ヘ偽造者ヲ罰スルコト容易ナル可シ去レハ佛國ノ法律ハ外國人ノ文章權并ニ美術權ヲ保護スルコト充分ナリト云フヲ得可シ然レトモ他ノ外國ニ於テハ未タ必スシモ然ラズ是レ較近學者ノ大ニ憂フル所ナリシ是ニ於テカ千八百八十六年即チ我明治十九年九月瑞西國ノ都府ベルヌ市ニ於テ萬國會議ヲ開キ十二ヶ國ノ委員會同シテ文章權美術權保護條約ヲ聯合締盟セリ右萬國會議ノ席ニハ我帝國ヨリハ委員トシテ不肖ナル余ハ井上外務大臣ノ訓令ヲ帶ヒ此會ニ陪セリ但シ米國ノ委員ト日本ノ委員トハ故アツテ議決ノ數ニ加ハラズ又條約ニ署名セサリキ



沿革  
萬國文學  
美術協會

萬國文學  
美術協會

兎モ角此萬國會議ノ結果タルヤ近來國際私法上ニ一大進歩ヲ顯ハシタル出來事ナルカ故ニ其當時ノ會議ノ顛末并ニ米國ト日本カ署名セサリシ所以ハ次回ノ講筵ニ於テ畧述スル所ナルヘシ

(第十一回) 聯合

本日ハ文章權及ヒ美術權保護萬國ノ事ヲ述ヘン

前回既ニ一言セシ如ク此聯合ハ千八百八十六年九月明治十九年瑞西國ベルヌ府ニ於テ條約成就セシモノナルカ其以前ヨリ歐洲各國ノ文章家美術家カ私ニ會同セシコト兩三回ニ及ビタリシモ此ハ唯同業ノ利害ヲ謀リ將來ノ希望ヲ商議スルニ止マリ其計畫モ亦至テ狭小ナリキ然ルニ千八百七十八年巴里ニ於テ萬國博覽會ヲ開設スルニ際シ各國ノ有志者ハ之ヲ好機會トシ相集リテ萬國文章美術協會ナル者ヲ設立シ其内ヲ二部ニ分チ文章部ノ會長ヲ有名ナル文章家ピクトル・ヒューゴー氏ニ委任シ美術部ノ會長ヲ是亦有名ナルメゾー氏ニ囑託シ

(此兩氏トモ近キ頃易質セリ斯道ノタメ深ク惜ムベシ)以テ諸多ノ重要ナル問題ヲ討議シ且又彼ノ萬國郵便聯合又ハ貨幣聯合ノ例ニ倣ヒテ作者ノ保護ノ爲メニ

千八百八十三年ノ  
ベルヌ府  
私會

第一ノ公  
會  
第二ノ公  
會

ノ聯合條約ヲ結フノ必要ナルヲ決議シタリ此私設協會ハ爾後毎年一回ヲ、巴里ニ於テ總會ヲ催フシ又年々一ノ報告書ヲ發行シ大ニ輿論ヲ喚起シ遂ニ今日ノ地步ヲ致セシモノナリ

此協會カ最モ力ヲ盡シタルハ千八百八十三年瑞西國都ベルヌニ於ケル集會ナリ該集會ニ於テハ左ノ諸件ヲ決議シタリ曰ク萬國政府合同シテ一ノ聯合ヲ組織スルコト聯合中央局ヲベルヌ府ニ設置スルコト萬國政府ヨリ全權委員ヲ派遣シ翌年ベルヌ府ニ會合スルコト等是ナリ且此等ノ議決ヲ各國政府ニ通知シ其委員派出ヲ促カスコトヲ瑞西政府ニ依頼セリ是レ實ニ私設協會カ萬國聯合會ニ變スル進歩ノ第一著ナリ

斯ノ如ク輿論ノ一致シタルヲ見テ瑞西政府ハ其媒介ト爲リ招狀ヲ各國政府ニ發シ其翌年ヲ以テ各國ノ委員ハベルヌ府ニ集會セリ其數十三个國ニ及フ然レトモ此時ハ初テノ公會ナレハ未ダ著シキ効果モナク只種々商議ノ末假ニ一議案ヲ草シ更ニ翌年ヲ期シテ解散ス

サテ翌年モ同地ニテ集會シ略ホ條約案モ成就セシカ終ニ調印ニ至ラスシテ解

(國際私法)



第三ノ公  
會  
聯合條約  
遂ニ成ル

米國ノ調  
印セサル  
理由ハ  
米國委員  
ノ宣言

散シタリ  
其翌年即チ明治十九年ノ萬國會議ハ實ニ聯合條約ノ成立ヲタル時ニシテ此時  
瑞西政府ノ通知ヲ受ケテ會議ニ列セシハ獨逸、白耳義、西班牙、北米合衆國、佛蘭西、  
英吉利、オランダ、伊太利、日本、ベリヤ、瑞西、チニジノ十二個國ニシテ其内日本及  
ヒ合衆國ヲ除キ他ノ十ヶ國ノ委員ハ該條約ニ調印シ翌年九月ヲ以テ各國皆其  
批准アリタリ是レ此ノ文章及美術上萬國聯合ト稱スル堂々タル會合ノ國際上  
ニ生レ出テタル濫觴ニシテ彼ノ郵便電信聯合、貨幣聯合、度量聯合及ヒ工業聯合  
等ト共ニ近來國際法上ノ一大進歩ナリト謂フ可シ  
サテ北米合衆國ハ當時委員ヲ其會議ニ派出シナカラ何故ニ其聯合條約ニ調印  
セザリシカ今其模様ヲ述ヘンニ會議ノ席ニテ該國ノ委員カ本國政府ノ訓令ニ  
依リ演述シタル言ニ曰ク文章家並ニ美術家ヲ相互保護スルノ原則ハ合衆國政  
府ノ深ク贊成スル所ナリ然ルニ此等ノ處分ハ一ニ議院ノ立法權ニ屬シ而シテ  
議院ニ於テハ未タ此ノ如キ相互保護ノ意思アルヲ見ス加之外國ト條約ヲ締結  
スル事モ亦專ラ議院ノ權内ニ存スルカ故ニ今即時此條約ニ調印スル能ハス唯

米國ノ加  
盟ノ難キ  
情實

其理由  
日本ニ對ス

愛ニ合衆國政府ハ此條約ノ主義ニ贊成ヲ表シ更ニ他日好機ノ到ルヲ待テ聯合  
ニ加入センコトヲ希フ云々ト  
此ノ如ク合衆國委員ノ宣言シタルハ又當時其國ノ情實上己ムヲ得サルモノア  
リシナリ此情實ハ三年前ヨリ變シテ今日ハ最早全ク其述ヲ止メザルモ今當時  
ノ情實ヲ考フルニ合衆國ニ於テハ板權法千八百七十年公布ナルモノアリテ内  
國人ノ爲メニハ作者ヲ保護スル方法完備セリト雖トモ外國ノ作者ヲ保護スル事ハ  
一切之ヲ揭ケス却テ其法文第百三條中ニ外國ニテ出版シタル著書ヲ偽造シ刊  
行スルコトヲ誘導スル如キ文言サヘ存シタリシハ頗ル奇ト謂フ可シ夫レ斯ノ  
如クナル所以ノモノハ北米合衆國ハ著述又ハ美術ニ富マス專ラ實業ノミニニ從  
事セシガ其國語ハ幸ヒ英語ナルヲ以テ國民ハ恰モ英語ニ依リテ學問セルカ如  
ク又學校ノ如キ文庫ノ如キ其心要ナル書籍ハ概シテ英語ナリ故ニ英人タル著  
述家又ハ出版者ノ許可ヲ受ケズシテ僞版スルノ風一般ニ盛ニシテ法律モ亦之  
ヲ許容セリ之ガ爲メニ外國就中英國ノ版權所有者ハ非常ノ損害ヲ受クルモ之  
ヲ奈何トモスル能ハズ其太甚シキニ至リテハ龍動ニ於テ出版シタル英書ヲ米國

日本モ亦  
謂印セス  
其理由

聯合ニ加  
盟スルハ  
必要ナシ

ニ於テ廉價ニ翻刻シ翻刻者ハ著作料ヲ拂ハサルヲ以テ之ヲ廉價ニ發賣スルコトヲ得ルハ勿論ナリ之ヲ英國ニ輸入シ英人モ亦其價ノ廉ナルヲ以テ之ヲ購讀スル者多シト云ヘリ此ハ現ニ英國ニ留學セシ人ノ實話ナリ夫レ斯ノ如シ其外國文章家ヲ保護スル能ハサル亦怪シムニ足ラス委員ノ該條約ニ調印セサリモノハ蓋シ之カ爲メ耳

又此聯合條約ノ中ニ日本政府ノ加入セサリシハ何故ナル乎ト云フニ當時委員トシテ出席シタルハ即チ余ニシテ余ハ外務大臣ノ訓令ニ依リ簡單ニ演述シタリ曰ク今直ニ條約ニ加盟スルハ我邦ニ取リテ不便ノ情狀アルヲ以テ調印ニ加入スルコトハ暫ク差扣ニ可シト畢竟其時ノ日本委員ハ唯萬國會議ノ實況ヲ觀察シ之ヲ報告セルニ止マリタリ當時ノ外務大臣ノ訓令ノ理由如何ハ茲ニ之ヲ述ヘサルモ今余一個人ノ考ヲ以テ之ヲ見レハ我邦ハ現今並ニ將來久シキ間ハ彼ノ聯合ニ加入スルノ必要無カル可シト信ス何トナレハ美術上ノ事ハ兎モ角モ文章權ノ事ニ至テハ此ノ如キ條約ヲ結フモ毫モ我邦ノ作者ニ利益スル所無キノミナラス却テ大ニ我邦ノ學術ノ進歩ヲ害スルニ至ル可シ百年ノ後ハイサ

聯合ニ加  
盟スルハ  
不利ナリ

知ラス今日ノ模様ヲ以テスレハ外國人カ日本ノ書物ヲ僞版シ又ハ之ヲ翻譯シテ其本國ニ賣弘ムルカ如キコトハ至テ少ナカル可シ忠臣藏ヲ佛文又ハ伊文ニ翻譯シタルカ如キ末松謙澄氏カ英國留學中源氏物語ヲ英譯シタルカ如キ其他英文ノ帝國憲法佛文ノ民法草案註釋ノ如キノ類多少之ナキニアラサレトモ之ヲ僞版シテ外國人カ利ヲ射ルカ如キコトハ殆ント絶無ノ事ニ屬セリ恐クハ向後數十年ノ後ト雖モ亦斯ノ如キコト無カル可シ然ルニ今此條約ニ加盟セハ目前ニ不都合ヲ現出スルヲ免カレス試ミニ見ヨ近年我國ニ於テ外國ノ著書ヲ翻譯セシモノ擧テ數フ可カラス然レトモ原著者ノ許諾ヲ得テ翻譯セシモノ果シテ幾何カ有ル亦殆ント絶無ト云ハザル可カラス而シテ此等ノ翻譯書カ我邦ノ開化ヲ誘導シタルノ功實ニ鮮少ナリトセス然ルニ今條約ニ加盟シ翻譯スルニモ必ラス原著者ノ許諾ヲ要ストシ濫リニ翻譯スル者ハ裁判所ニ訴ヘ其賠償ヲ徵スルモノトセハ我邦出版者ヨリ外國ニ拂出ス可キ賠償金ハ幾百萬圓ニ上ラシモ亦得テ知ル可カラス殊ニ又我邦出版者ノ外國ノ原書ヲ翻刻僞版スル者決シテ尠少ナラサルヲ知ル此等ハ前ニ説キタル米國流ノ所爲ナリ我邦現時ノ情

米國モ亦  
遂ニ加盟  
ス

况此ノ如クナルヲ以テ余ハ斷シテ文章權保護ノ件ニ付テハ條約ヲ締結ス可カラサルモノト信ス又斯ル聯合ハ他國ヨリ強テ加盟セシムルコトヲ得サルモノニシテ各國其自國ニ利益アルヲ見テ而シテ後始メテ之ニ加盟ス可ク之ニ加盟セサルモ爲メニ國際ノ情誼上妨ケアルニ非サルナリ  
斯ノ如ク北米合衆國及ヒ我日本ハベルヌ府ノ聯合條約ニハ調印セサリシカ他ノ十個國ハ確固ナル一ノ聯合體ヲ組織シ其後澳地利瑞典ルクサンブールノ三國モ之ニ加盟シタリ加之最モ世人ノ注目ヲ惹キタルハ彼ノ利己主義ヨリ一時調印ヲ見合セタル北米合衆國カ二年ヲ經テ千八百八十八年即チ我明治二十一年ニ遂ニ此聯合ニ加盟シタル事是ナリ思フニ米國カ如斯同盟加入シタル以上ハ從來ノ内國ノ法律モ改正シテ他ノ聯合國ト同シク外國ノ作者ヲ保護スヘク又是ニ因リテ英國ノ作者及ヒ出版者カ多年ノ愁眉モ始メテ展フルニ至リシコトナラン  
以上説述シタルカ如ク其初ハ學者ノ私設ニ係ル一協會ヨリ發議シ進ニテ萬國會議ト爲リ國際ノ聯合條約ト化シ遂ニ彼ノ最モ強敵ナリシ北米合衆國ヲモ此

聯合條約

城郭中ニ生擒シ得ルニ至ル以テ此聯合ノ益鞏固ニ赴クヲ徵スルニ足ル  
此聯合條約ノ眼目トスル所ハ一言以テ之ヲ蔽ヘハ曰ク何レノ國ニ於テモ作者ノ權利ヲ保護スルニハ内外人ノ別ヲ設ケスト云フニ在リ今其條約文ヲ左ニ摘録ス

- 第一條 締盟諸國ハ著作及ヒ工藝者ノ爲メ其著作物又ハ工藝物ノ上ニ有スル諸權利ヲ保護センカ爲メ共ニ聯合ヲ結フモノナリ
- 第二條 聯合諸國ノ一方ニ屬スル作者又ハ其讓受人ハ聯合諸國ニテ發行セザルハ未タ發行セサル自己ノ作物ニ付テハ他ノ聯合國ニ至ルモ該國國法ヲ以テ該國々人ニ既ニ附與シ又ハ後來附與ス可キ諸般ノ權利ヲ享有ス
- 此等ノ權利ヲ享有スルニハ最初作物ノ出テシ本國ノ國法ヲ以テ定メシ制限手續ヲ履行スルコトヲ要ス又他ノ聯合國ニ至ルモ其本國ニテ定メタル保護ノ期限ヨリ長ク之ヲ享有スルコトヲ得ス
- 所謂作物ノ本國トハ最初發行ノ國ヲ云フモノトス但數箇ノ聯合國ニテ同時ニ發行シタル物ニ付テハ其内保護期限最モ短キ處ヲ以テ作物ノ本國ト

(國際私法)

看做ス可シ

若シ又其作物未ダ公ケニ發行セサルモノナレハ作者ノ自國ヲ以テ作物ノ本國ト看做ス可シ

第三條 聯合作者ハ聯合國ノ人ニ非スト雖モ其作物ノ發行者ニシテ聯合國ノ人タルトキハ本條約ノ規則ハ其發行人ニモ亦適用ス

第四條 本條約ニ於テ著作物工藝物ト稱スルハ書冊假綴物其他ノ刊行物演戲文又ハ樂入り演戲文文句入り又ハ文句無シ樂曲墨畫油畫彫刻板繪輸入

著述地理圖地形圖測量圖建築圖等ノ如キ總テ學術ニ關スル圖畫凸圖其他發行ノ方法如何ヲ問ハス文章學術工藝ニ關スル總テノ作物ヲ指ス

第五條 聯合諸國ノ一方ニ屬スル作者或ハ其讓受人ハ聯合國中ニテ最初作物ヲ發行セシ時ヨリ起算シテ十ヶ年ノ間ハ他ノ聯合國ニ至ルモ自己ノ作物ヲ翻譯シ又ハ他人ニ其翻譯ヲ許スノ特權ヲ有ス

小冊子ヲ以テ漸次ニ發行スル著作ニ付テハ其最後ノ冊子發行ノ時ヨリ起算ス

一部ノ書ヲ數度ニ發行シテ全備スベキモノ若クハ報告物小冊子ノ類ハ文學又ハ學術ノ協會ヨリ出タルモノト一箇人ヨリ出タルモノトヲ間ハス期限計算ノ爲メニハ各卷各報告各小冊皆別個ノ著作ト看做ス可シ

本條揭クル所ノ場合ニ於テハ著作發行ノ年十二月三十一日ヲ以テ保護期限起算ノ日ト定ム

第六條 正當ナル翻譯ハ原書同様ノ保護ヲ受ク可シ故ニ聯合諸國ニ於テハ正當翻譯者ノ許諾無クシテ之ヲ翻刻スル者アルトキハ本條約第二條第三條ノ制定スル所ヲ以テ之ヲ保護ス可シ

翻譯權既ニ當然公衆ノ共有ニ歸セシモノニ付テハ原翻譯者ト雖トモ他人同原書ヲ翻譯スルヲ妨クルヲ得ス

第七條 聯合國ノ一方ニテ發行セシ新聞及ヒ雜誌ノ文章ハ他ノ聯合國ニ於テ其原文ノ儘之ヲ翻刻シ若クハ之カ翻譯ヲ發行スルコトヲ得但著作者或ハ發行人ヨリ明カニ之ヲ禁止スルモノハ之ヲ許サス

勿論雜誌ニ付テハ每號ノ冒頭ニ一般ニ禁止ノ旨ヲ掲グルヲ以テ足レリトス

(國際私法)

何レニテモ此禁止ハ政事上論文又ハ日報雜報ノ轉載ニ用ユルヲ得ス

第八條 教育又ハ學術ヲ爲メ若クハ雜集編纂ヲ爲メ文章又ハ工藝上ノ著作ヨリ拔萃シテ發行スル權ニ付テハ聯合諸國各自ノ國法及ヒ其間ニ存スル所ノ各國條約ニ從フ可シ

第九條 第二條ニ於テ約スル所ハ總テ演戲文又ハ樂入り演戲文ノ興行ニモ亦之ヲ適用ス而シテ其著作ノ公ケニ發行セシト否トヲ問ハズ

演戲文又ハ樂入り演戲文ノ作者或ハ讓受人ハ其翻譯特權ノ存スル期限内ハ各國互ニ之ヲ保護シ本人ノ許諾ヲ與ヘサル者ヨリ安リニ之ヲ翻譯シテ公ケニ興行スルヲ許サズ

樂曲ノ著作ハ公ケニ發行セシモノト否トヲ問ハズ作者ニ於テ其興行禁止ノ旨ヲ書類ニ明示シタルトキハ之ヲ公ケニ興行スル者ハ同シク第二條ヲ以テ論ス

第十條 竊案樂曲變體等ノ如キ種々ノ名目ヲ付シ人ノ文學上又ハ工藝上ノ著作ヲ許諾ヲ得スレテ間接ニ之ヲ剽竊シタル物ハ其外形ノ異同ヲ問ハズ

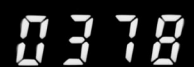
又些少ナル改正増減ノ有無ヲ問ハズ其實本著ノ竊刻ニ外ナラスレテ別ニ一個ノ原作タル性質ヲ具ヘサル以上ハ皆本條約ニ於テ不法竊刻ノ部類ニ入ルベシ

本條適用ニ付テハ聯合各國ノ諸裁判所ニ於テ各其國々法ノ特ニ定ムル所アルトキハ又其特定ノ法ヲモ斟酌ス可シ

第十一條 本條約ノ保護ヲ受クル作者ハ聯合各國ノ諸裁判所ニ於テ僞作者ニ對シ出訴スルカ爲メニハ其著作物ノ上ニ普通ノ方法ニ依リ已レノ姓名ヲ記載シアリタルモノヲ以テ足レリトス但反對ノ證據アルニ於テハ此限ニ在ラス

無名又ハ匿名ノ著作ニ於テハ其書中ニ記名セル發行人ハ作者ノ諸權利ヲ保全スル權アリ此發行人ハ其無名匿名ナル作者ノ讓受人ト看做サル可シ但反對ノ證據アルモノハ此限ニ在ラス

然レトモ裁判所ハ場合ニ依リ第二條ノ意ニ從ヒ其書發行ノ本國ニ於テ其國法ニ定ムル手續ヲ遂ケシモノナルヤ否ヤヲ検査スル爲メ相當官廳ノ



證明書ヲ出サレムルコトヲ得  
第十二條 總テ偽作ハ聯合各國ニ輸入スルニ際シ之ヲ沒收スルコトヲ得  
沒收ハ各國々内ノ立法ニ從テ行フモノトス

第十三條 聯合諸國々内ニ於テ各其法律又ハ警察ノ處分ヲ以テ著作物工藝  
物ノ發賣與行公觀ヲ許可シ監督シ禁止スルハ各其ノ管轄廳ノ權内ニ屬ス  
ルヲ以テ此等ノ處分ニ關シテハ何事ノ生スルモ本條約ハ之ヲ妨クルヲ得  
ス

第十四條 本條約執行ノ日ニ當リ著作物工藝物發行ノ本國ニ於テ其未ダ公  
衆ノ領内ニ歸セサルモノニハ總テ本條約ヲ適用ス可キモノトス但其適用  
ノ制限及ヒ方法ハ別ニ共同會議ヲ以テ定ムル所アル可シ

第十五條 聯合各國ノ政府ハ其間互ニ特別ノ約束ヲ結ビ彼我著作者工藝者  
又ハ其讓受人ノ爲メ本條約ニ定ムル所ヨリ過分ノ權利ヲ附與シ又ハ本條  
約ノ趣旨ニ違背セサルニ於テハ他ノ條約ヲ結フ權アルハ勿論ナリトス  
第十六條 茲ニ萬國共同ノ一局ヲ設立シ名ケテ文章工藝物保護萬國聯合局

ト云フ該局ノ費用ハ聯合各國ノ政府ニ於テ之ヲ擔任シ瑞西政府ノ下ニ置  
キ其監督ヲ受ケシムルモノトス該局ノ職制ハ聯合各國共同ニ於テ之ヲ定  
ム可シ

第十七條 本條約ハ聯合ノ方法改良ノ爲メ更ニ修正ヲ加フルコト有ル可シ  
此種ノ問題其他聯合擴張ニ關スル問題ハ今ヨリ後順次聯合各國ニ於テ各  
國ノ委員ヲ集メ其會議ニ於テ之ヲ論議ス

本條約ニ改良ヲ加フルニハ如何ナル改正トモ聯合諸國全數ノ贊成ヲ  
得ルニ非サレハ其効無キモノトス  
第十八條 本條約ニ署名セサル諸國ニテモ向來各其國々ノ法律ヲ以テ本條  
約ノ趣旨タル諸權利ヲ保護スルニ於テハ其請求ニ依リテハ本條約ニ加入  
スルヲ許ス可シ

此加入ノ請求ハ書面ヲ以テ瑞西政府ニ之ヲ通告ス可シ瑞西政府ハ之ヲ他  
聯合國ノ諸政府ニ傳達スルニ任セシメ其原狀又ハ抄本ヲ送ル可シ  
此加入ノ請求アリタル以上ハ別ニ論議ヲ要セス本條約ニ掲クル所ノ一切

ノ條款ヲ承認シ一切ノ利益ヲ得ルモノトス

第十九條 本條約加入ノ諸國ハ何時ニテモ其殖民地又ハ外國占有地ノ爲メニモ同シク之ニ加入スル權アリ

右ハ一般ニ其意ヲ述ヘ總テノ殖民地總テノ占有地皆加入スト云ヒ若クハ特ニ其加入ス可キ部分ヲ示シ若クハ單ニ其加入セサル部分ヲ示スモ可ナリ

第二十條 本條約ハ批准交換三個月ノ後ヨリ實施ス其實施繼續ノ期ハ無限ノモノトス但離約申告ノ場合ニ於テハ其申告ノ日ヨリ一箇年ヲ經テ實施ヲ止ム可レ

右離約ノ申告ハ初メ加入請求ヲ受ケタル瑞西政府ニ宛テ之ヲ出ス可シ離約ハ之ヲ申告セシ國ニ對シテ其効力ヲ生スルノミ其他聯合諸國ノ爲メニハ本條約ハ依然實施セラレ可シ

第二十一條 本條約ハ運クモ一箇年ノ間ニ批准ヲ受ケ且其批准ハベルヌ區ニ於テ交換ス可シ

工業權及  
商業權

發明特許

(第十二回)

第二類 工業權及ヒ商業權

此第二類ニ於テハ外國ノ發明者及ヒ製造人又ハ商人カ其製造發賣スル所ノ商品ニ付キ如何ナル權利ヲ有スルカヲ論スルニ在リテ今其條目ヲ擧クレハ左ノ如シ

第一 發明特許

第二 雛形摸樣

第三 製造標商標

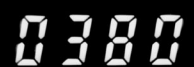
第四 屋號

右ノ條目中我邦ニ於テハ發明特許雛形摸樣及ヒ商標等ハ特別ノ法律ニ於テ規定シ屋號ハ商法中ニ規定セリ然レトモ製造標ニ付テハ未タ法律ノ制定有ラサルナリ

以下此等ノ條目ニ付キテ説明ス可シ

甲 發明特許

(國際私法)



發明者ノ  
權利ニ付  
テノ極端

現時ノ立  
法主義

特許ノ年  
限

發明者ノ權利ニ付テハ歐洲ニ於テ古來頗ル論議ノ起リシコトニテ或ル經濟學者  
ノ如キハ「新發明ハ社會ノ益ニ悅マ可ク賀ス可キノ吉事ニテ」タヒ新發明成  
リテ世間ニ知ラレタル以上ハ社會ハ之ヲ利用スルノ權有リ特リ其發明者ノミ  
ニ之ヲ專用スルノ理無ク又專用セシム可キモノニ非ズトヤテニ極論セルモ  
ノアリタリキ此極論ハ今日ハ消滅ニ歸セシモ姑ク一步ヲ讓リテ此極論ノ主義  
ヲ是認スルモ仍ホ社會ハ其發明者ニ對シテ幾分カ報酬ヲ與フルコト無カル可カ  
ラサルノ理ナリ即チ一方ニ於テハ社會ノ利益ヲ保護シ他ノ一方ニ於テハ發明  
者ヲシテ相當ノ報酬ヲ得セシムルハ動かカス可カラサルノ定理ニシテ現今各國  
ニ於テモ此雙方ノ權利義務ヲ適宜ニ調理スルヲ以テ其立法ノ主義ト爲セリ是  
故ニ各國ノ法律ハ皆發明者ニ永久完全ナル所有權ヲ與フルコト無シ何トナレ  
ハ發明者ヲシテ其發明品ニ付キ永久完全ナル所有權ヲ得セシムルトキハ發明  
ノ利益ハ全ク發明者一人ノ壟斷スル所ト爲リ社會ノ利益ヲ害シ其進歩ヲ妨ク  
ルコトナルヘケレハナリ故ニ各國ノ立法者ハ皆發明特許ニ年限ヲ定メ其年  
限中ハ發明者ニ專用ノ權ヲ與ヘ以テ發明者カ其發明ノ爲メニ費シタル時日ト

發明特許  
ノ制ヲ設  
ケサル國

資本トヲ回復スルノ途ヲ得セシムルノ主義ヲ執レリ而シテ其年限ニハ長短ノ  
差アリテ其長キハ發明者ノ利益ヲ保護スルニ厚クシテ社會ノ迷惑ト爲リ其短  
キハ發明者ヲシテ満足セシメサルモ社會之ヲ悅フノ結果ヲ生ス可シ今其専用  
（即チ特許）ノ年限ニ付キ例ヲ舉クレハ其最モ短キハ北米合衆國ニシテ五ヶ年ヲ以  
テ期限トシ其最モ長キハ白耳義國ニシテ二十五ヶ年間トス而シテ我國ハ其長  
短ヲ折衷シテ十五ヶ年ト爲セリ斯ノ如ク年限ニハ長短ノ差アルモ其主義ニ至  
テハ即チ異同アルコト無シ  
然ルニ全ク發明特許ノ制ヲ設ケサル國有リ和蘭希臘及ヒ土耳其等ノ如キ是ナ  
リ希臘土耳其ノ如キハ社會ノ進歩猶ホ未ダ幼稚タルヲ免カレサルヲ以テ古來  
發明特許ノ制無キモ敢テ異ムニ足ラスト雖トモ然レトモ和蘭ニ於テ此制ナキ  
ニ至テハ奇ト云ハサル可カラズ蓋シ和蘭ニ於テハ全ク其制無カリシニ非ス既  
ニ千八百十七年ニ特許條例ヲ制定シタリシヲ千八百六十九年ニ至リテ之ヲ廢  
シ其後外國人ノ爲メニモ又內國人ノ爲メニモ何等ノ法律ヲモ設ケス此奇異ナ  
ル現象ヲ呈シタルハ必スヤ情實ノ存スルモノ有ラン思フニ和蘭ハ昔時ニ在テ





特許ノ方  
法ニ付キ  
テノ異同  
單純ノ騰  
録主義

ハ屈指ノ繁盛ナル國ニシテ學者實業者相踵テ輩出シ小國ナカラモ強盛ヲ以テ  
聞ヘタリシカ爾後國運萎靡シテ振ハス二十年以前ニ至リテハ既ニ新發明ノ如  
キハ殆ビト皆無ト爲リ唯他國ノ發明品ヲ摸擬スルニ過キサリキ是ヲ以テ特許  
條例ノ如キ亦寧ロ無キニ如カズトシテ之ヲ廢止スルニ至リシモノナラン歟  
發明特許ニ付キテハ各國其年限ヲ異ニスルノミナラス又其特許ヲ與フル方法  
ニ付キ異同無シトセス經濟學者ハ其方法ニ命名シテ單純ノ騰録主義ト云ヒ檢  
査主義ト云ヒ又廣告主義ト云ヘリ  
所謂單純ノ騰録主義トハ政府カ新發明ヲ爲シタリト稱シ手續ヲ履ミテ特許ヲ  
出願スル者アレハ則チ之ヲ騰録シ同時ニ特許狀ヲ附與スルモノヲ云ヒ政府ハ  
其發明品ニ付キテ檢査ヲ行ハス又既ニ同一ノ發明有ルヤ否ヤヲ調査スルコト  
無ク發明者ヲ保護スルニ十分ナラサルモノナリ故ニ發明者自ラ注意シテ世間  
ニ同一ノ物ヲ發賣シ又ハ製造スル者無キヤ否ヤヲ搜索シテ出訴セサル可カラ  
ス裁判所ハ此出訴アルヲ俟テ其物ノ異同ヲ審理シ同一ノ物ナレハ特許ヲ受ケ  
タル時日ノ前後ニ依リ其前ナルヲ有權者トシ後ナルヲ僞造者トシテ裁判ス之

檢査主義

廣告主義

ヲ要スルニ法律ハ制裁ヲ設ケサルニ非スト雖トモ政府ハ放任主義ヲ執リテ其  
保護ヲ厚フセサルモノ之ヲ騰録主義トス此主義ヲ執レル國少シトセス即チ佛  
蘭西埃地利白耳義西班牙露西亞及ヒ葡萄牙等是ナリ  
檢査主義ハ騰録主義ニ比スレハ良親切ナリトス即チ特許ノ出願アレハ一々之  
ヲ檢査シ同一ノ發明ニ付キ既ニ他人カ特許ヲ得タル者無キヤ否ヤヲ調ヘ其新  
發明タルヲ確認シタル上特許ヲ與ヘ同一ノ物ナルトキハ之ヲ特許セサルモノ  
即チ是ナリ獨逸及ヒ北米合衆國ノ如キハ此主義ヲ執レリ  
廣告主義ハ最モ保護ノ厚キモノニシテ英國及ヒ英領諸殖民地ニ行ハル、制度  
トス即チ政府ハ其特許ノ出願アルニ當リテ之ヲ檢査スルノミナラス其發明ノ  
種類方法及ヒ其特許ヲ得タル人ノ姓名等ヲ一々廣告スルモノ是ナリ  
我邦ノ特許條例ハ最モ細密ニシテ又此三主義ヲ彼此折衷シ最モ保護ノ周到ナ  
ルモノトス  
以上述ヘタル如ク各國ノ法律ハ發明特許ニ付キ多少ノ異同アリト雖トモ其他  
ハ大同小異ニシテ其特許ヲ出願スル者ハ雛形或ハ明細書ヲ出シ特許ヲ得テ而

(國際私法)

外國人ノ發明特許ニ關スル佛國法律  
千八百四十四年以前

千八百四十四年ノ改正法律

シテ後之ヲ專用スルモノトス  
以下佛國ニ於テハ外國人ノ發明特別ニ關シ如何ニ取扱フカヲ觀察セン  
佛國ニ於テハ千八百四十四年ヲ以テ特許ニ關スル法律ヲ改正シタルカ其以前ハ特別條例無キニ非サリシモ極メテ粗雜ナルモノニシテ殊ニ外國人ノ發明特許ニ關シテハ最モ曖昧ナリキ從テ訴訟濫起シ裁判例亦區々トシテ一定セス然レトモ當時既ニ法律ヲ以テ禁セサル限リハ外國人ト雖トモ亦私權ヲ享有ストノ原則此原則ハ既ニ外國人私權論ニ於テ詳説シタリハ一般ニ認メラレタルヲ以テ外國人ト雖トモ亦發明特許ノ權ヲ得又其特許ニ關スル訴訟モ裁判所ニ受理セラレタル例少ナシトセス唯明文無カリシヲ以テ裁判例ノ書一ナルヲ得サリシノミ然ルニ千八百四十四年ノ改正法律ハ外國人ノ發明特許ニ關スル明細ノ規則ヲ定メ併セテ外國人ノ發明特許ニ係ル規定ヲモ爲セリ其第二十七條ニ曰ク「外國人ハ佛國ニ於テ發明特許ヲ受クルコトヲ得」ト此法律ハ實ニ外國人ニ取テハ最モ重要ナル關係ヲ有スルモノタリ余ハ今此法律全体ニ付テ説明セス蓋シ其規定ハ各國ノ條例ト大同小異ナリトス而シテ佛國カ斯ノ如ク法律上外

發明特許ニ關スル内外人ノ差異  
其一

其二

國人ノ發明特許ニ關スル權利ヲ認メ國際條約ノ有無ヲ問ハス之ヲ内國人ト均シク保護スルニ至リシハ實ニ國際ノ一美事ニシテ當時他ノ各國ニ於テハ未ダ斯ノ如キ法律ヲ制定セタルモノハ非サリシナリ  
然ラハ佛國ニ於テハ發明特許ニ關シ全ク内外國人ノ別ヲ設ケサルカ曰ク否ラス尙ホ外國人ニ對シ二三ノ制限セルモノ有リテ存ス  
其一 該法律第四十七條ニ曰ク「外國人カ佛國ニ在テ偽造ト認ムル物品ヲ差押ヘントスルハ豫メ保證金ヲ差出スコトヲ要ス」ト此保證金豫納ノ制ハ特リ外國人ニ係ルモノニシテ民法ニモ亦之ニ類似セル規定アリ即チ其第十六條ニ於テ外國人カ佛國ニ於テ原告ト爲リ起訴シタルトキハ其訴訟費用ヲ辨償スル爲メ保證金ヲ豫納スルヲ要スト爲シタルト其精神ヲ同フシ外國人カ濫リニ佛國人ニ對シテ訴ヲ起シ若シ敗訴スルトキハ佛國ニ財產ヲ殘サス又其費用ヲ辨償スルコト無クシテ逃亡スルヲ以テ此制限ヲ設ケタルモノニシテ敢テ苛酷ノ法ト謂フヲ得サルナリ

(國際私法)

其二 該法律第二十九條ニ曰ク「外國ニ於テ既ニ發明特許ヲ得タル者ハ更ニ佛

國ニ於テ特許ヲ受クルコトヲ得但佛國特許ノ年數ハ外國ニテ得タル年數ヲ超過スルコトヲ得スト是レ亦佛人ト相同シカラサル點ニシテ此點ニ付テハ佛國ノ學者中ニモ大ニ批評ヲ下ス者アリ今簡短ニ其批評ヲ述ヘン曰ク立法者ノ當時ノ意ハ蓋シ第二十九條ノ規定ヲ以テ主トシテ外國人ノ發明特許ニ適用スルニ在リシナリ又之ヲ外國人ニ適用スルハ敢テ不當ナルニアラサルモ該法文ノ意味ヨリシテ見レハ佛國人ノ外國ニ於テ特許ヲ受ケ後更ニ本國ノ特許ヲ受クル場合ニモ適用シ得可シカヽル場合ハ實際甚タ多カラサルモ又或ハ之ナシトセス然ルトキニ仍ホ本條ノ規定ヲ適用ス可シトセハ頗ル不公平ナル結果ヲ生スルコトアリ然ルニ之ヲ外國人ノミニ適用スルハ一應道理ノ存スルモノアリ何トナレハ本國ニ於テ得タル特許ノ年限ノ既ニ盡キ又將ニ盡キントスルニ當リ佛國ニ持來ルニ於テハ更ニ佛國規定ノ特許ヲ與フルトセハ是レ餘計ナル保護ニ屬スレハナリ然レトモ此規定ヲ外國人ノミニ適用スルトシテモ仍ホ不完全ナル點アルヲ免レス例ヘハ一人ニシテ既ニ二三ヶ國ニ於テ特許ヲ受ケ更ニ佛國ニ來リテ特許ヲ受ケントスル者有リトセハ斯ル場合ニ於テハ何レノ國ノ年限

其三

ヲ基トシテ特許ヲ與フ可キカ毫モ其依ル所ヲ示サス云々ト到底此規定ノ精神ハ可ナルモ其法文ノ不備ト曖昧ナル點ハ蔽フベカラサルナリ而シテ他ノ各國法律ハ明カニ此ノ如キ場合ニ於ケル處置ヲ規定セリ即チ白耳義及ヒ伊太利千八百六十年ノ法律ニ依レハ内外ノ法律ヲ比較シテ最モ長キ年限ニ從ヒ特許權ヲ與ヘ合衆國千八百七十年ニ於テハ内外ノ法律ヲ比較シテ最モ短キ年限間特許スルコト、爲ス加那太及ヒ巴西モ亦同シ西班牙ニ於テハ外國ノ特許年限ニ拘ハラズ內國ニ於テ附與ス可キ年限間外國人ニ特許ヲ與フルコト、規定セリ此西班牙ノ内外年數兩立說ハ近來學者ノ最モ是認シ希望スル所ニシテ英國ニ於テハ千八百八十三年ニ法律ヲ改正シ爾後此兩立主義ヲ執ルコト、爲レリ此等ハ經濟學者ノ論議スル所ニシテ其可否ハ茲ニ之ヲ論セス

其三 該法律第三十二條ニ曰ク「外國人佛國ニ於テ特許ヲ受ケタルトキハ二個年內ニ之ヲ利用（即チ發賣）ス可シ若シ此期限内ニ利用セザルトキハ特許ハ無効ニ歸スト此制限ハ獨逸伊太利西班牙及ヒ加那太等ノ法律ニ於テモ認ムル所ニシテ亦外國人ニ限リ之ヲ適用シ內國人ニハ適用ス可カラサル制限トス此制限

(國際私法)

ヲ設ケタル所以ハ外國人カ特許ヲ受ケタルニモ拘ハラズ長ク之ヲ發賣セサル  
トキハ他人ノ自由競争ヲ妨グルコト甚タシキ結果ヲ生スレハナリ  
斯ノ如ク佛國ハ五十年前以前ニ於テ既ニ萬國ニ率先シテ外國人ノ發明特許ヲ保  
護スルノ法律ヲ制定シタルモノナルカ其大體ノ主義ニ於テハ大ニ稱賛ス可キ  
モノタリシモ其詳細ノ條目ニ至テハ仍ホ經濟學者ノ批難ヲ免カレサリキ然レ  
トモ今日ニ於テハ既ニ然ラス彼ノ文章權美術權ノ保護ニ付キ萬國ノ聯合有リ  
シカ如ク工業權ニ關シテモ亦佛國人ノ創意ニ出テ數回ノ私會ヲ開キテ遂ニ聯  
合條約成ルニ至リ從テ內國法ニ於テモ發明特許ニ關シ圓滿ナル保護ヲ與フル  
ニ至レリ此工業聯合條約ニ在テハ後ニ説明ス可シ

以上ニテ發明特許ノ事ヲ説了シタリ

八百六十五 (第十三回)

摸樣雜形

乙 摸樣雜形

工業ノ摸樣雜形ニ付キテハ本邦ニ於テハ意匠條例中ニ規定セリ

摸樣即チ佛語ノ「デザイン」トハ主トシテ織物紙地等ニ彩色又ハ無彩色ノ浮摸樣

摸樣雜形  
ニ于スル  
問題

等種々ノ形狀ヲ描ケルモノヲ云フ例ヘハ帶地服地其他ノ織物又ハ襪壁紙等ノ  
摸樣及ヒ陶磁器等ノ畫ノ如キ是ナリ雜形即チ佛語ノ「モデル」トハ摸樣ノ一種ニ  
過キサレトモ彼ノ平面上ニ摸キタルモノヲ云フニアラスシテ凹凸高低アルモ  
ノ例ヘハ鑄物彫刻物等ノ如ク彫摸樣アル器物ヲ云フ  
此等ノ摸樣雜形ニ付テハ本邦ニ意匠條例ヲ以テ保護セルカ如ク歐米各國ニ於  
テモ皆各自法律ヲ以テ之ヲ保護セリ而シテ其目的タル畢竟他人ノ偽造ヲ防遏  
シ以テ發明者ノ專有權ヲ保護スルニ在リ佛國ニ於テモ之ヲ保護スルノ法律ア  
レトモ次項ニ於テ述フ可キ製造標及ヒ商標ト同一ノ法律中ニ包含セシメアル  
ヲ以テ次項ニ至リテ之ヲ併セ説明ス可シ

茲ニ少シク困難ナル一問題アリ他ナシ工業品タル摸樣雜形ト美術品トヲ鑑別  
スルニ何ヲ以テ標準トス可キカノ事是ナリ美術品ニ付テハ既ニ詳説シタルカ  
如ク美術權トシテ之ヲ保護スルヲ以テ其保護ハ稍厚シト雖トモ摸樣雜形ハモ  
ト賣買ノ目的ヲ以テ意匠ヲ擬シ一種ノ新形ヲ發明シ之ヲ賣弘メテ商利ヲ收ム  
ルニ在リ故ニ美術品ナルモノト其趣ヲ異ニス例ヘハ今愛ニ一畫工カ摸樣ノ新

(國際私法)

商標及製造標

製造標及我邦ニ付以テ規定ナキ

案ヲ作り又ハ彫刻師カ或ル器物ヲ彫刻シタリトセハ此等ノ作物ハ美術品ナルヤ將テ模様雛形トシテ工業品中ニ入ル可キヤ之ヲ鑑別ス可キ標準ハ唯其之ヲ製作シタル當初ノ目的ヲ視ルノ外ナカル可シ而シテ此目的ノ何レニ在リシヤハ一ニ裁判官ノ認定ニ放任セサルヲ得サルナリ

丙一商標及ヒ製造標ニ關シテハ工業品中ニ入ル可キヤ之ヲ鑑別ス可キ標準ハ唯其之ヲ製作シタル當初ノ目的ヲ視ルノ外ナカル可シ而シテ此目的ノ何レニ在リシヤハ一ニ裁判官ノ認定ニ放任セサルヲ得サルナリ

商標トハ何ツヤ本邦ノ商標條例第一條ニ之カ義解ヲ示セリ曰ク「自己ノ商品ヲ表スル爲メ特別著明ナル圖形字跡ヲ商品ニ附スルモノナリ」ト此商標ニ付テモ亦現時各國ハ皆法律ヲ以テ之ヲ保護シ其規定モ概シテ大同小異ナリ

製造標ニ付テハ我邦未ダ法律ノ規定モナク又斯ル法律語サヘ有ルコト無シ蓋シ我邦ニ於テハ目下未ダ製造標ナルモノヲ保護スルノ必要アラサルモ知ル可カラスト雖トモ歐洲各國ニ於テハ大ニ必要アリトス例ヲ示シテ之ヲ説明センニ例ハハ西陣ノ織物師カ意匠ヲ凝シテ新規ノ織模様ヲ案出シ意匠ノ登錄ヲ受ケテ其模様専用權ヲ得テ之ヲ織出シ賣弘メヲ爲シタリトセヨ然ルトキハ他ノ織物師ハ之ト同一ノ模様ヲ織出スコトヲ得ス是レ意匠登錄ノ結果トシテ法律ノ保

歐洲ニ於テ必要ナル所以

商標製造標ニ付佛

護スル所以ナリサテ又此織物師カ其織物ヲ東京ノ呉服屋ニ卸シ之ヲ小賣セシムルニ同シ品物ニテモ大丸ノ店ニテ賣ル物ハ精良ナリ又ハ廉價ナリトテ自ラ江湖ノ信用ヲ博シ購客多キハ世間往々見ル所ナリ是ニ於テ乎大丸ハ其信用ヲ維持スル爲ニ商標ヲ作りテ之ヲ其賣品ニ貼付スルノ必要アリ是ヲ以テ法律ヲ設ケテ之ヲ保護スル如ク己ニ意匠條例ヲ以テ機業者ヲ保護シ商標條例ヲ以テ其賣捌商人ヲ保護スレハ我邦ニ於テハ更ニ製造標ナルモノヲ設ケテ之ヲ保護スルノ必要ナキモノ、如シ然レトモ歐洲ニ於テハ大ニ製造標ヲ保護スルノ必要アリ蓋シ歐洲ニ於テハ模様ノ新案ヲ發明スル者ト之ヲ製造スル者ト別人ナルコト多シ本邦ニ於テハ機業者自ラ其模様ヲ案出スルカ如ク發明ト製造トヲ兼ヌル者多キヲ以テ一個ノ意匠條例ニテ之ヲ保護スレハ足レリト雖トモ斯ノ如ク發明者ト製造者トヲ異ニスルトキハ自ラ意匠ノ權ト製造ノ權トヲ別々ニ保護スルノ必要アリ是レ製造標ナルモノ、必要ナル所以ナリ本邦ニ於テモ今後工業ノ倍々盛大トナルニ從ヒ二者自ラ別離スルニ至ルヤ必セリ

佛國ニテハ外國人ノ爲メニ商標並ニ製造標ニ付キテ如何程ノ保護ヲ與フル乎

(國際私法)

ヲ觀察スルニ千八百五十七年ノ法律及ヒ千八百七十三年ノ法律ニ據リ外國人ニシテ内國人ト同様ニ商標及ヒ製造標ニ付キ保護ヲ受ク可キ者三アリ

第一 佛國ニ於テ現ニ製造場又ハ商店ヲ有スル者

第二 其本國ト佛國トノ條約ニヨリ佛國人ノ爲メニモ同様ノ保護ヲ與フ可キ國ニ屬スル者

第三 條約ナクトモ其本國ニ於テ法律上佛國人ヲ内國人同様ニ保護スル國ニ屬スル者

右三種ノ外國人ハ佛國ニ於テ内國人同様ノ保護ヲ受クルモノナリ而シテ第一種ニ屬スル者ハ其商店又ハ製造場所在地ヲ管轄スル裁判所ノ書記局ニ登録ノ手續ヲ爲サ、ル可カラス又佛國ニ於テ製造場又ハ商店ヲ有セサル者ニシテ保護ヲ得ントスルトキハ巴里ノ商事裁判所書記局ニ登録ノ手續ヲ爲スコトヲ要ス

以上述フル所ハ前項ノ模様雜形ニ付テモ亦同シ即チ千八百七十三年ノ法律ハ模様雜形並ニ商標製造標ニ關スルコトヲ規定シタルナリ

丁 屋號

本邦ニ於テモ古來商人ハ普通姓名ノ外ニ屋號ナルモノアリテ商人ハ隨意ニ之ヲ用ユルコトヲ得敢テ其身分上ニ關係セサリキ然レトモ法律ヲ以テ之ヲ保護シ其專用權ヲ認ムルニ至リテハ最早自由ニ之ヲ附スルコトヲ得サルナリ而シテ法律ノ之ヲ保護スルハ彼ノ商標ノ專用權ヲ認ムルト同一ノ理ニ出ツルモノニシテ同様ノ商業ヲ爲ス者カ同一ノ屋號ヲ用井ルトキハ其以前ヨリ用井タル商店ノ信用ヲ害スルコト甚タシキヲ以テナリ然レトモ法律ハ一商人ノ爲メニ屋號ノ專用ヲ許ストキハ其他ノ者ハ決シテ同一ノ屋號ヲ用ユルコトヲ得セシメサルニ非ス其際其專用者ニ損害ヲ加フ可キ場合ニ限ル故ニ他ノ地方ニマテ其信用ヲ及ホスニ足ラサル商人ノ屋號ノ專用權ハ從テ其効力ハ其一地方外ニ及ホスヲ得サルヲ以テ原則トス但シ其果シテ專用權ヲ害シタルヤ否ヤハ一ニ裁判官ノ裁定スル所ナリトス

(國際私法)

者ヲ罰スルコト、セリ其刑ハ三ヶ月以上一ヶ年以下ノ禁錮ニ五十フランク以上ノ罰金ヲ附加スルモノトス本邦ニ於テモ從來屋號ニ關シテ何等ノ規定モ有ラサリシカ商法中ニ於テ始メテ之ヲ規定セリ

佛國ニ於ケル屋號保護程度

佛國法律ハ屋號ニ關シ如何ニ外國人ヲ保護スルカト云フニ是レ千八百七十三年ノ法律以前ニアリテハ全ク裁判官ニ一任セリ從テ裁判例モ區々トシテ一定ナラサリシナリ然ルニ該法律ニ依ルニ商標製造標等ト同シク佛國トノ條約ニ依リ其本國ニ於テ佛國人ヲ內國人同様ニ保護セルトキ又ハ條約ナク、トモ其本國ノ法律ヲ以テ佛國人ヲ保護セルトキニ限り其外國人ニ佛國人同様ノ保護ヲ與フルコト、爲セリ  
余ハ此ニ第二類ノ工業權及ヒ商業權ノ事ヲ講了スルニ臨ミ工業萬國聯合ノ事ニ付キテ少シク論述ス可シ  
上來講述シタル如ク發明特許模樣、雜形、商標、製造標、屋號等ノ工業及ヒ商業ニ關シテハ各國皆各保護法律アリ又國際條約ヲ以テ彼我ノ關係ヲ規定スルモノモ亦尠カラズ然リト雖トモ其條約又ハ法律ノ解釋ニ至リテハ到底一ニ歸スルコト

工業萬國聯合

能ハス且ツ其保護モ亦各國自ラ厚薄ノ別ナキ能ハス故ニ之ヲ完全ニ保護セントセハ各國ノ間ニ一定ノ取扱ヲ定ム可キ方法ヲ講スルノ外ナカル可シトノ説起リテ二十年前ヨリ歐米ノ實業社會又ハ經濟家一般ノ希望ト爲リタリシカ此希望ヲ始テ世ニ發表シタルハ千八百七十八年ニシテ同年巴里ニ一ノ私設協會ヲ設ケ之ヲ工業所有權協會ト名ケ萬國ノ有志者之ニ會同シタリ此所有權ナル文字ハ妥當ナラスト雖トモ當時異議ナカリシナリ尋テ千八百八十年ニ至リ佛國政府ノ發議ニヨリ始メテ萬國ノ政府委員佛國ニ會同シ工業所有權保護萬國聯合條約案ヲ起草セリ然レトモ未タ之ヲ討議スルニ及ハスシテ解散シ後二年ヲ超エテ千八百八十三年ニ至リ終ニ此條約ヲ確定シタリ當時此同盟ニ加ハリタル國及ヒ其確定後ニ更ニ同盟ニ加ハリタル國ヲ示セハ白耳義、巴、西、西班牙、佛蘭西、伊、太、利、和、蘭、葡、萄、牙、瑞、西、英、吉、利、土、耳、古、亞、米、利、加、合、衆、國、瑞、典、其、他、二、三、小、國、等ナリ

萬國聯合條約

今此萬國聯合條約ノ要項ヲ示セハ左ノ如シ  
第一 該條約ニ包含スル所ハ發明特許模樣、雜形、製造標、商標及ヒ屋號等ニシ

(國際私法)



テ此等ノ事項ニ付キテハ聯合國ノ者ハ他ノ聯合國ニ於テモ總テ内國人同  
 様ノ保護ヲ受クルコト

第二 聯合國外ノ者ト雖トモ聯合國ノ一國ニ於テ製造場若クハ商店又ハ已  
 レノ住所ヲ有スル者ハ内國人ト同様ニ保護スルコト

第三 聯合國人ハ其發明品ニ付テ一國ニ於テ特許ノ登錄ヲ爲シタルトキハ  
 其他ノ聯合國ニ於テ更ニ其手續ヲ爲スヲ要セス當然之ガ保護ヲ受クヘキ  
 コト

第四 聯合國ニ屬スル人ノ所有セル商標製造標又ハ屋號ヲ權利ナクシテ濫  
 用シタル商品ヲ聯合國ニ輸入スル者有レハ檢察官又ハ關係者ノ求ニ應シ  
 輸入國ノ政府ハ其國境ニ於テ之ヲ沒收スルコト

此聯合ハ萬國工業聯合ト稱シ其本局ヲ瑞西國都ベルヌ府ニ常設シ文章權及ヒ  
 美術權聯合ト同シ其費用ヲ聯合各國ニ於テ分擔シ事務ノ監督ハ瑞西政府之  
 ヲ爲シ定時ニ佛語ヲ以テ記シタル報告書ヲ發行シ又其聯合ニ關スル書類ヲ保  
 存ス

我  
 邦  
 カ  
 萬  
 國  
 聯  
 合  
 ニ  
 加  
 盟  
 ス  
 ル  
 利  
 害

聯合條約訂結ノ後瑞西政府ノ注意ニヨリ五六年毎ニ萬國會議ヲ開キ條約ノ改  
 正ス可キ條項有無及ヒ新加入國ノ有無等ヲ討議調査スルコト、セリ

工業聯合ニ付テハ我邦ハ未ダ曾テ會同シタルコトモアラス又條約ニモ加盟セ  
 ス故ニ或ハ外人ノ之ニ加盟スルノ利益アルヲ説キテ其加盟ヲ勸奨スルモノ無  
 キニ非ス今其得失ハ茲ニ論セサルモ唯其言ニ據リ又現況ヲ觀察スルニ歐洲ニ  
 於ケル主タル製織場ハ佛國里昂府ニシテ同府機業家ノ織出ス所ノ模様雜形ハ  
 多クハ本邦ニ摸シタルモノニシテ殊ニ婦人服地ハ皆西陣織ノ模様雜形ヲ用ユ  
 又友僱染ニ摸シタル唐縮緬ハ日本へ輸入センカ爲メニ佛國ニテ織維スルモノ  
 實ニ莫大ニシテ此等ハ皆里昂近邊ノ機業者ノ專業トスル所ナリ而シテ彼等機業  
 者ハ絶エス我京都ニテ染出ス所ノ新模様ニ注目シ一タヒ新案ヲ發明アレハ即  
 時之ヲ佛國ニ通報シテ之ヲ織ラシメ其流行ノ未タ京都ヨリ東京ニ及ハサルニ  
 早クモ横濱ニ輸入セラル、程ナリト云ヘリ又頃日歸朝シタル某書記官ノ言ニ  
 依レハ巴里ニ於テ開キタル萬國博覽會ニ西陣ヨリ洋服地ヲ出品シタルニ間モ  
 無ク里昂ニ於テ之ト同様ノ物ヲ織出シ市場ニ陳列シタリト云フ余之ヲ實地ニ

(國際私法)



就キテ觀ルニ夜會ニ着用スル所ノ婦人服及ヒ窓掛等ハ悉ク日本ノ織物ヲ摸織シタルモノナラサル無ク又漆器ノ如キモ獅逸又ハ伊太利等ニ於テ摸造シ之ヲ日本漆器ト稱シテ廉價ニ販賣セリ斯ル摸造品中ニハ我邦ニ於テ專賣又ハ意匠ノ特許ヲ得タル物モアラシ故ニ聯合條約ニ加盟スルトキハ此等ノ偽造摸擬ハ防遏スルコトヲ得可シト雖トモ其利害得失ヲ詳密ニ調査スルニ非サレハ未ダ速カニ之ニ加盟スルコトヲ得ス然レトモ彼ノ文章權又ハ美術權ニ比スレハ工業權ハ大ニ利害ノ關係ヲ有スルモノ有ルヲ知ル可シ此等ノ事ハ專門經濟家ノ宜シク攻究スヘキ所ナリトス

(第十四回)

第三節 外國人特待論

題シテ外國人特待論ト云フモ内國人ヨリ一層優等ナル待遇ヲ受クルノ謂ヒニ非ス唯通常ノ外國人ノ外ニ別ニ特待ヲ受クル所ノ外國人アルコトヲ論スルニ在ルノミ前二節ニ於テ外國人ノ公權及ヒ私權ニ關シテ論述シタル所ノモノハ

外國人特待論

外國人カ特待ヲ受クヘキ原因

通常一般ノ外國人カ普通ノ法律ニ依リ佛國ニ於テ生活上缺ク可カラサル權利トシテ享有スル所ノモノニ關シ特ニ其者ノ本國ト國際條約アルニ非ス又政府ノ特許アルニモ非ス故ニ稱シテ之ヲ通常ノ外國人ト云フ可シ而シテ此ニ謂フ所ノ特待ノ外國人ナルモノハ或ハ國際條約ノ訂結ニ因リ或ハ政府ヨリ特ニ住居ノ許可ヲ得タルニ因リ若クハ交際官ノ如キ國際上ノ職務ニ因リテ通常一般ノ外國人ト異ナリタル位地ヲ有スルモノヲ云フ

既ニ以上講述シタル如ク現今歐米各國ノ間ニハ通常ノ外國人ト雖モ公權又ハ私權ハ内國人ノ有スル所ト大差有ルニ非ス故ニ通常外國人ト特待外國人トノ區別ノ如キモ近來年一年ニ其必要ヲ減縮スル有様ナリ然レトモ通常外國人ト内國人トノ中間ニ在リテ特待ヲ受ク可キ一種ノ外國人有ルコトハ現時尙ホ國際法ノ認ムル所ナリトス

外國人カ特待ヲ受ク可キ原因ニ三アリ

第一 國際條約

第二 住居ノ特許

(國際私法)

第三 治外法權

以下款ヲ分テ之ヲ說述ス可シ

國際條約

第一款 國際條約

國際法上總テ外國人取扱ノ事ヲ論スルニ當リテ一種ノ熟語ヲ成セルモノ有リ  
 其一ヲ立法上相互對等主義之ヲ略シテ立法對等主義ト云ヒ他ヲ條約上相互對  
 等主義之ヲ略シテ條約對等主義ト云フ何レモ一國ニ於テ外國人ヲ取扱フニ付  
 キ法律ノ主義ヲ指シタルナリ例ヘハ或國ノ法律ニ於テ外國ノ法律カ若シ我國  
 ノ人民ヲ其内國人民ト同シク取扱フニ於テハ我國ニ於テモ亦其國人民ヲ我國  
 人民ト同シク取扱フ可シト定メタルモノアリト假定センニ是レ即チ所謂立法  
 對等主義ト云フ若シ又此ト少シク異ナリテ我國ハ外國トノ條約ニ因リ我國人  
 民ヲ其國ニ於テ其國人ト同シク取扱フニ於テハ我國ニテモ亦其國人ヲ我内國  
 人ト同シク取扱フ可シト云フカ如キハ之ヲ條約對等主義ト云フ  
 佛國法律ハ右二主義ノ内立法對等主義ヲ採用セルコト極メテ稀ニシテ唯工業

佛國法律ニ採用セ  
 ル國際條約ニ關スル主義

佛國ニ於テ立法對等主義ヲ採用セザリシ所由

權商業權保護ノ法律ニ於テハ必スシモ條約對等主義ヲ以テセス例外トシテ立  
 法對等ノ主義ヲモ併セ用弁タルコトハ既ニ說明シタル所ノ如シ其他ハ概シテ  
 立法對等ノ主義ヲ採用スルコト無シ故ニ外國人カ佛國ニ來リテ佛人同様ノ權  
 利ヲ行ハンニハ唯其自己ノ本國ニ於テ佛國人ヲ内國人ト同様ニ取扱フト云フ  
 ヲ以テハ未タ足レリトセス必ラス國際條約ヲ以テ其對等タルコトヲ認メタル  
 モノアルヲ要ス是レ即チ所謂條約對等主義ヲ取リタルナリ  
 佛國ニ於テ立法對等主義ヲ採用セザリシハ其不權衡ヲ生センコトヲ恐ルレハ  
 ナリ何トナレハ外國人ノ本國ト云フモ種々雜多ノ國アリテ佛國ノ如ク開化セ  
 ル國ノミナラス或ハ野蠻未開ノ國モ有ル可シ斯ル國ニ於テハ外國人ハ勿論其  
 内國人ヲ過スルサヘ非道苛酷ナルモノナシトセス然ルニ佛國人カ斯ノ如キ未  
 開國ニ至リテ其内國人ト同様ナル取扱ヲ受クルモ満足スルニ足ラス反之彼國  
 人カ之ヲ理由トシテ佛國ニ於テ佛國人同様ノ取扱ヲ受クルモノトセハ其不權  
 衡タル甚タシキヲ以テナリ是ヲ以テ彼我ノ狀態ヲ稽查シ對等ノ取扱ヲ爲スモ  
 得失不權衡ナキヤ否ヤヲ詳カニシ而シテ後條約ヲ締結スルナリ然レトモ此理

(國際私法)

現今ニ於ケル外國人取扱上ノ主義

由タル現時ニ在テハ既ニ陳套ニ屬シ其價值ナキノミナラス國際法ノ新主義ニ背クヲ以テ最早何人モ此說ヲ唱フル者ナシト雖トモ固ト是レ佛民法制定ノ當時ニ在テハ歐洲各國ニ行ハレタル主義タリシナリ(當時尙ホ一層甚ダシキモノモ之有リキ)故ニ佛民法第十一條ニハ此主義ニ從ヒ外國人カ佛國ニ於テ私權ヲ享有スルニハ其本國ニ於テモ佛人ニ同様ノ取扱ヲ爲スヘキ條約ナカル可カラサルコトヲ規定セリ此事ニ付キテハ既ニ本編第二節ノ總論ニ於テ詳論シタレハ今復タ贅セス

斯ノ如ク國際法上外國人取扱ニ關シテ二個ノ主義アリト雖トモ國際法ノ日ニ月ニ進歩スル今日ニ在テハ兩主義ノ何レヲモ採用セス外國ニ於テ我國人ヲ如何様ニ取扱フカハ外國ノ法制ナルヲ以テ敢テ問フヲ要セス總テ我國ニ來レル外國人ハ我内國人ト同様ニ保護スルニ在リ是レ現時最モ進歩セル新說ニシテ又最モ公明正大ナル主義ナリ而シテ此主義ハ現時各國學者ノ唱道スル所ナリト雖トモ之ヲ始テ法律ニ明記シタルハ伊太利民法ニシテ彼ノ有名ナルマンチニル氏ノ說ニ從ヒタルナリ

今日ニ於テモ尙ホ條約ノ理由ナル理

我國民法中外國人ニ關スル條文ハ伊太利民法ニ倣フモノ鮮ナカラス故ニ其規定ハ能ク新主義ニ合ヒ立法上又ハ條約上ノ對等主義ニ拘泥セス偏ニ國際法ノ法理ニ基キテ制定シタリ

既ニ屢論述シタルカ如ク佛國ニ於テ通常外國人ノ享有セサル權利ハ極メテ少クシテ殆ント其内國人ト同一ナリサレハ特ニ條約ヲ以テ其平等ノ取扱ヲ爲ス可キコトヲ約スルノ必要アラサルモノ、如シト雖トモ實際大ニ然ラサルアリテ此條約ヲ訂結セル國少ナカラス即チ或ハ修交條約ト云ヒ或ハ航海條約ト云ヒ貿易條約移住條約領事條約領事ノ權限ヲ定ムルモノ等ト名ケ種々ノ名義ヲ以テ佛國ト他國トノ間ニ結ヒタル條約中ニ於テ外國人カ佛國ニ於テ有スル所ノ往來ノ自由奉教ノ自由商業ヲ營ムノ權財產所有權及ヒ兵役免除等ノ條目ハ殆ント定文句トモ爲レルモノニシテ試ミニ此等ノ條目ヲ記載セル條約ヲ締結セル國枚舉スルニ千八百三十年乃至千八百八十六年ノ間ニテ三十八ヶ國ノ多キニ及ベリ

而シテ此等ノ條約ニ記載セル條目中私權ノ事ニ關シテハ特ニ條約ヲ以テ規定

(國際私法)

スルノ必要アラサルモ、如シ何トナレハ此ノ如キ私權ハ特ニ條約ヲ以テ定ムルコト無クトモ外國人ハ佛國ニ於テ内國人ト同様ニ享有スルモノタルコトハ現時ニ在テハ何人モ爭フ者非サレハナリ然ルニ各國トノ條約中ニ皆之ヲ揭ケサルモノ無キハ實際決シテ無用ナラス蓋シ條約ヲ以テ對等タルコトヲ確認スルコト無ク内國法律ノ規定ノミヲ以テ外國人ヲ保護ス可キモノトセハ若シ一朝輿論ノ劇變ニ値ヒ急速ノ間ニ此等ノ法律ヲ變改スルコト有ラハ從來法律保護ニ安シタル外國人ハマタ奈何トモスルニ由ナカル可シ然レトモ條約ヲ以テ之ヲ確認スルトキハ輿論法律ノ如何ニ變動スルモ國際上其對等ノ權利ヲ保護セラル可シ是ヲ以テ各國ハ確カナルカ上ニモ確カナラシメンカ爲メニ條約ヲ以テ之ヲ規定セルナリ又佛國人ノ方ヨリ視ルモ之ヲ條約スルノ利益ナルコト有リ何トナレハ多クノ外國中ニハ或ハ佛國ノ如ク外國人ヲ待ツノ寛大ナラサルモノ有ラン斯ル國ノ者ト雖トモ佛國ニ來ルトキハ條約ノ有無ニ拘ハラズ之ヲ保護ス可キモノナレトモ之ヲ特ニ條約ヲ以テ規定スルトキハ其本國ニ於テ若シ佛國人ヲ酷待セハ佛國ニ於テモ我國人ヲ酷待スルニ至ランモ知ル可カラズ

公權上ノ特待

トノ掛念ヨリ自ラ佛國人ヲ寬待スルニ至ル可ケレハナリ蓋シ此説ヲ採ルニ萬國交通ノ實際ヲ看破シタルモノト謂ハサルヲ得ス加之條約ヲ以テ規定スルトキハ縱令僅少ナリトスルモ無條約國ノ外國人ニ比スレハ幾分カ寬待ヲ受ク可キモノ有リ其差異ノ點ヲ觀察スルハ即チ本節ノ目的トスル所ナリ特待ヲ受クル外國人ハ或ハ公權上ニ特待ヲ受ケ或ハ私權上ニ特待ヲ受クルモノアリ故ニ本款ハ別テ二ト爲シ先ツ公權上ノ特待ヲ論ス可シ

第一 公權上ノ特待

凡ソ公權ナルモノニ自然法の公權ト政權即チ公民權トノ二種有ルコトハ既ニ第一節ニ於テ述ヘタリ所謂政權トハ一國ノ政務ニ干與スルノ權利ナルヲ以テ容易ニ外國人ニ與フ可キモノニ非ス必スヤ其國ノ公民タル資格ヲ有スル者ナラサルヲ得ス而シテ此資格ハ如何ナル條約ニ於テモ決シテ外國人ニ附與ス可キモノニ非ナルナリ故ニ外國人ノ附與セラル可キ公權ハ單ニ自然法の公權ニ止マルモノタルコトヲ知ラサル可カラス而シテ自然法の公權ナルモノニモ種々アリテ外國人ハ特待ヲ受クルモ其總テノモノヲ享有スルモノニ非スシテ仍

自然法的  
公權上の  
制限

佛國ト南  
米諸國ト並  
ニ英獨ト並

ホ多少ノ制限ナキコトヲ得ス  
其制限ノ最モ著シキモノヲ往來ノ自由權ニ關スルモノトス即チ外國人追放權  
ト稱スルモノ是ナリ此事ニ付テハ既ニ第一節ニ於テ一言シタルコト有リカ  
要スルニ獨立國ノ主權ヲ以テ其國ノ治安ヲ妨害スル者ト認ムルトキハ何時ニ  
テモ隨意ニ之ヲ其國外ニ追放スルノ權ヲ云フ此事ニ關シテ佛國ト外國トノ間  
ニ條約ヲ締結セルモノ少ナカラス其條約ハ追放權ヲ放棄スルニ非スシテ畢竟  
條約國人ノ爲メニハ幾分カ追放權ノ執行方法ヲ寬ニスルニ在リ例ヘハ條約國  
ノ人民ハ其所在國ニ於テ公衆ノ安寧ヲ妨害スル程ノ重大ナル理由有ルニ非サ  
レハ外國又ハ一地方ヨリ他地方ニ追放セラルヘコト無キカ如キ又其理由書及  
ヒ證據書類ヲ豫メ其國駐劄ノ公使若クハ在留ノ領事ニ回送スル事ヲ要シ又其  
書類回送ト追放執行トノ間ニハ相當ノ期間ヲ與ヘ以テ其辯護書ヲ呈出スルノ  
猶豫ヲ得セシムルカ如キ是ナリ斯ル箇條ヲ以テ佛國トノ間ニ條約ヲ訂結セル  
國十ヶ國アリ多クハ外國人ノ出入ヲ嚴重ニシ壓制ヲ加フル南米諸國トノ間ニ  
アリトス又歐洲列國中英獨ト二ヶ國トハ直接ノ條約アラサルモ最惠國條款ニ

ノ條約  
露國トノ  
條約

瑞西トノ  
條約

因リ右ノ條約ヲ利用スルコトノ爲セリ  
又佛國ト露國トノ間ニ結ヒタル千八百六十四年ノ貿易條約ニ依レハ曰ク「兩國  
ノ人民ハ其身軀及ヒ財產ニ付キ内國人同様ノ保護ヲ受ク」トアリテ或ハ双方ト  
モ全ク追放權ヲ放棄セルモノナルヤ否ヤニ付キ議論ナキニ非ザレトモ同條約  
末項ニ「兩國現行警察規則ヲ遵奉ス可シ」トノ明文アルヲ以テ視レハ全ク追放權  
ヲ放棄シタルニアラスシテ此明文ニ循ヒ治安ヲ妨害セル外國人ヲ追放スルノ  
權アルハ明カナリトス  
千八百八十二年佛國ト瑞西國トノ間ニ結ヒタル移住民條約中ニ言ヘルアリ曰  
ク「兩國ノ移住民ハ(中畧若シ法律規則ニ背キ國外ニ追放セラルヘトキハ本國政  
府之ヲ受取ル可シ)此約款ハ斬新ナル考ニ出テ他ニ其類例ヲ見ス之ヲ國外ニ  
放逐シテ顧ミサルニ比スレハ大ニ寬厚ナルヲ知ル可シ蓋シ從來ノ實例ニ依ル  
ニ一國ニ於テ外國人ヲ追放シ國外ニ退去セシムレハ其者ハ本國ニ歸參スルノ  
外ナカル可シ然ルニ其本國ニ於テモ法律ニ違背スルノ廉アリトテ拒ミテ入ラ  
シメサルヨリ己ムヲ得ステ他國ニ流寓シテ艱苦ヲ嘗ムル者少シトセス是ヲ

以テ該條約ハ斯ル場合ヲ豫想シ其本國政府ハ必ス一タヒ之ヲ受取ラサルヲ得サルコト、爲シタルナリ、  
以上ヲ以テ條約ニ依リ外國人カ公權ニ關シテ通常ノ外國人ヨリ幾分カ寬待セラル、コト有ルハ已ニ諸君ノ了知セル所ナリ又尙ホ次回ニ於テ其私權ニ關スル特待ヲ講述ス可シ

(第十五回)

私權上ノ特待

第二 私權上ノ特待

佛國法律及ヒ判決例ニ依レハ通常外國人ノ有ス可カラサル私權少カラス就中判決例ニ於テ殊ニ其最モ多キヲ見ル勿論右等ノ判決例ニハ適正ナラサル者少ナカラス爲メニ學者ノ痛ク攻撃スル所ナリト雖トモ其可否ハ措テ問ハス兎ニ角外國人ノ私權ヲ認メサル者多シ例ヘハ婦カ夫ノ不動産上ニ有スル法律上ノ抵當又ハ幼者カ後見人ノ不動産上ニ有スル法律上ノ抵當權ニ付キ法律ハ外國人ニモ附與ス可キヤ否ヤヲ明記セス近來ノ學說ニテハ條約ノ有無ヲ問ハス外國人ニモ附與ス可シトノ說アルコトハ第八回ノ講義ニ於テ述ヘ置キタリ然レト

モ判決例ニテハ之ヲ附與セサルヲ常トシ若シ條約ヲ以テ特ニ之ヲ明約スルトキハ内國人ト同シテ取扱フ可キコト、ナセリ故ニ私權ノ事ニ關シテ特ニ條約ヲ結フ國多シ其重ナル國ハ佛國トノ關係最モ頻繁ナル瑞西伊太利西班牙等ニシテ其他數ヶ國アリ

又相續權ノ事ニ付キテ佛國ト條約ヲ結ヒタル國數多アリ蓋シ外國人ノ相續權ニ付テハ民法第七百二十九條ニ規定セル所ナルカ該規定ニ依レハ外國人ハ佛國ニ於テ殆ント相續權ヲ有セサルモノ、如シ此規定ハ千八百十九年ノ法律ヲ以テ改正シタル以來幾分カ之ヲ寬ナラシメタルモ仍ホ内國人ト同様ニ取扱スハ故ニ特別ノ條約無クシテハ其權利ヲ確カムルニ足ラサルヲ以テナリ其法律ノ如何ニ付テハ今此ニ之ヲ說カス他日説明ス可キノ機會アル可シ  
右ノ外條約ヲ以テ私權ノ享有ヲ確ムル者ハ前節ニ於テ説明セル文章權美術權商工業ニ關スル權利ノ如キモノ及ヒ訴訟手續上ニ於テ内國人同様ノ取扱ヲ受クルモノ是レナリトス但シ此訴訟手續ノ事ニ付テモ亦茲ニ之ヲ説明セス第三編ニ至リテ詳論ス可シ



住所ノ特許

第二款 住所ノ特許

特許外國人ノ享有スル民權

第一問

住所ノ特許ニ付テハ佛國民法第十三條ニ規定セリ該條ニ曰ク「國主ノ特許ヲ得テ佛國內ニ住所ヲ定ムル外國人ハ佛國ニ在ル間ハ總テノ民權ヲ享有ス」ト此規定ニヨリ住所ノ特許ヲ得タル外國人ハ二個ノ利益ヲ有スルモノトス即チ一ハ他日歸化ヲ爲スニ便ナルコト(歸化ノ事ニ關シテハ此ニ講說ス可キニ非スト雖トモ佛國ノ法律ニ依レハ若干年間佛國ニ居住シ且政府ノ許可ヲ得タル者ナラサル可カラス此ハ何レノ國ニ於テモ大同小異ナリ)他ハ通常ノ外國人ノ有セサル總テノ民權ヲ享有スルコト是ナリ余ハ以下專ラ第二點ニ付キ觀察セントス而シテ此事ヲ講スルニハ三個ノ問題ニ分テ論述セム

第一問題 外國人ハ民法第十三條ニ云ヘル特許ヲ受ケスシテ佛國ニ於テ住所ヲ有スルコト能ハサル乎

此問題ハ佛國學者間ニ頗ル議論ノアル所ニシテ特許ノ有無ハ別トシテ外國人カ佛國ニテ住所ヲ有スルコトヲ法律カ認ムルヤ否ヤニ依リ即チ佛國ニテハ民法

第二問

第一 國主ノ許可ヲ受クルコト

第十三條ニ規定セル如キ場合ノ外ハ外國人カ佛國ニテ住所ヲ有スルヲ得ルノ法律ナシ民法第二百二條ニハ佛人ノ住所ハ其主タル家屋ノ存スル所ナリトアルハ佛人ノ住所ノ定義ヲ示セルニ過キス之ヲ外國人ノ住所ニ適用スルコト能ハスト論スル者アリ又一説ニ抑モ外國人ト雖トモ其日常生活上ニ缺ク可カラサル權利ハ何レノ地ニ在テモ享有セサルヲ得ス故ニ久シク佛國內ニ住居シ佛國內ニ主タル家屋ヲ有スル者ハ之ヲ住所ヲ有スルモノト看做スモ何ノ不可カ是アラシ民法第二百二條ニ佛人ノ住所云々ト記スルモノハ蓋シ立法者カ主トシテ本國人ニ關シテ規定セルマデニシテ之ヲ外國人ノ住所ニ適用ス可カラサルニ非スト此後說ハ現今學者ノ多ク採用スル所ニシテ政府ノ許可ノ有無ニ拘ハラズ外國人ハ佛國內ニ住所ヲ有スルコトヲ得ルモノトス

第二問題 民法第十三條ニ依リ住所ノ許可ヲ受クルニハ如何ナル條件ヲ具フ可キ乎

此点ハ問題ト云フ程ニアラス唯其條件ヲ知ルヲ以テ足レリトス其條件ニアリ

第二 現ニ佛國ニ居住スルコト

第一ノ條件、國主ノ許可ヲ受クベキ手續ハ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ定ムル所ニシテ今其要項ヲ示サハ此許可ヲ受クルコトヲ得キ外國人ハ廿一年以上ノ者ナラサル可カラス而シテ其許可ヲ得ント欲スルトキハ司法大臣ニ對シ住所ノ特許ヲ得ヘキ願書ニ其本國ニ於ケル出產證書ノ謄本又ハ之ニ代用ス可キ書類ノ謄本ヲ添付シ且百七十五フランクノ印稅ヲ拂フ可キ旨ノ約束書ヲ添付シテ差出サ、ル可カラス斯ノ如キ手續ヲ爲セハ司法大臣ハ巴里ナレハ警視總監地方ナレハ地方長官ニ命シテ其出願者ノ身上ヲ取調ヘシム警視總監又ハ地方長官ハ當人ノ品行及ヒ生活ノ度等ヲ詳細ニ取調ヘテ之ヲ上申ス而ル後司法大臣ハ國主ニ上奏シ許可ス可キモノト認ムルトキハ勅令ヲ下シテ之ヲ許可ス而シテ此勅令ハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得可キモノトス

第二ノ條件、是ハ第十三條ノ規定スル所ニシテ唯一時通行シ又ハ寄留スルノミヲ以テ足レリトセス現實ニ佛國內ニ居住スルヲ要ス故ニ若シ佛國ヲ離レテ外國ニアル間ハ特許ノ効ヲ中絶スト知ルヘシ

第三問

特許  
公權上ノ

特許  
公權上ノ

第三問題ハ國主ノ許可ヲ得テ住居スル効力如何ニ關スル事也此問題ハ即チ通常ノ外國人ト異ナル所如何ト云フニ在リ住所ノ特許ヲ得ル外國人ハ通常ノ外國人ニ比スレハ公權上ニ於テモ私權上ニ於テモ特許ヲ受クルモノナリ之ヲ說クニハ亦公權上ノ特許ト私權上ノ特許トニ分テサル可カラズ

第一、公權上ノ特許ハ公權中ニ於テ政權ニ屬スルモノハ外國人ノ享有ス可カラサルコトハ前章ニ於テモ既ニ說キタリ故ニ縱令住所ノ特許ヲ受クルモノ仍ホ政權ヲ得可キニ非ス即チ外國人ハ佛國ニ於テ選舉權及被選舉權ヲ有セス公務ニ就キ又ハ兵役ニ服スルコトヲ許サス又代言人ト爲ルコトヲ得ス其他己レノ血族オラサル他人ノ幼者又ハ禁治產者ノ後見人ト爲ルコト、小學學務委員ニ選出スルコト、遺囑ノ證人ト爲ルコト、新聞社又ハ雜誌社ノ社長ト爲ルコト等ハ總テ外國人ノ爲シ得可カラサル所ナリ然リト雖トモ自然法の公權ニ至ラバ住所ノ特許ヲ得ル外國人ノ享有スル所幾分カ通常ノ外國人ト異ニセルモノアリ即チ佛國政府ハ此種ノ外國人ヲ隨意ニ追放スルコトヲ得ズ之ヲ追放セシトス



私權上ノ  
特待

先ツ假追放(假追放トハ特別法ヲ以テ定ム)ノ處分ヲナスヘキモノトス此處分ハ二个月ヨリ多カラサル期間佛國外ニ追放シ其往來交通ヲ禁スルヲ云フ若シ此期間ヲ以テ満足ナラスト認ムルトキハ住所ノ許可ヲ取消ス此取消ハ亦勅令ヲ以テス既ニ之ヲ取消シタルトキハ通常ノ外國人ナルヲ以テ隨意ニ追放ヲ執行スルコトヲ得可キナリ

又教育令ニ依レハ私立小學及ヒ中學ヲ開設シ之カ校長ト爲ルコトハ住所ノ特許ヲ得タル外國人ニ限リテ之ヲ許可スルコト、爲セリ是亦一ノ特待トス

外國人ハ通常兵役ニ就クノ權ヲ有セスト雖トモ住所ノ特許ヲ得タル外國人ハ義勇兵ニ編入セラル、コトヲ得義勇兵トハ通常ノ兵役ト異ナリテ一朝騷亂事變アルニ當リ其地方ノ者カ政府ノ許可ヲ得テ自由團體ヲ編制シ兵事ニ關係スルモノヲ云フ此事ハ千八百五十二年ノ法律ニ於テ規定ス此法今尙ホ存ス

第二ノ私權上ノ特待ハ既ニ一言シタル如ク佛國ノ法律及ヒ判決例ニ於テ外國人ノ享有ス可カラストセル私權少ナカラスト雖トモ住所ノ許可ヲ得タル外國人ハ通常ノ外國人ト異ナリテ其享有ス可カラサル私權ト雖トモ之ヲ享有スル

住所ノ許  
可ハ既住  
ニ溯ラス  
特許外人  
ノ身分及  
能力  
一問題

コトヲ得可シ故ニ婦ガ夫ノ不動産上ニ又ハ幼者ガ後見人ノ不動産上ニ有スル法律上ノ抵當權又親ノ子ニ對スル懲戒權人ノ養子ト爲リ又ハ養子ヲ爲スノ權等ハ通常ノ外國人ノ有ス可カラサル權利ニシテ特リ住所ノ許可ヲ得タル外人ハ之ヲ有スルコトヲ得其他訴訟手續上ニ於テモ佛人同様ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

以上ニテ住所ノ許可ヲ得タル外國人特待ノ事ヲ説了リタレトモ尙ホ一ノ注意ヲ要スルモノアリ即チ住所ノ許可ハ既往ニ溯及スルノ效ナキコト是ナリ是レ一般法律ノ原則トスル所ナリ

又住所ノ許可ヲ得タル外國人ハ佛國內ニ於テ總テノ私權ヲ享有スルモ其身分及ヒ能力ニ關スル事ハ必ス其本國ノ法律ニ從ハサル可カラス是レ國際法上ノ原則ナレトモ又之ニ反對スル者ナシトセス其反對説ノ事ハ此ニ詳述セス第二編ニ至リテ述ベ可シ

尙ホ一ノ問題ハ住所ノ許可ハ其許可ヲ得タル當人一身ニ限ルカ或ハ其同居ノ妻子ニ迄モ及フヘキ乎ノ事是ナリ此問題ニ付テハ妻子ニ及ハストスル説可ナ

(國際私法)

リト信ス然レトモ此ニモ亦反對説アリ今其理由トスル所ヲ觀ルニ住所ヲ許可ハ半歸化トモ云テ可キモ、ニシテ夫ヲ歸化ハ其妻子及ワテ以テ歸化法ノ原則トスド云フニ在リ

治外法權

第三款 治外法權

此ニ言フ所ノ治外法權即チ佛語ノ「エキス、トラテリトリアリデー」トハ彼ノ歐米人カ日本支那等ニ來リ其在留國ノ法律ニ服從セス專ラ本國領事ノ管轄ヲ受クルコトヲ指スニ非ズ此東洋ニ於テ行ハル、領事裁判權ノ事ヲ國際法ノ學語ニ於テモ又我邦從來ノ條約文面ニ於テモ治外法權ト稱シタルコトハ未タ曾テ之有ラサル所チリ故ニ我外務省ノ公文中ニハ決シテ此語ヲ用弗ス却テ之ヲ用弗ルコトヲ避ケルモノ、如シ然レトモ從來我邦ニ於テハ領事裁判權ノ事ヲ稱シテ一般ニ治外法權ト云ヘリ尤モ此二者ハ甚々相類似セル者ニシテ領事裁判權モ畢竟其一種ト云フモ不可ナカル可シト雖トモ國際法上彼ノ日本支那朝鮮土耳

領事裁判權ト治外法權ノ區別

治外法權ノ意義

古暹羅波斯等ニ行ハル、所ノ領事ナ特權ヲ領事裁判特權又ハ單ニ領事ノ特權ト稱ス而シテ此領事特權ノ事ハ國際法一般ノ原則ニ基キタルモノニ非ズシテ唯或國ト他ノ國トノ間ニ一時情實ノ存スルモノアリテ同等ノ交際ヲ爲シ難キ所ヨリ特ニ條約ヲ以テ一方ノ國ノ主權ノ幾分ヲ破殺スルモノト謂チリ之ニ反シ治外法權ナルモノハ國際法上一般ノ原則トシテ條約ノ有無ヲ問ハス存スルモノナリ即チ外國ノ君主又ハ使臣ニ對シ特別ナル待遇ヲ爲スモノ是ナリ是レ萬國普通ニシテ且古來行ハレタル慣例ナリ本款ニ於テ說述ス可キ治外法權ハ即チ此事ヲ論スルニ在リテ彼ノ世上ノ謂フ所ノ治外法權即チ領事裁判ノ特權ハ他ノ適當ナル場所ニ於テ説明スル所アル可シ而シテ今治外法權ノ事ヲ論スルニハ先ツ其由來ヲ一言セサル可ラス然レモ、夫レ邦國ハ皆不羈獨立ナリトハ國際法上ノ大原則ナリ萬國對峙ノ際ニ處シテ邦國ノ躰面ヲ保有シ以テ他ノ邦國ト交通スルニ當リテハ一刻モ此大原則ニ循由セサルコトヲ得ス若シ一國ノ主權ノ機關ニシテ他ノ或國ノ權勢ヲ以テ左右セラレ其國ノ法律ニ從ヒ其國ノ裁判權ヲシテ自國ノ内地ニ入レシムルコトアラ

(國際私法)

治外法權  
ナナル文字  
起原

ハ其國ノ獨立不羈即其國ノ主權ハ完全ナルコト能ハス然リト雖トモ古來國  
 際法上獨立不羈ナル邦國ニ在リテモ治外法權ノ制行ハルモノアルヲ見ルハ  
 何ツヤモソデスキト兵會テ之ヲ解シテ曰ク各國君主互ニ使臣ヲ派遣スルハ公  
 法ノ許ス所ナリ而シテ君主ハ無論其使臣ト雖トモ在留國ノ君主ニ服従ス可キ  
 モノニ非ス又其裁判所ノ管轄ヲ受ケサルハ當然ノ次第ナリ何トナレハ使臣ハ  
 其本國君主ノ言語ヲ表スルモノニシテ其言語ハ固ヨリ自由ナル可シ從テ其舉  
 動ハ亦他ヨリ毫モ妨ケラレコトナシト是レ即チ治外法權ノ存スル所因ナリ  
 是ヲ以テ古來萬國ノ慣例トシテ各國ノ君主又ハ其使臣ハ他國ニ於テ特別ノ待  
 遇ヲ受ケ通常ノ外國人ヨリモ更ニ優待ヲ受ク可キ  
 コト、爲レリ

此ノ如キ優待ノ制度ヲ稱シテ治外法權ト云フ然レトモエキスデリトリアリテ  
 「ナナル語ハ元ト譬喩ノ語ニシテエキスハ外デリトリアリテ」ハ地ナル意義ヲ  
 有シ之ヲ連綴シテ外地ノ制ト云フノ意義ヲ有スルモノナリ之ヲ君主又ハ其使  
 臣優待ノ制ニ名クルハ蓋シ君主又ハ其使臣ハ何處ニ至ルモ本國ノ土地ヲ離レ

佛國ニ於  
ケル治外  
法權

サルモリト看做シ毎ニ其本國ノ法律及ヒ裁判權ニ循由シ他ニ服従ス可キモノ  
 アルコト無キヲ以テナリ斯ノ如ク譬喩ノ意義ヲ有スル語ナルヲ以テ之ヲ絕對  
 的ニ解ス可カラズ即チ全然其本國ニ在ルモノト同シカラス故ニ外國ノ使臣ハ  
 其代表スル所ノ本國ノ主權ヲ傷ケサル限リハ在留國ノ一般ノ法律ヲ守ル可キ  
 ハ固ヨリ當然ノ事ニシテ即チ其國ノ主權ヲ傷ケサル追點ヲ以テ其優待ノ限度  
 トス然レトモ間或ハ其限度外ニ於テモ通常ノ外國人ト異ニシテ一般ノ法律ノ範  
 圍内ニ在ル可キ事ニ付テモ其使臣ニ對シテノミ特別ノ取扱ヲ爲スコト無キニ非  
 スト雖トモ是ハ畢竟國際ノ交誼ニ基キタルモノニシテ國際法上ノ義務ニ非サ  
 ルヲ之ヲ要スルニ君主又ハ其使臣ハ其人ノ帶有セル資格ニ因リ特待ヲ受ク  
 ルモノナレハ其資格以外ニ涉ル所行ニ至リテハ一般ノ法律ノ範圍内ニ在リテ  
 治外法權ヲ援用スルコトヲ得サルモノトス

サテ此特待ハ國ニ因リ又其事ニ因リテ多少異同ナキコト能ハスト雖トモ概シ  
 テ佛國ノ制度ト大同小異ナリトス佛國ノ制ヲ按スルニ外國ノ君主又ハ其使臣  
 ハ佛國ニ於テ通常外國人ノ享有セル諸權利ノ外ニ仍ホ左ノ四種ノ特權ヲ有



君主又ハ其使臣又ハ此等ノ隨從者ノ身體ノ侵スヘカラサルコト

第一 君主又ハ其使臣又ハ此等ノ者ノ隨從者ノ身體ノ侵ス可カラサルコト

第二 此等ノ者ノ居室ノ侵ス可カラサルコト

第三 或租税ノ免除

第四 裁判管轄ノ免除

以下順次此等ノ特權ヲ説明ス可シ

第一 君主又ハ其使臣又ハ此等ノ者ノ隨從者ノ身體ノ侵ス可カラサルコト

佛國ニ於テ君主又ハ其代表者ノ身體ヲ侵ス可カラサルモ古來ノ慣例ナルカ此原則ヲ始メテ法律ノ明文ニ掲テタルハ千七百八十九年ノ法律ナリ

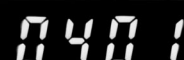
其他ノ人々ニ對シテハ別ニ法律ノ明文有ルニ非サレトモ外國ノ君主ニシテ佛國內ヲ通過スル者佛國ニ駐劄セル外國ノ使臣及ヒ其眷屬並ニ公務上此等ノ者ニ隨從スル人即チ書記宣書記生等ハ皆慣例上此等ノ特權ヲ享有セシム然レトモ外國ノ使臣ノ此特權ヲ有スルハ佛國ニ駐劄スル者ニ限リ他國ニ駐劄ス可キ使臣ノ佛國ヲ通過スル者ニハ此特權ヲ與スルコトナシ

又外國ノ君主ト雖トモ匿名旅行ヲ爲ス者ニハ右ノ特權ヲ與ヘサル者トモ匿名旅行トハ己レノ資格ヲ表明スルトキハ其待遇等ノ煩ハシキニ堪ヘサルヲ以テ某伯某侯ノ假名ヲ以テ旅行スルモノヲ云フ是レ歐洲ニ於テ屢々有ル所ノ事ニシテ從來日本ニ來遊シタル皇族等モ匿名旅行ナリシモノ多キニ居ルト云ヘリ

匿名旅行ナルトキハ君主又ハ皇族ノ待遇ヲ爲サス故ニ之ヲ全ク通常ノ外國人ト同視スルニ非スト雖トモ法律上ノ問題起ルトキハ公然身體不可侵ノ特權ヲ請求スルコトヲ得サルモノトス

此身體不可侵ノ原則ニ依リ保護ヲ受クル者ハ如何ナル犯罪アルモ拘留セラルルコト無シ唯其極メテ非常ナル場合例ヘハ一揆暴動ニ加擔スル等ノ場合ニ於テハ政府ハ之ヲ國外ニ放逐スルコトヲ得可シ是レ正當防衛ノ權ニ基クナリ

千八百八十一年公布ノ新聞紙條例ニ依ルニ外國ノ君主又ハ使臣ニ關シテ特別ノ規定ヲ設ケタリ即チ此等ノ人ニ對シテ誹毀譏謗シタルトキハ通常人ニ對スルモノヨリハ嚴ニ之ヲ處罰スルコト、爲シ外國ノ君主ニ對スル誹毀譏謗ハ三月以上一年以下ノ禁錮百ヲラシク以上三千ヲラシク以下ノ罰金ニ處シ使臣



君主又ハ其使臣ノ不  
可侵  
居宅ノ不

ニ對スルトキハ八日以上一年以下ノ禁錮五十フヲシク以上二千フヲシク以下ノ罰金ニ處スルナリ是レ其犯罪ノ結果通常人ニ對スルモ重大ナルハナリ然レトモ佛國ノ法律ハ其他ノ犯罪ニ付キ特別ノ規定ヲ設ケス是レ人ノ缺點ニシテ新定ニ係ル伊太利及ヒ獨逸ノ法律ハ外國ノ君主又ハ使臣ニ對スル犯罪ニ特別ノ刑ヲ以テ罰不可キモノト爲セリ  
第二 君主又ハ其使臣ノ居宅ノ侵不可カラサレバ其侵不可カスルヲ原則トシテ佛國內ニ在ル外國ノ君主又ハ其使臣ノ居宅ハ侵不可カスルヲ原則トシテ故ニ地方官吏ハ職務上ト雖トモ濫ニ其居宅内ニ侵入スルコトヲ得ス例ヘハ召喚狀ヲ送達シ又ハ家宅ヲ搜索シ若クハ其財產ヲ差押ヘ其爲メニ其館主ニ承諾ヲ受クルコトナクシテ之ニ入ルコトヲ得サルカ如シ故ニ執達吏及書類ヲ送達シ又ハ財產ヲ差押ヘントスルニハ民事訴訟法ニ示ス如ク外交官ノ手ヲ經ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得サルモノトス  
又外國使臣ノ居宅内ニ他ノ犯罪者ノ潜伏スルコト數々之有リ斯ル場合ニ於テモ尙ホ居宅不可侵ノ原則ヲ以テ警察官又ハ地方官ハ非常緊急ナル場合ヲ

除ク外先ツ其館主ノ許可ヲ得テ之ニ立入ルヘシ或ハ外務大臣ヲ經テ豫メ照會ヲ爲シ而シテ後立入ルヘシ昔時ニ在テハ罪犯捕拿ニ關シテ居宅不可侵ノ原則ハ頗ル嚴重ナリシモ近來ハ其館主ノ之ヲ承諾セサルカ如キコト殆ント之有ルコト無シトス古昔羅馬カ外交上ノ慣例ヲ作ル根源タリシ當時ニ在テハ外國使臣ハ互ニ威勢ヲ爭ヒタルヲ以テ其甚タシキハ使臣居住ノ一町内ハ侵入ス可カラサルモノトシ其町内ニ潜伏シタル罪犯ハ警察官ハ最早之ヲ捕拿スルコトヲ得サルモノト爲セリ蓋シ其一町内ハ使臣ノ借受ケタルモノト看做スニ在リシナリ然レトモ今日ニ於テハ其居宅内ニ潜伏シタル罪犯捕拿ヲ拒ムカ如キ頑固ナル使臣アルコト無ク其代表セル本國ノ主權ヲ毀損セサル限リハ之ヲ許諾スルコト、爲レリ

租稅ノ免  
除

第三 或租稅ノ免除  
佛國ノ制ハ外國ノ君主又ハ其使臣ニ直接稅ヲ免除ス又佛國ニハ窓戶稅ト稱スルモノアリ是亦外國ノ君主又ハ其使臣ニ免除ス然レトモ間接稅即チ印紙稅登

(國際私法)

裁判管轄ノ免除

記税、關稅又市關稅トモ云フ或物ヲ一市府ニ輸入スルニ當リテ拂フ所ノ租稅ニシテ彼ノ海關稅トハ別個ノモノトス等ノ如キハ免除スルノ限ニ非サルナリ

第四 裁判管轄ノ免除

裁判管轄ノ免除トハ外國ノ君主又ハ其使臣ハ在留地ノ裁判ヲ受ケサルヲ云フ就中刑事上ノ裁判ニ付テハ如何ナル場合ト雖トモ在留國ノ裁判權ニ服從スルノ義務ナシ又民事上ノ裁判ニ付テモ概シテ在留國ノ裁判權ニ服從スルコトヲ要セサルモノトス而シテ此事ニ關シテハ詳細ニ説明スルコトヲ要スルヲ以テ

後ニ裁判管轄ノ事ヲ說クニ當リテ詳悉ス可シ

(第十七回)

各國法制汎論

第二章 各國法制汎論

本章ニ於テハ外國人ノ身分ニ關スル各國法制ニ付キ汎論ス可シ而シテ此等法制ノ一般ノ原則ト佛國法律ヲ要領トハ前章ニ於テ既ニ說了セルヲ以テ本章ニ

英國ノ普通法

英米法

英國ノ普通法

於テハ佛國以外ノ各國ノ法制ノ特色異同ヲ觀察セントス

第一章 英米法

第二節 歐洲大陸法

第三節 回々救國法

第一節 英米法

英國及ヒ北米合衆國ノ法律ハ近來マテハ外國人ノ取扱ニ付キ頗ル苛酷ナルモノアリタリ蓋シ英國ノ普通法ハ多クハ昔時封建時代ノ慣習ヨリ成立チ來タルモノナレハ容易ニ其封建制度ノ觀念ヲ脱却スルコト能ハサリシヲ以テナリ又米國ニ於テモ英國ノ普通法ヲ立法ノ基礎ト爲シタルヲ以テ亦同一ノ弊習アリタリキ今試ミニ彼ノ普通法ノ規定スル所ヲ見ルニ外國人ハ土地ヲ所有スルコトヲ得ス又一軒ノ家屋ヲモ己レノ名ヲ以テ賃借スルコトヲ許サストノ制度アリタリ其理由ハ蓋シ土地ハ皆君主ノ所有ニ屬シ臣民ノ之ヲ有スルハ君主ノ賜

(國際私法)

フ所否寧ロ君臣ノ關係ニ因リ臣民ノ之ヲ預リ居ルモノト謂フヘシ然ルニ外國人ハ英國ノ君主ニ服從スルモノニ非サレテ以テ英國内ニ於テ其國ノ制度ノ組織中ニ加ハルコト能ハス隨テ土地ヲ所有スルノ權ヲ得ト云フニ在リ加之外國人ハ英國ニ於テ人ノ遺產ヲ相續スルコト又已レノ遺產ヲ他人ニ相續セシムルコトヲ得サリキ此理由トスル所ハ英國裁判所ノ屢々援用スル外國人ハ相續スルニ可キ血液ナシトシテ法語ニ基クモノトス

普通法ニ於ケル外國人取扱ノ酷ナルコト斯ノ如シ然ルニ近來外國トノ商業貿易倍々頻繁ヲ極メ國際交通ノ著シク發達スルニ從ヒ漸ク外國人ノ取扱ヲ改良セサル可カラサルノ必要ニ迫リタルヲ以テ英米共ニ新タニ法律ヲ制定シ舊來ノ苛酷之ヲ待遇ヲ革メ全ク其舊面目ヲ一新スルニ至レリ請フ先ツ英國ノ法制ヲ演說セシメ

英國ノ法制

第一

英國ニ於ケル外國人取扱ニ關スル著シキ法律ニアリ曰ク千八百四十四年ノ法律曰ク千八百七十年ノ法律是ナリ故ニ英國ニ於ケル外國人待遇ノ如何ヲ觀ル

公權上ニ關スル法

ニハ必スヤ此二法律ニ據ラサルヲ得

第一 公權上ニ關スル法制

公權上ニ關スル外國人ノ權利ニ付テハ千八百七十年ノ法律ニ於テ外國人ハ政務上何等ノ特權ヲモ有スルコト能ハスト規定セリ故ニ外國人ハ英國ニ於テ寺院ノ住職タルコト國王ノ樞密院ニ列スルコト國會並ニ地方議會ノ議員選舉權及ヒ被選權ヲ有スルコト其他總テノ官職ヲ帶フルコト等ノ權利ヲ有セシ然レトモ十箇年以上在留セル外國人ハ英國人ト同ナル條件ヲ具備スルニ付テハ陪審官ト爲ルノ權利及ヒ義務ヲ有スト爲セリ蓋シ陪審ノ制度ハ我國古來存セザル所ニシテ歐洲大陸諸國ニ於テモ彼此其制ヲ同ラセサルニ付テハ雖モ此之ヲ創設シタルハ英國ニシテ同國ニ於テハ古昔ヨリ之ヲ設ケアリテ而シテ外國人ニ陪審官ト爲ルノ權利及ヒ義務ヲ有セザルニ付テハ以テ純粹ナル政務士ノ職務ト爲サス寧ロ社會一般ノ義務ト爲シタルヲ以テナリ

公ノ秩序ニ關スル法律ハ内國人ト外國人トヲ別タス一般ニ之ヲ遵奉セシムルヲ原則トス從テ此類ノ法律ヲ保護ヲ受クルニ付テモ亦差別アラズ然レトモ此種

(國際私法)

解放令

ノ法律ニ關シテ大陸諸國ノ法律ト著シキ差別ノ存スルモノ有リ即チ英國ニ於テハ行政處分ヲ以テ外國人ヲ追放スルノ制無キコト是ナリ即チ英國ニテハ千六百年代ノ頃ニ制定シタル解放令ナルモノアリ此法律ハ我憲法第廿三條ト其趣旨ヲ同ラシ人身ヲ保護スルニ更ニ一層嚴重ナルモノニシテ英人ハ之ヲ以テ人身ノ自由ヲ保護スルノ城堡トシテ誇稱スル所ノモノナリ該法律ニ依レハ何人ニテモ警察官ニ拘縛セラレタキハ速ニ當該裁判官ノ面前ニ護送セラレシコトヲ請求スルヲ得可シ若シ裁判官之ヲ審問シテ其拘縛ノ理由分明ナラサルニ於テハ即坐ニ之ヲ解放セサル可カラサル旨ヲ規定セリ此法律ハ英國ニ於テ人身ノ自由ヲ保護スルノ根本法ト爲セリ故ニ英國ニ於テハ裁判所ノ命令ヲ以テスルノ外行政上ノ處分ヲ以テ人身ノ自由ヲ束縛スルコトヲ嚴禁シ從テ外國人ト雖モ之ヲ追放スルコトヲ得サルコトト爲セリ然レトモ暴動變亂ノ如キ非常ノ場合ニ於テ治安保護上己ニ得サルトキハ政府ハ解放令施行中止ノ議案ヲ國會ニ提出シ其議決ヲ俟テ而シテ後一時相當ノ行政處分ヲ執行スルコトヲ得ルナリ然レトモ此手續ヲ以テ一時行政處分ヲ執行セシコトハ古來稀有ノ

外國人ノ自由ヲ保護スルノ法律ニ關シテ

私權上ニ關スル法律

親族權

財產權

事ニ屬ス今其最近ノ事例ヲ示セハ千七百年代ノ終ニ當リ佛國大革命ノ際多數ノ暴徒英國ニ遁レ來リテ事ヲ舉ケントシ英國ノ治安ヲ妨害スルノ虞甚タレカリレヲ以テ解放令ヲ施行ヲ中止シ佛人ヲ國外ニ放逐セシコトアリ然レトモ是レ素ヨリ事ノ非常ニ出ツルモノナレハ之ヲ以テ彼ノ解放令ハ内外人ヲ論ズルニ身ノ自由ヲ保護スルトノ主義ヲ傷ツルニ足ラサルナリ  
第二ニ私權上ニ關スル法律ニ關シテ英國法律ニ於テハ內國人ノ有スル親屬權及ヒ財產權ヲ外國人ニモ亦享有セシムルヲ一般ノ原則トス唯親屬權ニ關シテ後見人ト爲ルニ付キ一ノ制限ヲ設クルノミ即チ外國人ハ英國人ノ女トノ間ニ産ミタル子ノ後見人ト爲ルコトヲ得ルモ被後見人ニ對シテ取扱上苛酷ニ涉リ若クハ衛生上又ハ教育上十分ノ看護ヲナサザルニキハ後見人タルヲ許サルコト是ナリ  
又財產權ニ付テハ從來外國人ノ權利ハ動産ニ限り享有スルヲ許シ不動産ヲ取得シ並ニ不動産上ノ權利ヲ執行スルコトヲ許サズリシカ千八百四十四年及ヒ千八百七十年ノ法律ヲ以テ著シキ改正ヲ爲セリ即チ千八百四十四年ノ法律ハ

(國際私法)



近來進步  
國ノ法制  
ハ其友  
國ノ人民  
ヲ待ツニ  
過キス

從來外國人ニ不動產ノ賃借及ビ買得ヲ禁セタル法律ヲ改正シテ其職業ヲ營ム  
爲メ及ヒ其家族ノ住居ヲ爲シハ廿一年ノ期間ヲ限リ不動產ヲ賃借シ及ヒ之  
ヲ買得スルコトヲ許シ後千八百七十年ノ法律ヲ以テ更ニ此制限ヲ撤去シ始メ  
テ外國人ハ英國人ト同シク動產不動產ヲ別ニス總テ所有共有取得讓與ノ  
權アリテ決定メタリ斯ノ如ク寛裕ナル新法ノ出來タル以上ハ爾後外國人ハ英國  
ニ於テ不動產ヲ相續ニ因リ讓受ケ又ハ讓渡スコトヲ得可シ去レハ先ニ述ヘ  
ル外國人ハ相續ノ血液ナシトシテ法語モ亦今日ニ於テハ最早消滅ニ歸シタルナ  
リ又人權ニ關シテハ債權者ト爲リ及ヒ其權利ヲ主張シ之ヲ執行スル能力ニ付  
テハ古來內國人ト外國人トノ間ニ差異ヲ設クルコト有ラザリキ  
以上述ヘタル如ク英國ノ法制ハ近來著シキ進步ヲ顯ハシタルモ此ハ唯其友國  
ノ人民ヲ待ツノ法制ニ過キス而シテ若シ一旦英國ト外國トノ間ニ戰爭起リ  
ルトキハ其外國人保護ノ法制ハ停止セラルベシモノニシテ古來其例少シキモ  
之ヲ停止スルトキハ交戰國ニ屬スル外國人ノ財產ハ英國政府隨意ニ之ヲ沒  
收スルコトヲ得ベシトノ規定アリ勿論政府ハ沒收ノ權ヲ嚴格ニ執行スルコト

文章權及  
美術權  
ハ其友  
國ノ人民  
ヲ待ツニ  
過キス

ナク實際戰爭宣告後ニ外國人カ英國ニ持來リタル財產ヲ沒收スルニ止ムルヲ  
通例トス而シテ又交戰中ニ交戰國ニ屬スル外國人ノ契約ノ能力ヲ中止セラレ  
又其以前ニ結ヒタル契約ノ効力モ交戰中ハ中止セラル可キモノトス附屬ノ曲  
文章權及ヒ美術權ノ事ニ關シテハ昔時ハ外國人ニ何等ノ保護ヲ與ハザリシ  
カ千八百四十二年及ヒ千八百四十四年ノ法律ヲ以テ外國ノ文章家及ヒ美術家  
ニ對テ英國ニ住居シ其作物ヲ始メテ發行シタル者或ハ英國ニ住居セサルモ英  
國樞密院令ニヨリ特ニ許可ヲ得タル者ハ該法律ニ依リテ內國人同様ノ保護ヲ  
享ズルコトナリ然レトモ彼ノ瑞西國都ニ於テ議定シタル萬國聯合條約  
ニ加盟シタル國ヨリ以來其條約國ニ屬スル外國人ニハ前顯ノ二法律ヲ適用セズ  
條約ニ從ヒテ保護スルコトヲ爲セリ然レトモ此ノ條約ハ千八百八十八年  
商業權及ヒ工業權ノ事ニ關シテハ內國人ト外國人トノ間ニ些シク差異ヲ設ケ  
ズ即チ千八百八十三年ノ法律ニ依リテ英國臣民タルト否トヲ論セズ何人ニテ  
モ英國ニテ特許ヲ請求スルコトヲ得可シト爲セリ所謂特許トハ廣ク發明模様  
雛形製造標及ヒ商標等ヲモ包括スルモノトス斯ノ如ク英國ニテハ外國人ノ商

商業權及  
工業權  
ハ其友  
國ノ人民  
ヲ待ツニ  
過キス

(國際私法)

半歸化  
工業  
商業

半歸化ハ  
今日ニ於  
テ其必要  
ヲ見ス

業權及工業權ヲ保護スルコト既ニ厚キヲ加フルニ彼ノ聯合條約ニ加盟シ  
ルヨリ以來益々其保護ノ確實ナルヲ致セリ  
英國ニハ、テニガシヨシト稱シ譯シテ半歸化ト稱スルモノアリ此ハ佛國ニ於ケ  
ル住所ノ特許ト類似シタルモノニシテ此半歸化ノ許可ヲ受ケタル外國人ハ通  
常外國人ノ得可カラサル權利ヲモ享有スルコトヲ得此法ハ彼ノ有名ナル千八  
百七十年ノ法律制定以前ニ在テハ外國人ノ享有ス可カラザリシ權利多カリシ  
ヲ以テ半歸化ノ制ハ頗ル必要ナリシモ今日ニ在テハ通常外國人モ亦殆んど内  
國人ト同シ權利ヲ享有スルヲ以テ此制ハ其必要ヲ減スルニ至リタリ否全ク其  
其適用ヲ見ルコトナカルヘシ何トナレハ當時半歸化ヲ許サレタル者ト雖トモ  
完全ナル私權ヲ享有シタルニハ非ズ例ハハ半歸化人ハ動産不動産ヲ獲得スル  
ノ權アリト雖トモ其半歸化ノ許可ヲ得ル以前ニ産ミタル子ニ遺産ヲ相續セシ  
ムルコトヲ許サズ蓋シ普通法ノ原則ニ依リタルモノニシテ其子ニハ相續ノ血  
液ナシト云フニ在リ只其許可ヲ得タル後ニ産レタル子ニハ相續權アリトスル  
ノ規定ナルモ千八百七十年ノ法律ハ如何ナル外國人ニテモ相續ヲ爲シ又ハ相

陪審官ノ  
制度

續セシムルノ權ヲ有セシムルニ至リタルヲ以テナリ此千八百七十年ノ法律ハ  
古來ノ慣習ヲ基本トセシ普通法ノ原則ヲ變更シタルモノニシテ實ニ國際法學  
ノ爲メニ賀ス可キ大盛事ト云ハサルヲ得ス該法ハ所有權ノ事婚姻ノ事及ヒ歸  
化ノ事等ニモ關係アリ以下折々之ヲ引用スル所アルヘシ現ニ角英國ガ始メテ  
國際法ノ新主義セシ法律トシテ吾人ハ常ニ其年號ヲ記シ置クヘキナリ  
終リニ茲ニ一言スヘキモノアリ千三百二十年ノ慣例ニ依リテ外國人カ民事  
若クハ刑事ノ訴訟ニ加ハルトキハ其陪審官ノ半數ハ其訴訟人ト同國ノ者タル  
ヘシトノ規定アリテ之ヲ混合陪審ト稱シタリキスル時代ニ於テ英國カ既ニ此  
公平ナル制度ヲ採用シタルハ寧ロ奇異ナルカ如キモ本來英國ハ四ヶ國ノ合衆  
王國ニシテ其合衆國內ノ者ヲシテ他ノ合衆國內ノ裁判ニ參加セシムルコトハ  
爲シタルヲ後ニ之ヲ其他ノ外國人ニモ適用シタルナリ而シテ此制度ハ千八百  
年代ノ初ニ當リテ刑事訴訟ノミニ止マズリシモ千八百七十年ノ法律此ハ前順  
ノ法律ト同シカラスヲ以テ之ヲ全廢シ英國人ト其手續上異同ナキコトハ爲セ

北米合衆國ノ法制

米國立法ノ基礎ハ英國ノ普通法ヨリ採レリ

(第十八回)

第二回 北米合衆國ノ法制ニ關シテ英國人ノ其ノ主權ヲ異國ニテイテ諸君モ知ル如ク北米合衆國ノ地ハ元英國人ノ移住地ナルガ故ニ千七百七十七年英國ト分離シテ一ノ獨立國ト爲リタル後ト雖トモ米國ノ立法ニ惣シテ英國ノ普通法ヲ以テ其基礎トナセリ此事タル今日ヨリ觀察スレバ頗ル奇異ナルカ如シ何トナレハ米國ハ字内民主國ノ最タルモ亦ニシテ英國國古來歐洲中ニ於テ封建主義ノ最モ著シキ國ナリ如斯其政治主義ハ全列相容イサズ固モ拘ハズ漫然米國ニ於テ英國ノ普通法ヲ遵守スルノ形跡アリ然レモ是レ畢竟沿革ノ致ス所ト云ハサルヲ得ス今普通法主義ノ著シキモノヲ見ルニ不動產授受ノ點ニ付キ劃然内外國人ノ區別ヲナセルモノノ存セルアリ案スルニ米國殖民地ハ元來英國君主ノ所有地ニシテ其英國ヨリ分離シテ獨立シタル人民カ君主ヨリ所有權ヲ讓受ケヌルモノナリ故ニ米國人民ノミ所有權ヲ有スルコトヲ得可ク外國人ヲシテ之ヲ所有セシムルコトヲ許サザルヲ原則トシ憲法ニモ之ヲ明記スルニ至リタルナリ

普通法主義ノ漸ク排斥セラレル所由

合衆國ニ於ケル私權上ニ關スル法律ヲ改正スルノ困難

合衆國諸州ノ法制ハ四類ニ

(國際私法)

然レトモ合衆國ハ共和政治ヲ創建シテ以來未ダ多ク年所ヲ閱セ共ニ其ノ以テ其政略上ニ於テモ又經濟上ニ於テモ成ル可ク外國人ノ移住ヲ獎勵シ其障礙ト爲ル可キ總テノ事物ヲ除却シ以テ外國人ノ勞働及ヒ學藝ヲ輸入シ以テ自國ノ富ヲ增長セサルヲ得ス是ヲ以テ從來慣用シ來リタル英國ノ普通法ノ如ク封建主義ヲ墨守シ外國人ヲ無能力ト爲スノ法律ハ此新設國ノ國民利福ト相反スル所アルヲ悟リ近來外國人ニ對シテハ成ル可ク普通法ノ嚴格ナル所ヲ寬裕ナル制度ニ改正スルコトヲ勉メリ然レトモ合衆國ハ元來三十六州ヨリ成ル所ノ聯邦國ナリ而シテ其各州ハ皆獨立ノ立法權ヲ有スルガ故ニ私權上ニ關スル法律ハ各州互ニ隨意ニ制定スルノ特權アリ元公權上ニ關スル法律ハ皆相同シ合衆國全邦ニ貫通セル盡一ノ法律アルコト無シ從テ外國人ニ對スル法律モ各州相異ナレリ又其法律ヲ改正セサルヲ得サルコトハ夙ニ知リタル所ナルモ法律ノ改正ハ英國ニ於ケルヨリモ困難ニシテ全邦ノ一致ヲ得ルハ殆ント絶望ノ事ナリ如斯合衆國ニ於テハ各州其法制ヲ異ニスルヲ以テ今逐一之ヲ説述スルハ徒ニ冗長ヲ致スノミナルヲ以テ其異同ヲ類別シ其大要ヲ説クニ止メントス今外

別類  
第一類

國人ニ關スル不動産所有權ノ制ノ異同ヲ以テ之ヲ類別スルトキハ左ノ四類ト爲スヲ得可シ

第一類 ベルモントアラバマ、北カロリン、ミツス、トリノ法制ニ依リテ外國人ハ此四州ハ英人種ノ居ヲ占ムル所ナルヲ以テ固ク英國普通法ヲ遵奉シ外國人ハ能力ヲ有セストノ原則ヲ墨守セリ故ニ此等ノ各州ニ於テハ外國人ハ土地所有權ヲ有セス而シテ若シ相續又ハ遺囑ニ依リテ其土人ヨリ不動産ヲ讓受ケタルトキハ一時所有權ヲ有スルコトヲ許スト雖トモ其讓受ノ時ヨリ三年内ニ更ニ之ヲ他ニ移轉セサル可カラス其期限ヲ經過セハ最早不動産ヲ所有スルコトヲ許サス州政府ハ強テ之ヲ競賣ニ付シ代價ニ代ヘテ之ヲ交付ス

第二類 マイン、マサチニセツツ、ニユゼリゼ、オイヨ、ミネソダ、ニブロス、カウス、コンシニ、カンサス、ミチガン、イリノア、オレゴン、ジョルジエ、フロリダ、コロラド、ロンポー、ロッドイスラレド、ロイザス

此十七州ニ在テハ第一類ニ屬スル諸州ノ法制ト全ク相反レ外國人ニ與フルニ何等ノ條件ヲモ要セス自由ニ不動産ヲ所有スルノ權ヲ以テス蓋シ此等ノ諸州

第二類

第三類

ハ主トシテ佛蘭西、西班牙、伊太利等南歐諸國人ノ居住セル所ナリ

第三類 ニエール、ハブシエル、デウ、ダ、ヴ、ル、ジニア、ケント、キ、コ、ンチキ、ユト

此六州ニ於テハ其州内若クハ合衆國ノ領地ニ寄留セル外國人ニハ不動産所有權ヲ與フルモ其他ノ外國人ニハ之ヲ所有スルコトヲ許サス然レトモ鎮山探掘ノ爲メナルトキハ寄留ノ條件ヲモ要セスシテ其土地ノ所有權ヲ許與ス

又此六州ノ外尙第三類ニ屬スルモノアリ即チカリフォルニア、インヂヤナ、デキ、ラス、テナセノ四州是ナリ此等ノ諸州ニ於テハ外國人カ土地ヲ所有スルニハ必ラス其地ニ寄留スルコトヲ要ストナスモ若シ相續又ハ遺囑ニ依リテ不動産ヲ取得スルトキハ其當時未タ寄留セサルモ或期限内ニ寄留ヲ定ムレハ亦之ヲ所有スルコトヲ許ス然レトモ其期限内ニ寄留セサルトキハ政府之ヲ公賣ニ付シ其代價ヲ其者ニ交付スルト規定セリ

第四類 アルカンサス、デラワレ、プリラント、ニュヨルク、南カロリン

此五州ノ法制ニ依レハ外國人ハ合衆國ノ法律ニ從ヒ合衆國ニ歸化セント欲スルノ意思ヲ表明スルニ非サレハ不動産ノ所有權ノ許サスト爲セリ

(國際私法)

其實例ノ  
一二

斯ノ如ク合衆國ニ於ケル不動産所有權ノ規則ハ區々ニモテ全國畫一ナル能ハ  
ス故ニ中央政府カ外國ト條約ヲ締結スルニ當リ大ニ困難ヲ感スルコトアリ蓋  
シ三十六州ハ各立法權ヲ有シ其法制ヲ異ニスルモ條約締結ノ權利ハ獨リ中央  
政府ノ有スル所ナリ而シテ米國人カ外國ニ於テ無能力タル可キ待遇ヲ受ケサ  
ラシメンコトヲ欲スレハ外國人ヲシテ米國ノ何レノ州ニ於テモ能力ヲ有セシ  
メサルヲ得サルモノナルカ故ニ此ノ如キ條約ヲ中央政府ノ意ニ隨テ結フハ頗  
ル困難トスル所ナリ何トナレハ中央政府ハ縱合其權利ヲ以テ斯ル條約ヲ締結  
スルモ國內到ル所其法制ヲ異ニシ或ハ普通法ノ原則ヲ固守セル州モアルヲ以  
テ此等ノ州ニ於テ外國人ヲ待ツニ其州ノ人民ト同等ナラシメンコトハ得テ爲  
ス可カラサル所ナレハナリ今其實際ノ一二例ヲ示サンニ千八百四十一年ニ合  
衆國大統領ハバビエール國ト條約ヲ結ビ兩國人民ハ互ニ他ノ國ニ於テモ不動産  
ノ所有權ヲ有ス可シトノ約款ヲ議定シ既ニ雙方ノ調印ヲ了シ之ヲ上院ニ提出  
シテ其批准ヲ求メタルニ上院ハ之ヲ拒ミタリ其理由トスル所ハ即チ各州其ノ  
法制ヲ異ニスルヲ以テ斯ノ如キ條約ハ實行スルコト能ハスト云フニ在リタリ

其(附言)君主國ニ於テハ條約ノ批准ハ君主之ヲ爲スト雖モ合衆國ニ於テハ上院  
之ヲ爲ス而シテ上院ノ之ヲ爲スヤ他ノ國ノ如ク單ニ之ヲ批准スルトセサル  
若トニ止マラス其全權委員ノ議了シ調印シタル條約案ヲ變更加除シテ斯ノ如  
ク改正シタル上ニテ批准ストノ議決ヲ爲スコト有リ曩ニ我國トノ間ニ締結  
シタル罪人引渡條約ノ如キモ亦然リシナリ  
又千八百五十三年二月二十三日佛國トノ間ニ締結シタル條約文中ニハ特ニ前  
述ノ如キ不都合アラシコトヲ豫見シ之ヲ掲ケタリ其第七條ニ曰ク合衆國中現  
行ノ法律ヲ以テ之ヲ許ス州ニ於テハ佛國人ハ不動産所有權ヲ云々又其末  
文ニ曰ク合衆國中現行法律之ヲ許サハル州ニ對シテハ其州ニ於テモ右ノ權利  
ヲ佛人ニ付與ス可キ法律ヲ制定セシコトヲ大統領ヨリ勸告ス可シト條約文中  
ニ特ニ斯ル明文ヲ掲ケタルハ奇異ナリト雖トモ此ハ却テ其實情ヲ穿テタルモ  
ト謂ハサル可カラズ然レトモ近來國際法ノ進歩ト實際上ノ必要ヨリシテ普  
通法ノ原則ハ日ヲ逐テ其適用ノ範圍ヲ縮小スルニ至レリ

歐洲大陸  
法ハ三類  
ニ別テ説  
述ス  
第一類

外國人ニ政權ノ享有ヲ許サ、ルハ歐洲大陸諸國ノ法律ハ悉ク其撰フ一ニシ又之ヲ付與ス可カラサルノ道理アリトス然レトモ私權享有ノ点ニ付テハ各國其原則ヲ同フセス或ハ佛國ノ如ク條約上相互對等主義ヲ執ルモノアリ或ハ立法上相互對等主義又ハ事實上對等主義ヲ用ユルモノアリ又或ハ前二者ニ比スレハ更ニ一層寬大ニシテ二三ノ例外ノ場合ヲ除キ概シテ私權ノ享有ニ付テハ內國人ト外國人トヲ區別セス又立法上若クハ條約上ノ對等ノ條件ヲモ要セス外國人ヲシテ內國人ト同シキ親屬權及ヒ財產權ヲ付與スルモノアリ然レトモ今各國ノ法制ヲ逐一枚舉シテ之カ異同ヲ研究スルノ要ヲ見ス其大躰要領ヲ示シ之カ精神ヲ論スルニ止メントス

各國ノ法制ニハ種々ノ異同アリト雖モ之ヲ分類スルトキハ左ノ如シ

第一類 佛蘭西白耳義リゲヂンブル及ヒ瑞典ノ諸國ニ於テハ條約上對等主義ヲ執リ以テ外國人ヲ待ツノ標準ト爲セリ

國ニ於テハ外國人ノ法律上ノ身分ニ付テハ佛國ノ如ク之ヲ其民法第十一條及ヒ第十三條ニ掲ゲタリ

又外國人ハ相續又ハ遺囑ニ因リ財產ヲ獲得スルノ能力ナキコトハ佛民法ニモ之ヲ掲ゲタルカ千八百十九年ノ法律ヲ以テ之ヲ改正シ又白耳義ニテハ千八百六十五年ノ法律ヲ以テ外國人無能力ノ原則ヲ全廢セリ爾後同國ニ於テハ內國人ト外國人トハ同權ト云フモ可ナリ又其他商業權及ヒ工業權ニ關シテモ亦佛國ト殆ント異同アルコトナシ

第二類

第二類 獨逸奧地利セルビヤ及ヒ瑞典

此等ノ數國ハ立法對等主義若クハ事實上對等主義ヲ執リテ其法律ノ原則トセリ即チ外國人ノ本國ニ於テ此方ノ人民ヲ取扱フ方法ト同一ナル方法ヲ以テ其外國人ヲ取扱フニ在リ

獨逸聯邦ハ各邦各法典ヲ異ニセリ然レトモ外國人ノ身分ニ關シテハ普通法ト稱シ一般ニ行ハル、所ノ慣例アリ此慣例ニ依レハ內國人ノ享有セル私權ハ概シテ外國人ニモ付與スルヲ原則トス但外國人ノ本國ニ於テ獨逸人ヲサホトニ

(國際私法)

優待セサル國ノ人ニ對シテハ裁判官ハ私權ノ享有ヲ拒絕スルコトヲ得可シト爲セリ

埃國ニ於テハ獨逸ノ普通法ト同シク其民法第三十三條ニ規定シテ曰ク外國人ハ公民ノ資格ニ屬スル權利義務ヲ除クノ外總テ内國人同様ノ權利及ヒ義務ヲ有ス但埃人ト同様ノ權利ヲ執行スルニ付キ若シ疑アルトキハ其外國人ヨリ立證シテ其本國ニ於テモ埃人ヲ本國人同様ニ取扱フトノ事ヲ示サハル可カラスト

(第十九回)

前回ニハ第二類中ノ二三ノ國法ヲ説キ了リタリ本日ハ其續キヲ説カン

セルビヤ 此國ニ於テハ千八百四十四年ニ民法ヲ制定公布セリ此法ハ爾來多少ノ改正補修アリシモ外國人ノ身分ニ關スル法制ハ今日尙ホ此法律ニ據レリ即チ私權享有ノ點ニ付テハ立法上對等主義ヲ執レリ其第四十六條ニ規定シテ曰クセルビヤ國ニ在セル外國人ハ其身軀及ヒ財産上ノ諸權利ニ付テハ内國人ト同様ナル法律ノ保護ヲ受ク但法律ノ特定セル場合ニ於テ内國人タル資格

セルビヤ

ヲ要スル權利ハ此限ニ在ラスト此條文ニ據レハ法律ノ特定セサル限ハ外國人モ内國人ト同様ニ私權ヲ享有スルモノナリサレハ第二類ニ屬スト云ハンヨリ寧ロ第三類ニ入ル可キカ如シト雖トモ決シテ然ラス同第四十七條ニ曰クセルビヤ國在住ノ外國人ハ其本國ニテセルビヤ人ノ享有シ得可キタケノ私權ヲ享有ス但疑アル場合ニ於テハ其外國人ヨリ舉證ス可シト所謂舉證ノ義務ハ其本國ニ於テセルビヤ人ヲ同様ニ取扱フコトヲ證スルニ在リサレバ是レ純然タル立法對等ノ制タルヲ知ル可シ

然レトモ此國ニ於テモ亦他ノ多クノ國ニ於ケルカ如ク相續ニ關スル法制ハ之ヲ格別ト爲セリ即チ同法第四百二十三條ニ曰ク外國人カセルビヤ人ノ遺産ヲ相續スル權利ニ付テハ總テ國際條約ノ定ムル所ニ從フ可シト故ニ若シ條約ニ於テ之ヲ定メサル以上ハ其外國人ハセルビヤ國內ニ於テ相續權ヲ有セサルモノトス今外國ノ此國ト相續權ニ關シテ條約ヲ締結セルモノヲ舉クレハ其數渺ナカラス即チ伊太利埃地利北米合衆國希臘獨逸佛蘭西等はナリ此等ノ國人ハセルビヤ國內ニ於テモ相續又ハ遺贈ニ因リテ遺産ヲ獲得シ又ハ讓渡スコトヲ

(國際私法)

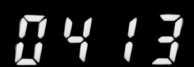
瑞典

得ルナリ  
又該國民法第四十六條ハ外國人ニ與フルニ此國內ニ於テ諸般ノ契約ヲ爲スノ  
權ヲ以テセルモ此條規ハ千八百五十二年ノ法律ニ依テ大ニ其價值ヲ減殺セラ  
レタリ何トナレハ該法律ニハ外國人ハ如何ナル方法ヲ以テスルヲ問ハズ總テ  
不動産ヲ獲得スルコトヲ得ストノ規定ヲ設ケタレハナリ然レドモ此法律ノ規  
定ハ前述ノ條約國ニ影響ヲ及ホスコトナシ  
瑞典 此國ハ歐洲大陸ノ極北ニ偏シタル國ニシテ外國人ノ權利ニ關シテハ久  
シク曖昧ノ中ニ放任セラレタリキ而シテ其始メテ外國人ニ不動産ヲ獲得スル  
權ヲ與ヘタルハ千八百二十九年ノ勅令是ナリ然レモ該勅令ニ據ルモ尙ホ外國  
人ニシテ不動産ヲ獲得スルニハ一々政府ノ許可ヲ受ケサルヲ得サルモノニシ  
テ政府ハ之ヲ許否スルノ權ヲ有シタリキ爾來歐洲各國ハ漸ク外國人ニ對シテ  
自由主義ヲ擴充シタルヲ以テ此極北ノ國モ亦多少法制ニ變改ヲ加ヘサルヲ得  
サルニ至リ降テ千八百七十三年ニ及ヒテ遂ニ其法律ヲ改正シ立法上對等主義  
ヲ採リ私權享有ニ付テハ外國人ヲ內國人ト同様ノモノト爲シタリ管ニ通常ノ財

第三類

西班牙

產權ノミナラス相續權ノ如キモ亦外國人ニ許與セリ即チ外國人ハ其本國ニ於  
テ瑞典人ノ行フコトヲ得可キ相續ト同様ノ方法ヲ以テ瑞典國內ニ於テ相續權  
ヲ行フコトヲ得可シ唯法律ハ特ニ一ノ檢束ヲ加ヘテ外國人ハ他人ノ後見人ト  
爲ルコトヲ得ストナセリ  
第三類 西班牙、伊太利和蘭、葡萄牙、羅馬尼及ヒ露西亞  
此類ニ屬スル國ニ於テハ他國トノ條約ノ有無ヲ論セス又他國カ立法上其國人  
ヲ如何ニ取扱フヲモ問ハス國際法ノ正義ニ基キテ外國人ノ私權ヲ認ムルモノ  
ニシテ其法制ノ細目ハ國ニ依リテ相同シキヲ得スト雖トモ要スルニ人ノ私權  
享有ノ點ニ付テハ内外國ノ區別ヲ設ケサルヲ以テ原則トシ唯或ル特定ノ權利  
ノミハ例外トシテ內國人ニ限リテ外國人ニ許與セサルコト、爲セリ此類ノ法  
制ノ立方ハ近世國際法學者ノ最モ稱贊スル所ニシテ我國ノ如キモ亦此類ニ屬  
ス  
西班牙 此國ニ於ケル現行憲法ハ千八百七十六年ニ發布セラレタルモノニシ  
テ其第二條ニ外國人ノ權利ノ事ヲ規定セリ同條ニ曰ク外國人ハ西班牙ノ領地内





ニ於テ住居ヲ定メ營業ヲ爲スノ自由ヲ有ス但營業ノ爲メ政府ノ相當ノ免許ヲ要ス可キモノニ付テハ其免許ヲ得ルニ非ザレバ之ヲ爲スコトヲ得ス又曰ク外國人未タ歸化セサル間ハ政權ノ一部ヲ委託スル公ケノ職務ヲ行フ能ハス下尙ホ又第四條及ヒ第六條ニ於テ外國人ノ身軀ノ自由並ニ住所不可侵ノ原則ヲ規定セリ其他動產不動産ヲ獲得スル權相續權遺囑權等ノ事ハ千八百五十二年ノ勅令ヲ以テ之ヲ規定セリ又該國ニハ千八百八十五年ヲ以テ制定シタル商法ヲテ外國商人及ヒ會社ニ對シ十分ニ商業ヲ營ム權ヲ許與セリ

伊太利 此國ハ萬國中私權享有ニ關シテ最モ早クヨリ内外國人同權主義ヲ主張シ又最モ寬大ナル方法ヲ採用シタル國ナリ其民法ハ千八百五十六年ノ制定ニシテ其第三條ニ之カ原則ヲ掲ケテ曰ク内國人ノ享有ス可キ私權ハ外國人モ亦總テ之ヲ享有スト左レハ公權ニ屬スル諸權ヲ外國人ニ許與セサルハ勿論ナレトモ私權ニ至テハ財產權ト親屬權トヲ別タズ舉テ之ヲ外國人ニ許與セリ故ニ外國人伊國內ニ住所ヲ定ムルハ別ニ政府ノ許可ヲ要セス突然此國ニ來リ一家ヲ設ケテ居住セハ出生婚姻相續其他營業上ニモ毫モ支障アルコト無シ從テ

伊太利

和蘭

一時寄留スル所ノ外國人ト永住ノ外國人トト異同ナキモノトス然レトモ民法第七百八十條ニ據レハ唯一ニ制限ヲ設ケテ即チ外國人カ遺囑ノ證人ト爲ルニハ伊國內ニ一家ヲ構フル者ニ限リ一時通行ノ外國人ニテハ證人ト爲ルコトヲ得サルコト是ナリ是レ遺囑ノ證人ハ通常民事契約ノ證人ト其性質ヲ異ニシ多少公權ニ關スル所爲ナルヲ以テナリ

和蘭 其民法第九條ニ曰ク和蘭國ノ民法ハ外國人ニ對シテ内國人ニ對スルト同様ナル可シト然レドモ多少ノ例外ナキニ非ス殊ニ最モ著シキハ相續權ナリ同民法ノ規定ニ據レハ外國人ハ相續權ヲ有セサルヲ原則トスレトモ此禁制ハ千八百六十九年ノ法律ヲ以テ廢止セラレタルヲ以テ現今ニ於テハ外國人ト雖トモ和蘭國ニ於テ相續權ヲ有セリ

葡萄牙 千八百六十七年ニ發布シタル民法第二十五條ニ外國人ノ私權ニ關シテ規定セリ曰ク葡萄牙國ニ旅行シ又ハ在住スル外國人ハ其行爲ノ葡萄牙國內ニ於テ結果ヲ生ス可キ事件ニ付テハ内國人同様民法上ノ權利義務ヲ有ス但法律ニ特定セル場合若クハ國際條約ニ定ムル場合ハ此限ニ在ラスト此ハ一種異様

葡萄牙

(國際私法)

ノ規定ナレドモ詮シ來レハ第三類ニ屬スルハ論ヲ俟タヌ又千八百八十七年ニ發布シタル商法第八條モ亦規定シテ曰ク内國人ト外國人トヲ問ハス民事上契約ヲ結フ能力アル者ハ商業ヲ營ム權アリト云ク其言ハ實ニ諸國内ニ羅馬尼 此國ハ土耳其ト歐洲大陸諸國トノ間ニ介立セル一小國ニシテ始メ土耳其ノ屬國タリシカ近來漸ク表面上獨立國ノ体裁ヲ裝ヘ其其實常ニ強隣ノ干涉ヲ受ケ且國內ニモ種々ノ宗教行ハレ互ニ相軋轢セリ故ニ敢テ近世ノ法理ニ晦シト云フニ非ザルモ干涉ノ結果自カラ其文化ノ發達ヲ阻得ヒラルノ觀ナレトモ現時ニ於テ國際法上第三類ニ屬スルモ之ヲ致シタルニハ幾多ノ變遷ヲ經タルモノナリ先ツ此國ニハ憲法トモ謂テ可キ法律アリ即チ千八百三十二年ニ制定シタルモノニシテ該法律ニ據レハ何レノ宗教ニ屬スル人タリトモ外國人ハ總テ不動産ヲ獲得スルコトヲ得スト爲シ唯例外トシテ纒カニ之ヲ許與スル場合アリ即チ外國ノ商人羅馬尼國內ニ於テ商業又ハ工業ヲ營ム場合はナリ其後千八百六十四年ニ至リ耶蘇教ヲ奉スル外國人ニシテ此國內ニ住所ヲ定ムル者ニ限り相互對等ノ條件ヲ以テ此權ヲ許與スルコトト爲シ其翌年ニ民法

本國ニ

時

ヲ發布シ全ク内外國人同權ノ主義ヲ採レリ此原則ハ其第十一條ニ掲ケタリ曰クルニヤ國ニ在住ノ外國人ハ其身體並ニ財產ニ係リ内國ノ法律カ内國人ニ與フルタケノ保護ヲ享クヘシト而シテ此明文ハ前述ノ伊國法ノ如ク別ニ住居ノ特許ヲ要スルコト無ク又立法上若クハ條約上ノ條件ヲ要スルコト無シ斯ノ如ク極メテ公平ナル民法ヲ制定シタレトモ後ニ至リテ支障アルヲ發見シタリト見ユ千八百七十九年ノ法律ヲ以テ右ノ民法ノ規定ニ一ノ制限ヲ附シ市街ノ不動産ヲ獲得スルハ内國人又ハ歸化人ニ限ルコトト爲セリ故ニ外國人ノ獲得スルコトヲ得ルハ田畑其他市外ニ在ル不動産ニ限ルモノトス此ノ如キ特種ナル制限ハ他國ニ於テモ亦全ク其類例ナキニ非ス蓋シ此特種ノ制限ヲ設クルニ至リタルハ其隣國ニ種々ノ異教人ノ多ク集リ來リテ居ヲ占ムル者アルヲ以テ政略上已ムヲ得サルニ出テタルコトナラン勿論此制限法ノ中ニハ既得權利ハ從來ノ通り存スルコト又條約アル外國人ノ爲メニハ其條約期限盡クル迄此法ヲ執行セス云々ノ箇條アリ

(國際私法)



ハ本國ノ國籍ヲ失ヒタル者亦尠ナカラズ或ハ羅馬ニ生レ代々亦此國ニ永住  
 シナカラ歸化モ爲サズ又外國ノ籍ニモ入ラサルカ如キ者アリ斯ル者ハ多クハ  
 或ル外國ノ保護ヲ受ケ居リ之カ爲メ羅馬政府ノ管轄ヲ避ケ就中兵役ヲ免カ  
 レ租稅ヲ通レンコトヲ謀ルノ徒ニシテ此事ニ關シ國際上ニ屢々困難ナル談判  
 ヲ惹起シ其煩ニ堪ヘズ遂ニ此弊害ヲ一洗セント欲シ英吉利伊太利奧地利佛蘭  
 西及ヒ獨逸ノ諸國ヘ談判ヲ遂ケ條約ヲ結ヒ現今ニ於テハ外國保護人ハ全ク其  
 跡ヲ絶チ而シテ從前他國ノ保護ヲ受ケタル外國人モ今ハ漸ク羅馬政府ノ管  
 轄ニ服スルニ至レリ

附言 外國政府ノ保護ヲ受ケタルハ無條約國ノ外國人カ東洋ノ開港場ニ來  
 遊シ他ノ條約國ノ領事ニ依頼シテ其保護ヲ受ケ假リニ其管轄ニ服シ其在留  
 國ノ主權ニ服從セサルヲ云フ此ノ如キ事ハ國際法上決シテ許ス可カラサル  
 ハモノナルモ土耳其其他亞細亞ノ或ル國ニ於テハ實際西洋人ノ多ク爲ス所  
 ニシテ又其在留國ノ政府モ自ラ甘シテ之ヲ默認セルモノハ如シ斯ル惡  
 例ハ我國ノ開港場ニモ往々顯出シタルコト有レトモ我政府ハ未ダ曾テ公

露西亞

礦物採掘  
權

國境保護

三然之ヲ認メタルコト有ラサルニナラス一昨年ノ事ナリキ橫濱ナル外國  
 領事カ右ノ保護ヲ行ハントセシ時ニ當リテ時ノ外務大臣青木子ヨリ嚴重  
 ナナル談判ヲ爲シタルカ爲メ領事モ遂ニ之カ保護ヲ止ムルニ至レリ其  
 時領事人ハ三回(第二十回)其國ニテ露國ノ領事ニ對シテ云フ

露西亞 此國ハ元來外國人ニ對シテ相互對等主義ヲ執レルニ非サレトモ其西  
 北部ナル芬蘭州ハ元ト瑞典ノ領地ナリシヲ千八百年代ノ初ニ露國ニ合併シ  
 ルモノニシテ其地方ニ限リ今ニ至ルマテ瑞典ノ法律行ハレ即チ瑞典ト同シク  
 相互對等主義ヲ執レリ又其他ノ諸州ニ於テモ漸次私權ニ付テハ内外國人同權  
 主義ヲ行ヒシカ近來之ニ二三ノ例外ヲ設クルニ至レリ其第一ハ礦物採掘ノ  
 權ニシテ露國ハ礦物ニ富ミ外國人ノ來テ鑛業ニ從事セル者頗ル多ク政府モ亦  
 大ニ之ヲ獎勵シ外國人ノ自由ニ採掘スルニ放任セシカ千八百八十七年ニ勅令  
 ヲ發シ爾後外國人ハ己レノ所有地ニ於テスルニ非サレハ礦物ヲ採掘スルコト  
 ヲ許サズトシ而シテ其從來既ニ許可ヲ受ケタル外國ノ會社ニ限リ既ニ得タル  
 許可ノ範圍内ニ於テハ採掘ヲ許スコト、セリ是同權主義ノ一例外ナリ又他ノ

(國際私法)

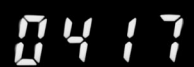
例外ハ國境ニ接續セル地ニ於テ外國人ニ土地ノ所有權ヲ與ヘサルコト是ナリ所謂國境ノ地下ハ其總テノ國境ヲ云フニ非シテ從來隣國ト爭ノ起リタル場所若クハ隣國ヨリ合併シタル土地等ヲ指シタルモノニテ即チ舊波蘭ノ領地十州ト瑞典ニ界セル十一州トナリ此二十一州ニ於テ外國人ニ自由ニ土地ノ所有權ヲ得セシムルトキハ或ハ多クノ地ヲ兼併シ後難ヲ讓スノ恐ナキニ非サルヲ以テ外國人ニハ如何ナル方法ヲ以テスルモ一切土地ノ所有權ヲ獲得スルコトヲ許サズ唯市街地ニシテ人ノ住居ニ供スル爲メニ土地建物ヲ所有スコトヲ許スノミ尙ホ他ノ例外ハ外國人ノ相續權ニ關ス是亦千八百八十七年ノ法律ヲ以テ規定スル所ニシテ外國人ハ露西亞國ニ於テ不動産ノ相續ヲ爲スコトヲ得ス若シ外國人死亡シ其相續人遺產ヲ相續不可キ場合ニ於テ遺產中不動産アルトキハ相續人ハ三ヶ年ヲ期シ其間ニ之ヲ露國人ニ賣渡スコトヲ要ス若シ之ヲ右ノ年限内ニ賣渡サハルトキハ其地ノ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ公賣ニ付シ其代金ヲ相續人ニ交付ス

右三箇ノ場合ヲ除キ他ハ悉ク内外國人同權主義ヲ執レ

第三節 回々教國法

回々教國トハ亞細亞ノ西邊即チ地中海ノ東岸ニ當ル土耳其及ヒ其屬領諸國ト亞弗利加ノ北端即チ地中海ノ南岸ニ瀕セルマロク、チニジヤ、トリポリノ地方ヲ指ス(埃及モ亦此中ニ在リ)此等ノ諸國ハ皆マホメツト教ヲ奉スル人民ノ居住セル地ニシテ該教ノ教規ニ從ヘハ「マホメツト」教ヲ奉スル諸國ハ皆土耳其帝ニ從屬不可キ管ナレトモ實際ハ即チ否ラズ各獨立ノ小國ヲ成シ時ニ貢物ヲ奉リ即位式又ハ祭儀婚禮等アルニ當リテ土耳其帝ノ上裁ヲ受クル等唯外面上ノ儀式アルニ過キサルコト恰モ朝鮮ノ清國ニ於ケルカ如シ

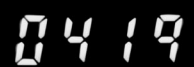
此等ノ諸國ハ歐洲ニ近接シ殊ニ土耳其ノ國都コンスタンチノープルハ歐洲中ニ在リト雖トモ古來宗教ヲ以テ國法ノ基礎政道ノ大本ト爲シ殊ニ耶蘇教トハ相敵視シ互ニ容レサルノ情勢アリ是ヲ以テ其人情風儀共ニ歐洲各國ト相徑庭ス蓋シ宗教ノ異同然ルヲ致シタルナリ從テ此等回々教國ニ於テハ前節ニ説キタルカ如ク國際法ノ公義ニ適當セル法則アルコト無ク又外國人モ此等ノ國ニ





百八十  
跡ノ自由ト云フモ可ナリ  
第二 土耳其ニ在留セル各國人ハ其國毎ニ一ノ団体ヲ結ビ各團體ニ議員ヲ選  
舉シ其議員ヲ以テ組織シタル集會ニ於テ團結一般ノ行政事務ヲ執リ領事之ヲ  
監督シ宛然一個ノ自治跡ヲ爲スガ如シ  
第三 領事ハ其國人ノ團體ノ行政ヲ監督スルノ外自國ノ臣民ニ對シテ警察權  
及ヒ裁判權ヲ有ス此裁判權ハ頗ル廣大ニシテ例ハ佛國ノ領事ナレハ佛國人  
ノ爲シタル犯罪モ又土耳其人ノ佛國人ニ對スル犯罪モ總テ之ヲ裁判シ民事訴  
訟ニ付テモ亦同シク其相手方ノ佛國人ナルト土其人ナルトヲ問ハス苟モ佛  
國人ニ交渉スル以上ハ皆之ヲ裁判ス又領事ハ自國人ノ爲メニ命令規則ヲ發布  
シ之ヲ遵守セシムルノ權アリ又自國人ニシテ本國人ノ商業一般ノ利益ヲ害シ  
又ハ不品行ニシテ本國ノ名譽ヲ害スルモノト認ムルトキハ領事ハ直チニ之ヲ  
捕縛シテ本國ニ廻送スルノ權アリ又本國ニ於テ罪ヲ犯シタル自國人ヲ探索逮  
捕スルニモ毫モ土耳其政府ノ手ヲ藉ラス領事ノ特權トシテ自ラ之ヲ爲スコト  
ヲ得故ニ土耳其各國トノ間ニハ犯罪人引渡條約ヲ要セサルナリ

百八十一  
第四 一ホメツト教法即チ土耳其國法ニ於テハ總テ外國人ニ不動産ノ所有權  
ヲ付與セサルハ通則ニシテ各國モ亦皆之ヲ甘諾セリ然ルニ千八百六十七年  
至リテ法律ヲ發布シ外國人ニ土地所有權ヲ許與スルコトナレリ該法律第一條  
ニ曰ク土耳其帝國ニ在ル外國人ハ土耳其人ノ遵奉ス可キ不動産ニ關スル總テ  
ノ法律規則ヲ遵奉スルニ於テハ土耳其人同様ニ不動産ヲ所有スルノ權アル可  
シ又第五條ニ曰ク外國臣民ハ其本國政府カ土耳其ノ不動産ニ關スル法律規則  
ヲ承認スルニ非サレハ此法律ノ權利ヲ享有スルコトヲ得スト故ニ外國人ニ已  
ノ意思ノミヲ以テハ土地ノ所有權ヲ得可カラスト雖トモ何レノ國モ此法律規  
則ヲ承認セザルモノナシ其法律規則ノ主要ナルモノヲ舉示セハ不動産所有權  
ノ享有讓與賣買抵當ニ關スル法律ニ遵ヒ且其租稅ヲ拂ヒ又不動産ニ關シテ訴  
訟起リタルトキハ其相手方ノ何國人タルヲ問ハス土耳其ノ裁判所ノ管轄ニ屬  
スルコト等トス故ニ不動産ニ關スル訴訟ニ付テハ土地所有權ヲ許與スル代リ  
トシテ外國人ハ領事裁判權ヲ申立ツルコトヲ得サルモノトセリ其  
第五 各國ノ製造物ノ特許ニ關シテハ千八百八十八年寛大ナル法律ヲ制定シ



之ヲ保護セリ然レドモ此保護ヲ受クルハ外國ノ製造人カ土耳其ニ於テ製造場又ハ商店ヲ設クルモイニ限リ又其事ニ關シテ争起リタルトキハ土耳其ノ裁判所ニ提出セサル可カラズ然ルニ土國ニ製造場或ハ商店ヲ開ク外國人至テ稱ナルカ故ニ右ノ法律適用ノ場合從テ少シ加之ス此特許權ヲ執行スルニハ領事裁判ヲ見捨テ是非トモ土國ノ法廷ニ訴ヘサルヘカラサルカ故ニ外國人モ此法ヲ利用スルニハ頗ル躊躇スル如シト云フ

右ニテ第一篇ヲ講了セリ是ヨリ進ンテ第二篇ニ移ルヘキ順序ナルカ此第二篇ハ各國私法抵觸論ト題シ頗ル浩瀚ナル仕組ナルニ本學期モ最早切迫セル今日ヨリ始ムルモ僅々兩三回ニテ止メサルヲ得サル次第ニテ諸君ニ於テ左程利益モアラサルベシ故ニ予ノ本學期ノ講義ハ本回ヲ以テ終局トナスヘシ

終リニ荏苒ミ諸君ニ一言スヘキモノアリ昨年此講義ノ初メニ述ヘタル如ク予ノ此講義ハ簡單ナカラ完全セル一部ノ冊子ニ編成スヘキ考ニテ既ニ其計畫ヲナシ大體腹案モ出來居レリ然レドモ如何セン一學期間ニテハ到底之ヲ講了スルヲ得ス本年モ其半バ迄ニ及ハスシテ學期ヲ終ハルニ會セ

リ依テ來學期ヨリハ改メテ初メヨリ講述スルコトヲナサズシテ本學期ノ講義ニ繼續シ第二篇ヨリ始メ以テ本講義ノ全部ヲ結了セントス

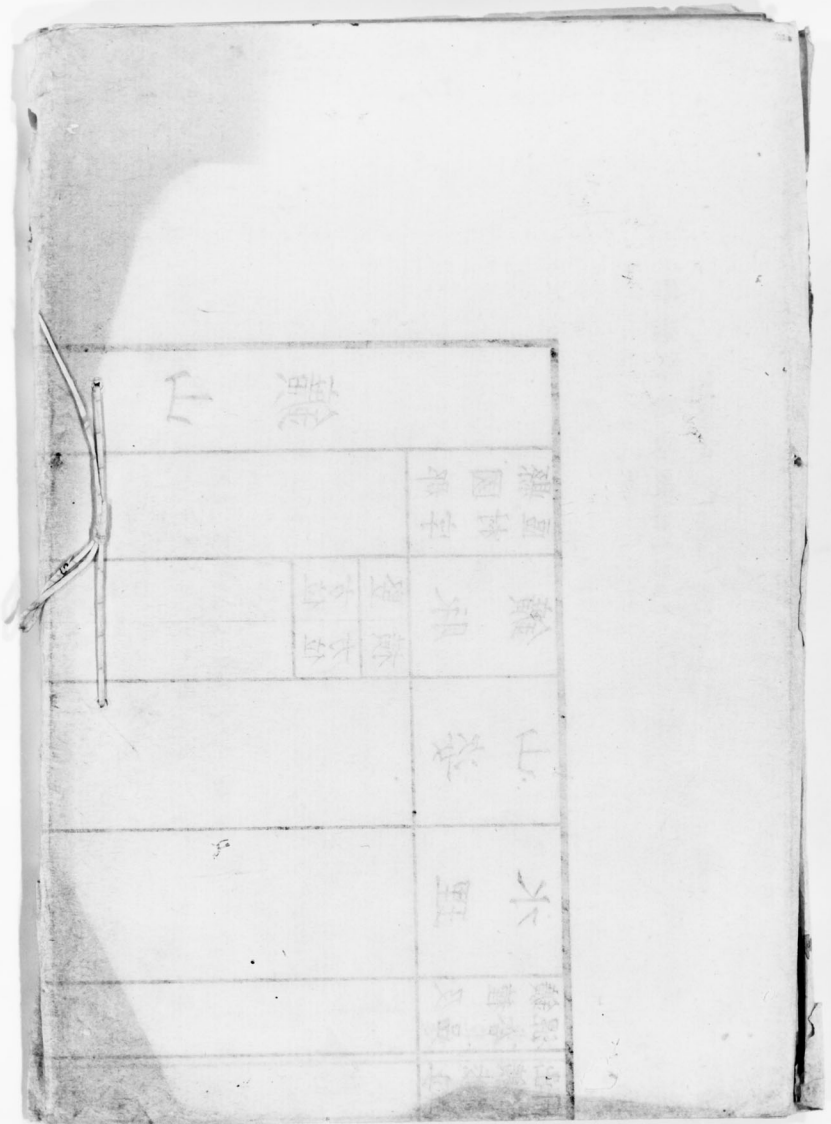
本講義ノ第一篇ハ恰モ比較的國際法トモ稱シ第二篇ハ應用的國際法トモ稱スヘシ而シテ二者實ニ唇齒輔車ノ關係ヲ有シ相待テ益々此法ノ妙ヲ味フコトヲ得ヘシ尤モ二篇以下ヲ講スルニ當リテハ諸君ハ既ニ其業ヲ卒ヒ此堂ニ登ラサルヘキモ或ハ講義錄上相見ルノ機ナキニアラサルヘシ幸ニ前後通讀セラレハ庶幾クハ諸君ヲ補スルコト渺ナカラサルヲ信ス

## 國際私法講義 第一編畢

(國際私法)







欽定

四庫全書

陳大猷

欽定

四庫全書

欽定

四庫全書

0422